

# 特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園

2006年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

# 特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園

2006年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

# 序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび方丈解体修理に伴う特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

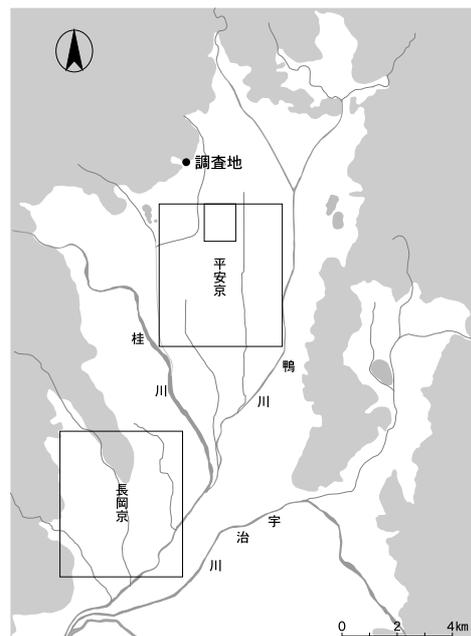
末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

平成18年3月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
所 長 川 上 貢

# 例 言

- 1 遺 跡 名 特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園
- 2 調査所在地 京都市北区金閣寺町 1 番地 鹿苑寺（金閣寺）境内
- 3 委 託 者 宗教法人 鹿苑寺 代表役員 有馬頼底
- 4 調査期間 2005年 8月 3日～2006年 2月 27日
- 5 調査面積 300m<sup>2</sup>
- 6 調査担当者 小檜山一良
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺 1：2,500）「衣笠山」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前）平面直角座標系（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺 構 番 号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。ただし建物・整地層・整地面・叩き面などについては別に番号を付した。
- 13 遺 物 番 号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 14 掲 載 写 真 村井伸也・幸明綾子・調査担当者
- 15 遺 物 復 元 村上 勉・出水みゆき
- 16 自然遺物分析 竜子正彦
- 17 基準点測量 宮原健吾
- 18 本書作成 小檜山一良
- 19 編集・調整 児玉光世・近藤章子・山口 眞  
・モンペティ恭代
- 20 文献資料や境内出土遺物などについて、鹿苑寺の山木康稔執事長、緒方香州執事の両師に便宜を図って戴いた。記して謝意を申し上げる。
- 21 石材の鑑定は、李 永一氏（日本地学研究会）にご教示を得た。記して謝意を申し上げる。



(調査地点図)

# 目 次

1 . 調査経過	1
( 1 ) 調査に至る経緯	1
( 2 ) 調査の経過	2
2 . 調査地の位置と環境	4
( 1 ) 位置と歴史的環境	4
( 2 ) 既往の調査	4
3 . 遺 構	8
( 1 ) 基本層序	8
( 2 ) 検出した遺構	9
4 . 遺 物	34
( 1 ) 遺物の概要	34
( 2 ) 土器類	34
( 3 ) 瓦類	39
( 4 ) その他の出土遺物	44
5 . ま と め	47

# 図 版 目 次

図版 1	遺構	1	第 1 面全景 ( 延宝期以降 南東から )
		2	方丈礎石群 ( 西から )
図版 2	遺構	1	掘立柱穴101
		2	束石抜き取り穴71
		3	大型礎石396と割付杭 ( 南から )
		4	束石と束石抜き取り穴105 ( 南東から )
図版 3	遺構	1	土器埋納17 ( 南から )
		2	束石抜き取り穴55 ( 東から )
		3	大型礎石428と割付杭 ( 東から )
		4	大型礎石429と割付杭・地固め跡 ( 南東から )
図版 4	遺構	1	第 2 面全景 ( 慶長期から延宝期 南東から )
		2	6・7区 蹲踞204 ( 北西から )

- 図版5 遺構 1 2・4・37区 基壇B(南西から)  
2 4区 雨落ち溝207(南東から)  
3 10区 雨落ち溝207(東から)
- 図版6 遺構 1 3区 石列242a・242b、化粧面278・279(南東から)  
2 5・11~16区他 東広縁から玄関部(北から)  
3 1区 礎石列・石組溝203(東から)  
4 3・6区 集石238(南西から)
- 図版7 遺構 1 4・37区他 基壇Bと南庭(南から)  
2 4区 雨落ち溝207と西壁(北東から)  
3 23区 化粧面296(西から)  
4 6区 化粧面219(北から)
- 図版8 遺構 1 12区 礎石266  
2 13区 礎石265  
3 17区 礎石281  
4 8区 抜き取り穴208(南から)  
5 8区 抜き取り穴210(南から)  
6 18区 抜き取り穴280(東から)  
7 大型礎石据え付け状況(北西から)
- 図版9 遺構 1 第3面全景(室町時代後期 南から)  
2 31区 基壇E西端と雨落ち溝315(西から)  
3 基壇E東端(東から)
- 図版10 遺構 1 4区 礎石317・319(南東から)  
2 1区 雨落ち溝315(北東から)  
3 4区 礎石317・抜き取り穴316(東から)  
4 4区 礎石抜き取り穴318・礎石317(東から)  
5 2・37区 集石320(南から)  
6 37区 整地面Db(北東から)
- 図版11 遺構 1 第4面 基壇Gと礎石328(室町時代中期 西から)  
2 32区 礎石抜き取り穴361(室町時代中期 北東から)  
3 33区 礎石抜き取り穴360(室町時代中期 南西から)  
4 1区 礎石328(北西から)  
5 4区 礎石抜き取り穴367(西から)
- 図版12 遺物 土器
- 図版13 遺物 土器・金属製品
- 図版14 遺物 軒瓦

- 図版15 遺物 1 軒瓦  
                   2 鬼瓦・雁振瓦・隅瓦
- 図版16 遺物 1 埴  
                   2 銭貨

## 挿 図 目 次

図1	調査位置図(1:5,000)	1
図2	調査前全景(南東から)	3
図3	作業風景	3
図4	報道発表	3
図5	遺構面保護	3
図6	調査区配置図(1:200)	3
図7	周辺既往調査位置図(1:2,500)	6
図8	基本層序図 1区南壁・4区西壁断面図(1:20)	8
図9	第1面遺構配置図 延宝期以降(1:100)	10
図10	第2面遺構配置図 慶長期から延宝期(1:100)	11
図11	第3面遺構配置図 室町時代後期(1:100)	12
図12	第4面遺構配置図 室町時代中期(1:100)	13
図13	1区西半遺構実測図(1:50)	14
図14	1区東半遺構実測図(1:50)	15
図15	2区遺構実測図(1:50)	16
図16	3区遺構実測図(1:50)	17
図17	4区遺構実測図(1:50)	18
図18	2・37区遺構実測図(1:50)	19
図19	2・5・11~16・22~24・34区遺構実測図(1:50)	20
図20	3・6・7・11・20~22・24・34区実測図(1:50)	21
図21	7・8・10・17・18・20・21・28区遺構実測図(1:50)	22
図22	30~33区遺構実測図(1:50)	23
図23	1・2区江戸時代建物A柱列実測図(1:100)	24
図24	4・10・37区雨落ち溝207実測図(1:40)	25
図25	土器埋納17	26
図26	3区石列242実測図(1:40)	27

図27	6・7区蹲踞204実測図(1:40)	28
図28	1・7区溝203実測図(1:40)	28
図29	3区集石238平面図(1:20)	29
図30	1・2・4・30・31・35・37区室町時代建物F柱列実測図(1:100)	30
図31	2・37区集石320平面図(1:20)	31
図32	1・2・32・33区室町時代建物H柱列実測図(1:100)	32
図33	1区埋納土壙415	33
図34	出土土器実測図(1:4)	35
図35	出土土器実測図(1:4)	37
図36	境内出土四耳壺実測図(1:6)	38
図37	出土軒瓦拓影・実測図(1:4)	40
図38	出土瓦拓影・実測図(1:4)	42
図39	天保銘獅子口	43
図40	煙管実測図(1:4)	44
図41	錢貨拓影(1:1)	44
図42	土器埋納17検出自然遺物	46
図43	『北山鹿苑寺絵図』	49
図44	慶長期方丈間取り図(1:200)	50
図45	延宝期方丈間取り図(1:200)	50

## 表 目 次

表1	周辺既往調査一覧表	7
表2	遺構概要表	9
表3	遺物概要表	34
表4	錢貨一覧表	45
表5	土器埋納17検出自然遺物一覧表	46

# 特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園

## 1. 調査経過

### (1) 調査に至る経緯

京都市北区金閣寺町に所在する特別史跡・特別名勝鹿苑寺（金閣寺）庭園内で、鹿苑寺方丈の解体修理が計画された。京都府教育委員会文化財保護課と京都市文化市民局文化財保護課により、指導された対象地区を、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受けて、発掘調査を実施することとなった。期間中は、京都府・京都市の文化財保護課を含めた鹿苑寺修理検討委員会（以下、検討委員会と略す）の指導の下に調査を実施した。

これまで鹿苑寺境内では、1988年度に金閣の北側を中心とした第1次調査を始めとして、2003年の境内東半にあたる総門の北東域において実施した第10次におよぶ継続した調査が実施され、それぞれに大きな成果を得ている。今回の調査地は、境内の中心部分に位置する方丈であり、第11次調査となる。

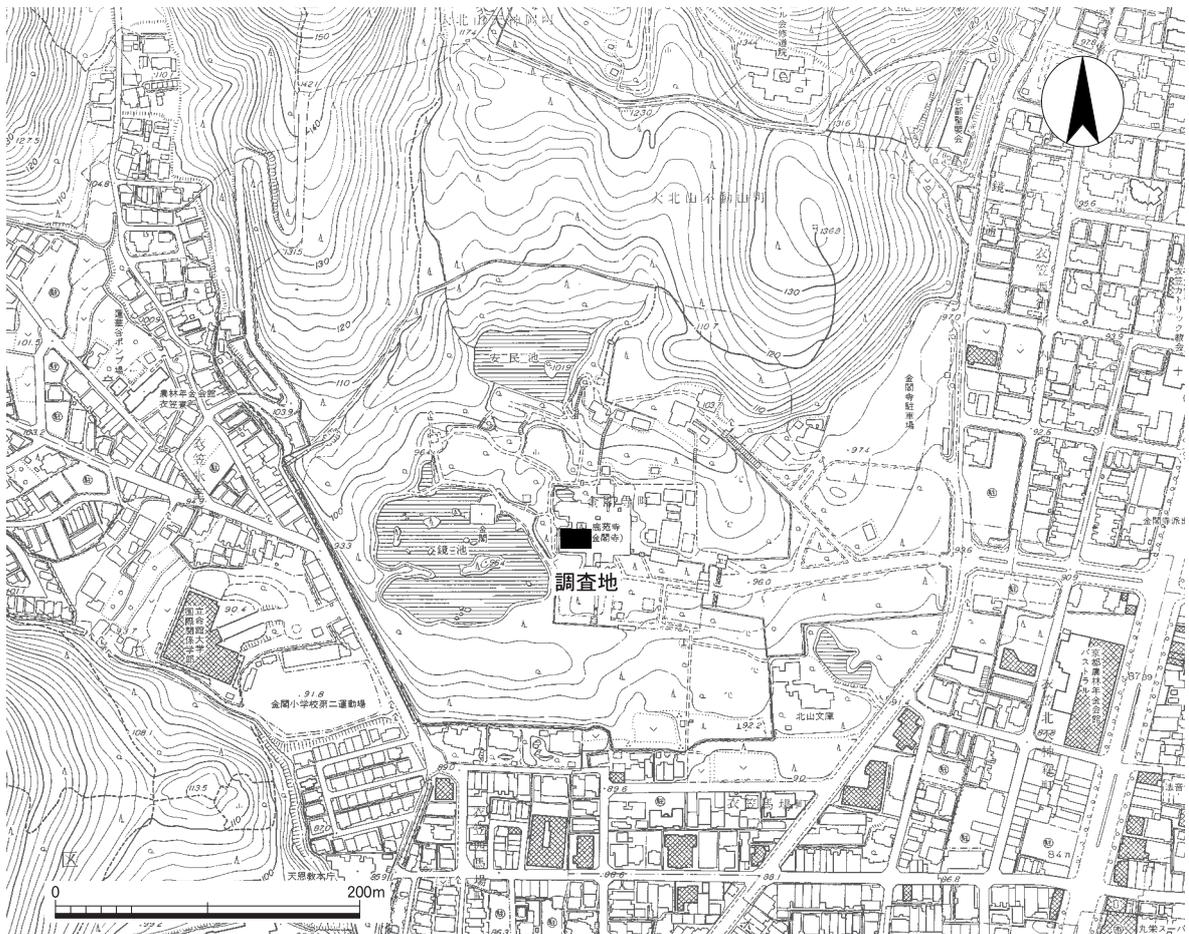


図1 調査位置図（1：5,000）

## ( 2 ) 調査の経過

今回の調査地となる方丈(本堂)は、鏡湖池の東岸に近接し、庫裏・書院・唐門などに接する鹿苑寺の中心部分である。方丈解体修理に伴い、地下遺構を確認するため発掘調査を実施した。調査の主要な目的は以下の2点とした。1, 方丈の規模とその変遷を調べる。2, 下層には、室町時代の北山殿、鎌倉時代の北山第、さらに平安時代の遺構が想定されるので、これらの遺構の確認を行うことであった。なお、検討委員会の指導により、調査では現在据え付けられている礎石および束石については、可能な限り移動を避け、必要最小限となる調査区の設定を行った。

調査はまず、建物解体後の状況を写真撮影し写真測量による実測図作成作業から開始した。そして解体された方丈の礎石が据え付けられている面を調査し、礎石の現状と据え替え状況を把握した。その後、礎石のない位置に、幅約0.5mのトレンチを東西3本・南北1本、幅約1mのトレンチを南北2本など計7箇所を設定し下層の調査を実施した。その結果、江戸時代前期の整地面を全域で確認し、前身の方丈とみられる建物とこれに伴う遺構を検出した。下層遺構の調査は、遺構面の保存を優先したため、部分的な掘下げとなったが、室町時代の2時期の遺構面を検出した。

その間、検討委員会の決定により、数度にわたり拡張区を設定し、最終的に調査区は37区を数えた。特に重点が置かれた部分は、6・7区で検出した<sup>つくばい</sup>蹲踞と中庭の広がりを確認するために6区の西側を拡張し、2区の南と北を新たに掘り北側を34区、南側を24区とした。また、2区の中央部で室町時代の遺構を確認するために南に拡張した部分を35・36区とした。なお、9・19区は拡張した37区に含まれた。第1面として調査した面積は約300㎡で、発掘調査で掘り下げた第2面以降の面積は約98㎡となった。

調査では、すべての掘下げを人力により行った。生じた排土は埋戻しを考慮してすべて土嚢袋に詰め、雨水などがかからぬようシートを被せて、境内数箇所に仮置きした。

調査の進め方については、検討委員会の委員に適宜ご指導をいただき、財団法人建築研究協会と協議を行って進めた。数回にわたって開催された検討委員会で発掘調査の経過報告を行い、検出した遺構および遺物についての概要説明を行った。

また、調査の途中で調査の成果を広報発表し、新聞紙面等にて広く市民に開示することができた。

調査の終了後、埋め戻しに先だって当研究所が京都府教育委員会文化財保護課の指導により遺構面の保護作業を建築研究協会、北村誠工務店と協議し実施した。具体的な処置として、柱穴などの窪んだ場所には砂を充填したのち、遺構面全体を不織布で覆った。

なお、基壇叩きの施工前、鹿苑寺山木康稔執事長に、現在まで方丈で使用していた敷<sup>敷</sup>塼と平瓦に「方丈発掘調査 平成十七年度」と揮毫していただき、方丈敷地内の3箇所(方丈北西隅、仏間北東隅、室中中央)に埋納し遺構面の明示とした。



図2 調査前全景（南東から）



図3 作業風景



図4 報道発表



図5 遺構面保護

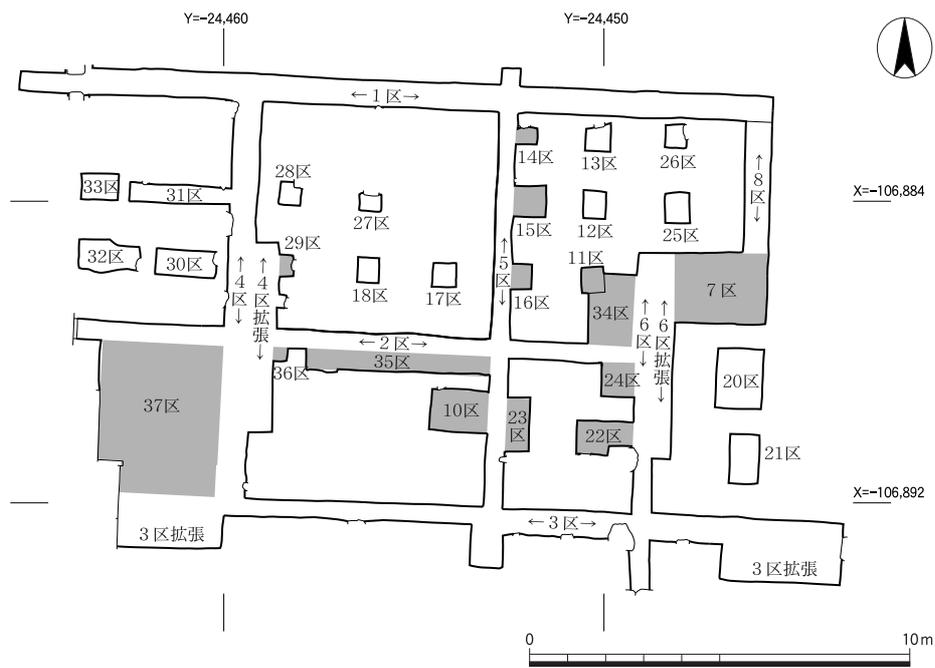


図6 調査区配置図（1：200）

## 2 . 調査地の位置と環境

### ( 1 ) 位置と歴史的環境

鹿苑寺は臨濟宗相国寺派の別格地で、正式には北山鹿苑寺と号する。舍利殿「金閣」がよく知られることから、金閣寺と通称される。

ここ鹿苑寺の位置する場所は、神祇官に仕えた伯家の領地であったが、承久2年(1220)に、後の太政大臣西園寺公経が尾張国の家領と交換して氏寺「西園寺」を建立したところである<sup>1)</sup>。この西園寺の北には、公経の別業として「北山第」が営まれた。

応永4年(1397)に、この西園寺の地を室町幕府三代将軍であった足利義満が譲り受けて「北山殿」を造営し<sup>2)</sup>、約10年間ここで政務を執った。義満の没後、金閣を除くほとんどの建物は解体され、南禅寺や建仁寺などに移築されるが<sup>3)</sup>、まもなく義満の菩提を弔うため勸請開山に夢窓疎石を迎え禅宗寺院として改められ、「鹿苑寺」とされた<sup>4)</sup>。

応仁・文明の乱では、鹿苑寺も戦場となり金閣などを除いた多くの建物が被害を受けたが、乱後しばらくして方丈や客殿の再建が始まり、復興がなされていったようである<sup>5)</sup>。

江戸時代に入ると、慶長期以降に西笑承兌和尚・鳳林承章和尚、延宝期には文雅慶彦和尚などが住持を勤め、徳川幕府や朝廷の援助を受けるなど寺領・寺域と施設の整備に努め、現在のような建物群と自然景観が調和した寺境内が形成されたとみられる。

平成6年(1994)には、「古都京都の文化財」として、ユネスコの世界文化遺産に登録されている。

文献にみえる江戸時代の方丈に関する主なものには以下がある。慶長7年(1602)に徳川家康の命で住持となった西笑承兌和尚により庫裏とともに新造される<sup>6)</sup>。寛永19年(1642)には柱の根継ぎ<sup>7)</sup>。正保4年(1647)には庭に岡松を植える<sup>8)</sup>。承応3年(1654)に屋根を葺き替える<sup>9)</sup>。寛文2年(1662)には客殿とともに修理が行われる<sup>10)</sup>。延宝6年(1678)には後水尾院の寄進を受けて文雅慶彦和尚により建て替えが行われた<sup>11)</sup>。また、天保6年(1835)には記録された獅子口などから屋根の葺き替えが行われたことを指摘できる。

### ( 2 ) 既往の調査

これまで鹿苑寺境内では、1988年の第1次から2003年の第10次に及ぶ継続した調査がなされ、今回の調査で第11次を数える。それら既往の調査については、調査地点図(図7)と一覧表(表1)で示した。

ここでは、本調査地点に近い鏡湖池東側の苑路における第2次調査(調査2)、さらに庫裏の北側にあたる第6次調査(調査6)・第7次調査(調査7)の成果を概観しておく。第2次調査では最も南のS区において、室町時代の花崗岩の切石を用いた礎石・景石・東西方向の溝(堀)などを検出した。唐門の南のV区では、景石と堀状の遺構となる可能性のある2本の南北溝などを検

出している。6次調査では、D区で15世紀後半に廃絶したとみられる井戸を検出している。7次調査では、室町時代の礎石建物・南北方向の溝・池などを検出している。このように室町時代の遺構を多く検出しているが、いずれも北山殿の主要な建物遺構とはいえなかった。

本調査地点は寺院の中心部に当たることから、室町時代の北山殿に関連する主要な建物遺構などの検出が期待された。また、境内の様子を描いた『北山鹿苑寺境内之図』<sup>13)</sup>の鏡湖池と伽藍配置の検討からは、江戸時代初期(慶長期)に建立された方丈の遺構も検出できると予想した。

#### 註

- 1) 『増鏡』「第五 内野の雪」日本古典文学大系87 「今後の御父は、さきにもきこえつる右大臣実氏をとゞ、その父、故公経の太政大臣、そのかみ夢見給へる事ありて、源氏中将わらはやみまじなひ給し北山のほとりに、世に知らずゆゝしき御堂を建てて、名をば西園寺といふめり。この所は、伯三位資仲の領なりしを、尾張国松枝といふ庄にかけ給てけり。(略)
- 2) 『足利治乱記』上(大日本史料七ノ一)「前相国義満公北山別業御建同御移事」同(応永四年ノ春 正月中旬ヨリ北山ノ麓ナル西園寺ノ領地ヲ、前相国(足利)義満入道々義公御隠居トシテ、西園寺殿ニ八河内国ニテ多ノ領ヲ与ヘラレテ、)
- 3) 『看聞御記』応永二十六年十二月十二日条 「抑聞、北山北之御所宸殿破壊了、南禅寺、建仁寺等御寄進云々、南之御所同破壊」
- 4) 『兼宣公記』応永二十九年三月二十一日条 「室町殿今朝渡御北山鹿苑寺」と、足利義持の当寺への渡御を伝える記事があることから、鹿苑寺の創建は正確にはわからないが、遅くともこの3月以前であったことは明らかである。
- 5) 『蔭涼軒日録』長享二年九月二十六日条 住持致智は新築なった客殿で鹿王院主維明以下の僧を招き詩会を開いた記事があることから、鹿苑寺内の伽藍の復興は進んでいたものと思われる。
- 6) 『鹿苑日録』慶長七年六月二十三日条 「鹿苑寺方丈并庫司新造」
- 7) 『隔蔘記』寛永十九年三月二十四日条
- 8) 『隔蔘記』正保四年十月三日条
- 9) 『隔蔘記』承応三年二月二十六日条
- 10) 『隔蔘記』寛文二年八月十八日条
- 11) 『鹿苑寺由緒書』元禄十六年「延宝年中文雅和尚住持之時、後水尾天皇依御寄進再興」(『金閣寺誌』所収)
- 12) 解体修理以前の方丈屋根に葺かれていた。本報告第3章遺物の項で報告。
- 13) 『北山鹿苑寺境内之図』正保二年九月(1645)

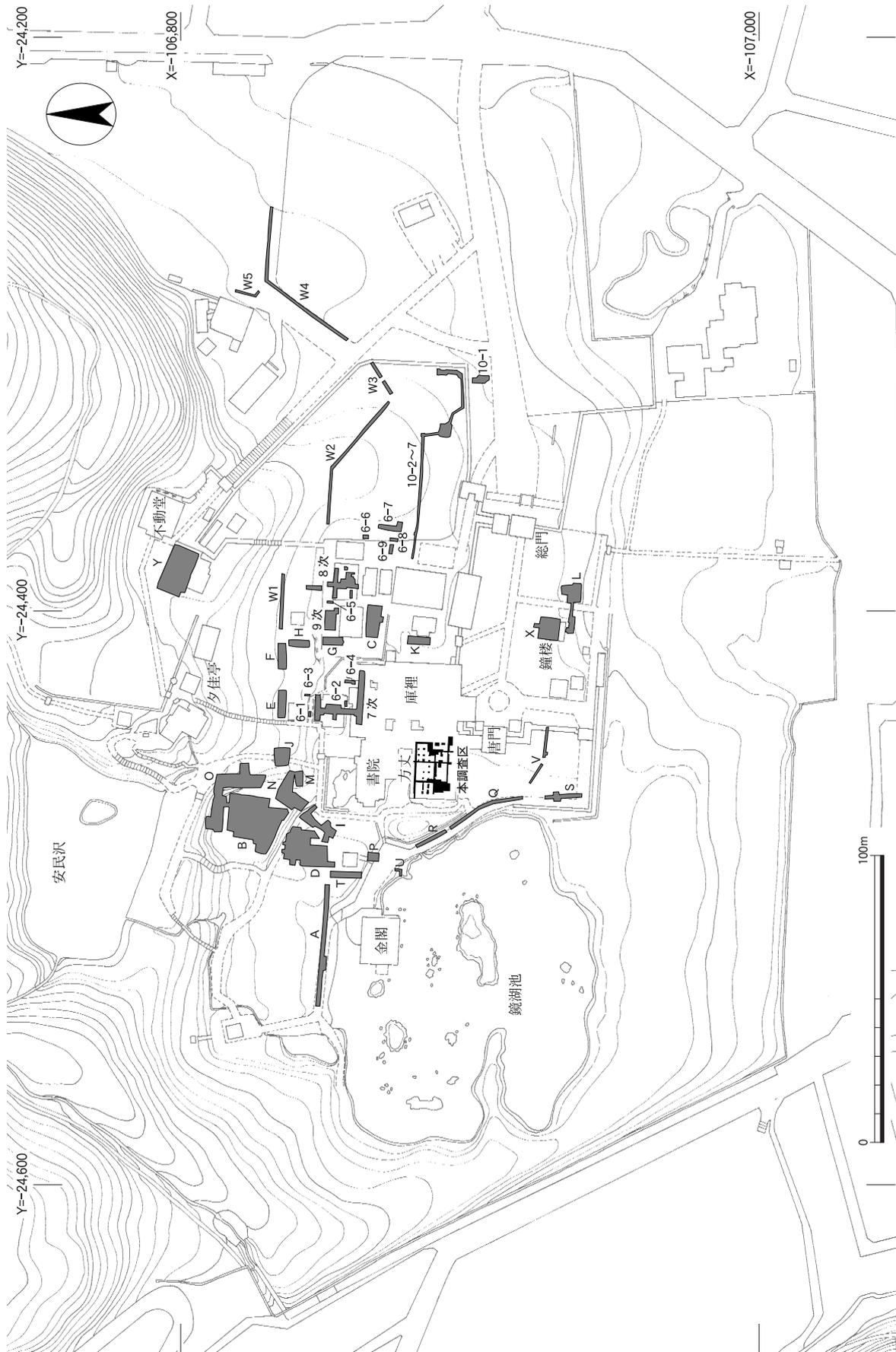


図7 周辺既往調査位置図(1:2,500)

表1 周辺既往調査一覧表

調査回数	調査区	面積	調査期間	調査概要	文献
第1次	A～D区	600㎡	1988.10.25～ 1989.04.03	室町時代の建物・廊・池・石組・溝・土壇、江戸時代の溝。室町時代の土師器・陶器・輸入陶磁器。軒瓦・瓦。	1・6
第2次	E～V区	722㎡	1989.07.04～ 1990.03.13	平安時代の築地・建物、鎌倉時代の石組、室町時代の建物・石組・石列・溝。室町時代の土師器・輸入陶磁器、木製品、修羅。	2・6
第3次	W1～ W5区	148㎡	1990.05.24～ 1990.07.31	平安時代の土師器皿埋納、室町時代の建物・池。室町時代の軒瓦・瓦。	3・6
第4次	X区	57㎡	1992.11.25～ 1992.12.18	平安時代中期の土壇・包含層、室町時代の溝、江戸時代の溝・廃棄土壇。平安時代中期の土師器、室町時代の土師器、江戸時代の陶磁器・瓦。	4・6
第5次	Y区	200㎡	1994.08.23～ 1994.10.21	室町時代の建物・柵列、桃山時代の整地層、江戸時代の石組溝・集石・落込み。室町時代の土師器・輸入陶磁器・石製香炉・軒瓦・瓦、桃山時代の土師器・施釉陶器・焼締陶器・瓦、江戸時代の土師器・陶磁器・輸入陶磁器・寛永通寶。	5・6
第6次	6-1～ 6-9区	42㎡	1997.11.07～ 1997.12.27	室町時代の井戸・池・整地層、江戸時代以降の整地層。鎌倉時代の土師器・瓦、室町時代の土師器・瓦器・瓦、江戸時代以降の土師器・陶器・磁器・瓦。	7
第7次	7次	115㎡	1999.03.03～ 1999.04.05	室町時代の礎石建物・溝・池、江戸時代の礎石建物・井戸・溝・暗渠。室町時代の土師器・焼締陶器・輸入陶磁器・瓦・漆器、江戸時代の土師器・施釉陶器・輸入陶磁器・瓦。	8
第8次	8次	64㎡	2001.04.23～ 2001.05.24	室町時代の柱列・柱穴・溝・土壇・堀、江戸時代以降の肥溜め・薬研堀・土塁。室町時代の土師器・輸入陶磁器・軒瓦・熨斗瓦・鉄製品、江戸時代以降の土師器・施釉陶器・瓦・塼。	9
第9次	9次	25㎡	2002.01.25～ 2002.02.05	室町時代の土壇、江戸時代以降の柱穴・溝・土蔵基礎・廃棄土壇。室町時代の土師器・輸入陶磁器・軒瓦・丸瓦・平瓦・面戸瓦。	10
第10次	10-1～ 10-7区	98㎡	2003.08.18～ 2003.10.10	平安時代の柱穴、鎌倉時代の柱穴・集石・溝・整地層、室町時代の礎石建物・柱穴・土壇・溝・整地層、江戸時代以降の溝。弥生土器、平安時代の土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・輸入白磁・軒瓦、鎌倉時代の土師器・須恵器・輸入白磁・軒瓦・瓦、室町時代の土師器・須恵器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・輸入白磁・軒瓦・瓦、江戸時代以降の土師器・瓦器・施釉陶器・磁器・軒瓦・瓦。	11
第11次	11-1～ 11-37区	300㎡	2005.08.03～ 2006.02.27	鎌倉時代の整地面、室町時代の礎石建物・柱穴・溝・集石・埋納土壇・整地面、江戸時代の礎石建物・蹲踞・石列・溝・集石・土壇・土器埋納・化粧面・整地面。平安時代の土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器、鎌倉時代の土師器・軒瓦、室町時代の土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器・輸入陶磁器・瓦・軒瓦・鬼瓦・塼・銭貨・金属製品。江戸時代の土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器・磁器・輸入陶磁器・瓦・軒瓦・鬼瓦・塼・銭貨・金属製品・石製品・貝製品。近代の銭貨。	本報告

参考文献(表1 周辺既往調査一覧表)

- 1 前田義明「特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- 2 前田義明「特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 3 前田義明「特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 4 前田義明「特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 5 前田義明「特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園」『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 6 前田義明ほか『特別史跡特別名勝 鹿苑寺(金閣寺)庭園 防災防犯施設工事に伴う発掘調査』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第15冊(財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
- 7 東 洋一「特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 8 南 孝雄「特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2000年
- 9 東 洋一「第8次調査」『特別史跡・特別名勝 鹿苑寺(金閣寺)庭園』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-9(財)京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 10 鈴木久男「第9次調査」『特別史跡・特別名勝 鹿苑寺(金閣寺)庭園』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-9(財)京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 11 高橋 潔『特別史跡・特別名勝 鹿苑寺(金閣寺)庭園』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-6(財)京都市埋蔵文化財研究所 2003年

### 3. 遺 構

#### (1) 基本層序

調査区内の基本層序は、北端の1区では江戸時代前期（延宝期）の整地層が大まかに4層、江戸時代初期（慶長期）の整地層が2層、室町時代後期の整地層が3層ある。以下、室町時代中期の整地層、明褐色系の砂礫層（地山層）となる。調査区南端の4区では、室町時代の整地層の下に平安時代の遺物を含む灰褐色から褐色の砂泥層が堆積している。

これら各時代の整地層は、ほぼ水平な状態で東西方向に広がり、現代攪乱は避雷針設置溝跡のみで、廃棄土壌などは見受けられない。

調査では、方丈解体後の現基壇上の四半敷範囲内の面を第1面とした。この面には、多くの礎石（束石）や礎石抜き取り穴が遺存している。また、2時期の叩き面を確認している。厚さが約0.6mある延宝期整地層下の第2面では、江戸時代初期（慶長期）の建物基壇と礎石などがある。その下層の第3面では、室町時代後期の基壇と礎石などを検出し、さらに第4面では、室町時代中期の基壇と礎石などを検出した。

なお、部分的に断ち割りを行い5面および6面の存在を確認している。5面は鎌倉時代の整地層とみられ、6面については平安時代の整地層の可能性がある。

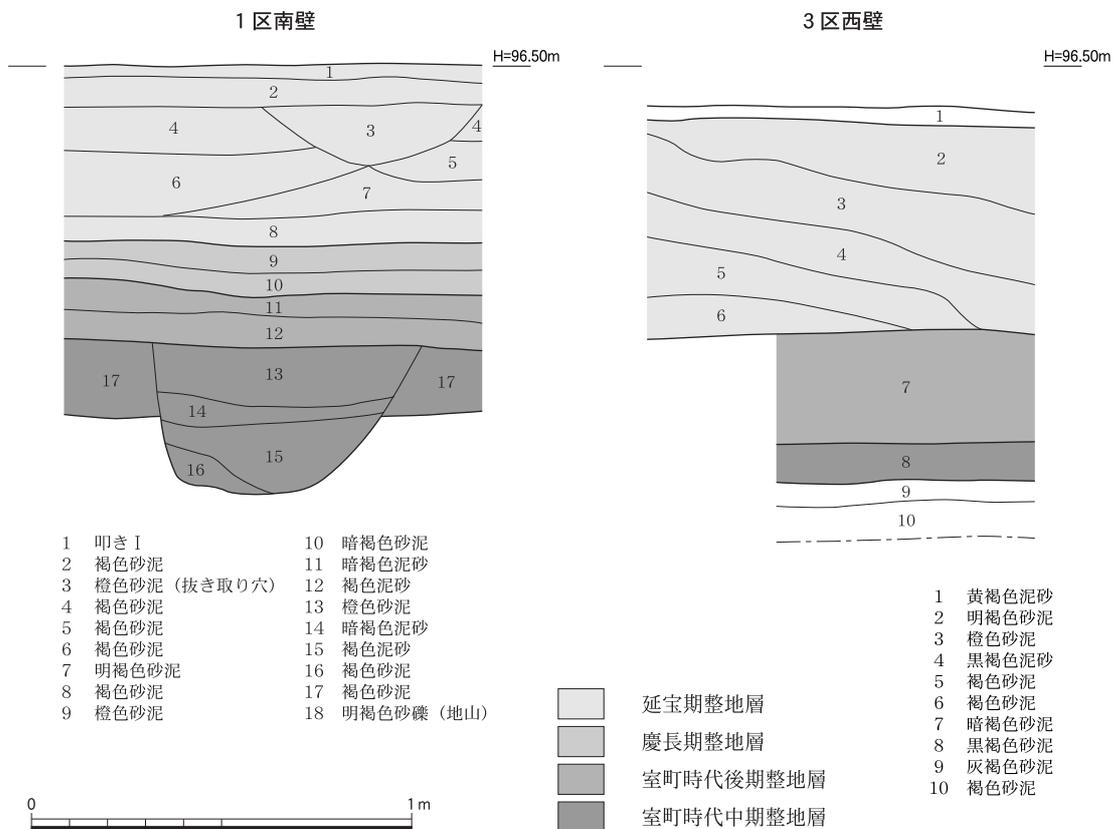


図8 基本層序図 1区南壁・4区西壁断面図（1：20）

## (2) 検出した遺構

遺構の時期は、室町時代・江戸時代以降のものがあり、わずかではあるが鎌倉時代のものも確認した。内容的には江戸時代の方丈基壇に伴う遺構が中心で、一部室町時代の遺構面がある。部分的に掘り下げた地点では、室町時代の2時期の建物基壇の一部も確認できた。

以下、第1～4面まで調査面ごとに検出した遺構の概要を述べる。

### 第1面の遺構(図版1～3、図9)

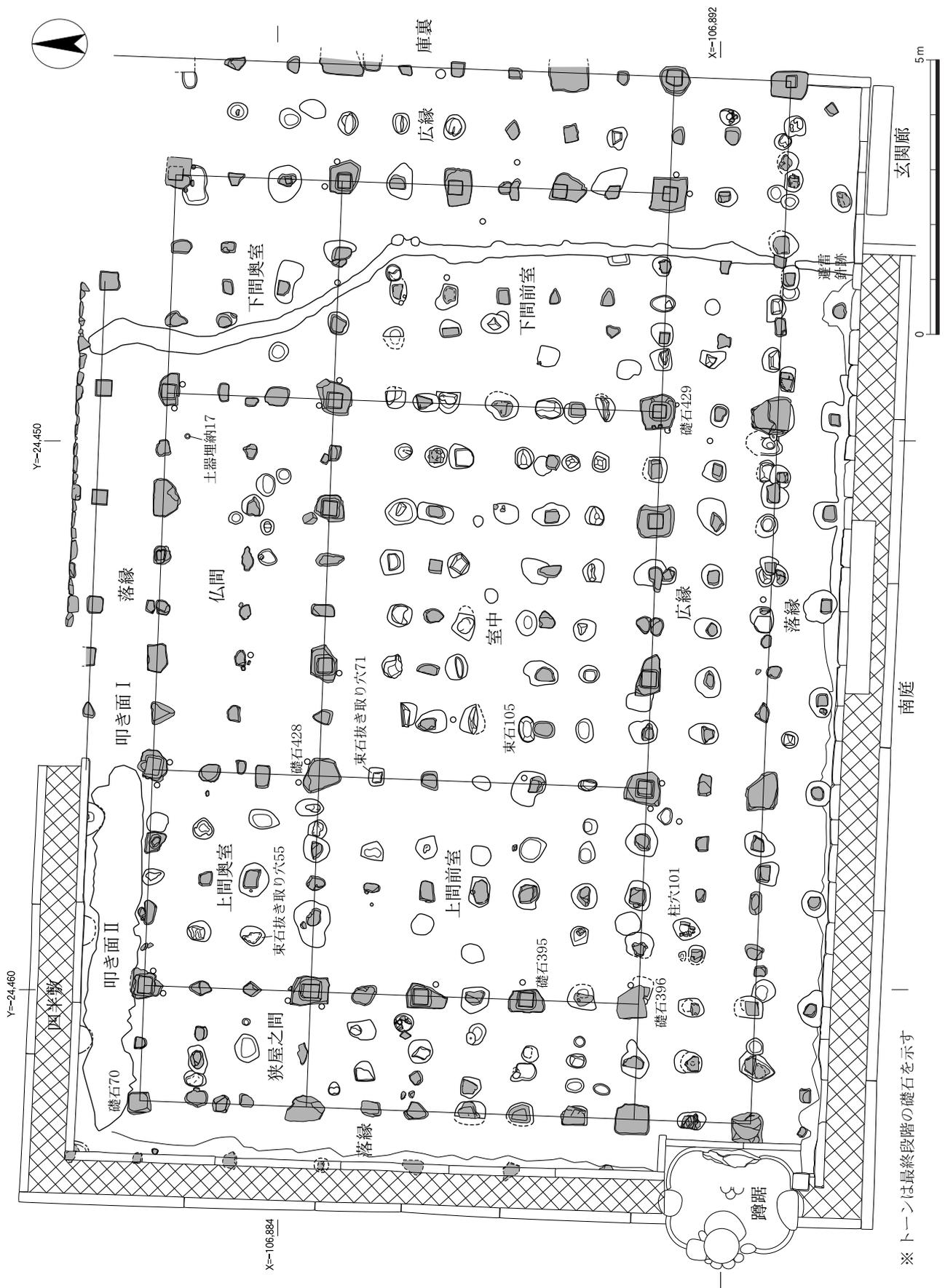
この時期の遺構には、礎石・礎石抜き取り穴・杭穴・土器埋納・整地層・叩き面などがあり、現在まであった方丈建物の基壇である。1区西部には厚い叩き面が部分的に遺存する。この叩き面は、大型礎石を据え付けた後に施していることと断面の観察から、基壇成立当初に施されたものとみられる。基壇上面のほとんどはこの叩き面が取り外され、薄い叩き面に変更されている。この叩き面を掘り込んで成立する小穴55・71などを数多く検出した。これらは、束石の据え替えに伴う抜き取り穴と考えた。抜き取り穴の間隔には、ばらつきがあるが、室中の中央部では南北方向に約1.2m間隔で4基、<sup>じょうかんぜんしつ</sup>上間前室の中央部では東西方向に約1.3m間隔で2基ずつを検出した。室中西側の束石抜き取り穴105は抜き取られた束石が、新たにすぐ南に据えられている例である。

大型の礎石は主要な柱石で、小型の石は束石とみられる。礎石の列びからは、西に1室と、中央に6室、東と南の2面に広縁をもつ東西9間半・南北五間半の方丈と南・北・西の3面に落ち縁が付属する平面形が復元できる。南北礎石列の方位は、北で東側に約2度振れており、金閣と同様の傾きである。6室を構成する大型礎石に近接して2箇所の杭穴がある例が礎石396・428・429を始めとした12基の礎石で確認できた(図版2・3)。この杭跡は、束石を正確に据え付けるための割付杭とみられる。礎石396では割付線を柱の北面と東面に合わせる。他には1箇所のみの例も数例確認している。また、大型礎石の上には小型の石を載せ、モルタルセメントで固定するものも多くみられる。礎石として使用されている石には、チャート、花崗岩、泥岩、砂岩などがある。

大型礎石の据え付けの方法は、平面や断面での検討の結果、掘形がないことから、礎石を据え

表2 遺構概要表

時代	検出面	遺構	備考
鎌倉時代	第5面	整地面	西園寺期か
室町時代中期	第4面	礎石建物、基壇、溝、埋納土壙、整地面	応仁の乱以前
室町時代後期	第3面	礎石建物、基壇、雨落ち溝、溝、集石、整地面	応仁の乱以後
江戸時代前期	第2面	礎礎石建物、基壇、蹲踞、雨落ち溝、石組溝、石列、集石、土壙、化粧面、整地層	慶長期
江戸時代中期以降	第1面	礎石、礎石抜き取り穴、土器埋納、杭穴、叩き面、整地層	延宝期以降



※トーンは最終段階の礎石を示す

図9 第1面遺構配置図 延宝期以降 (1 : 100)

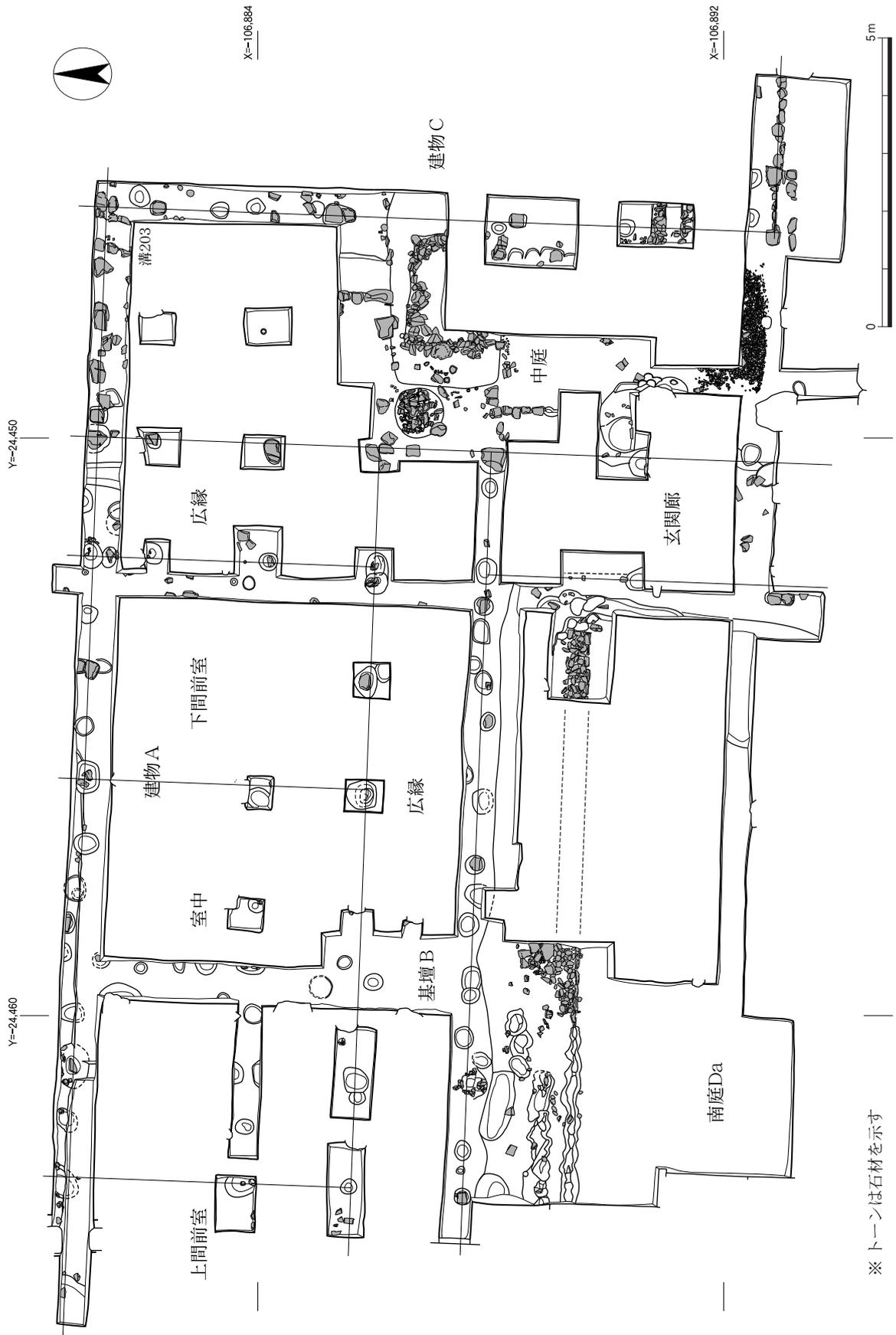


図10 第2面遺構配置図 慶長期から延宝期 ( 1 : 100 )

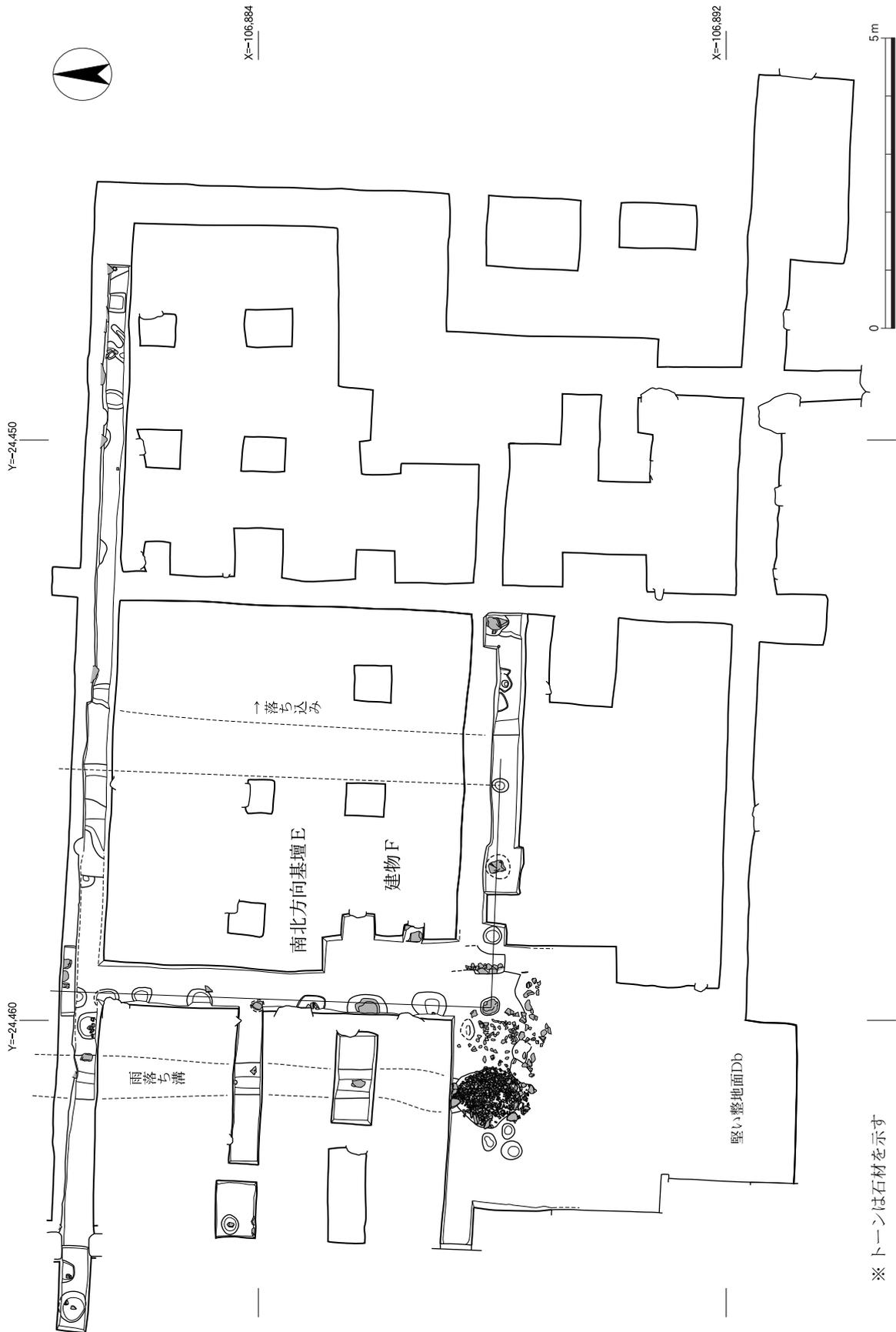
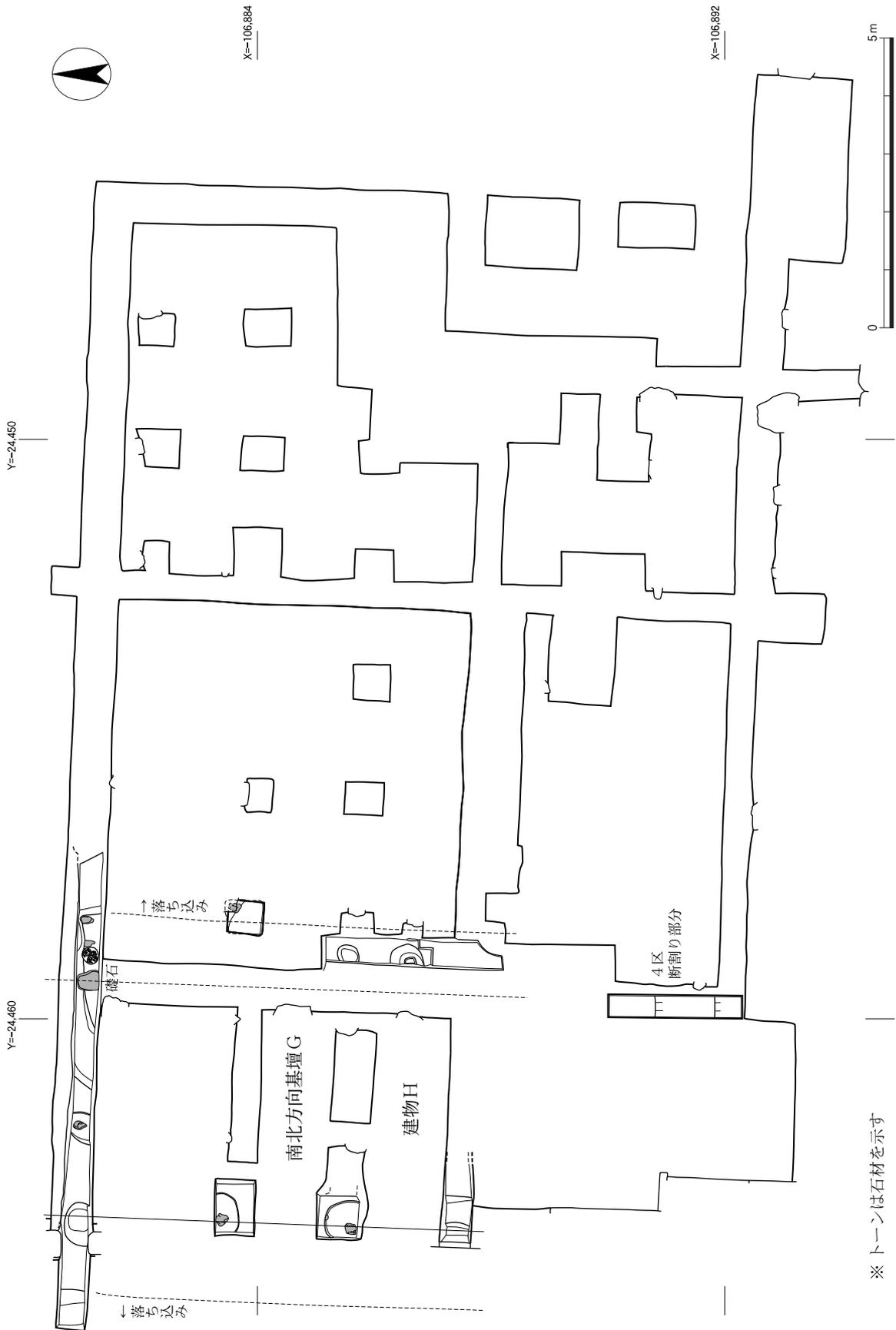
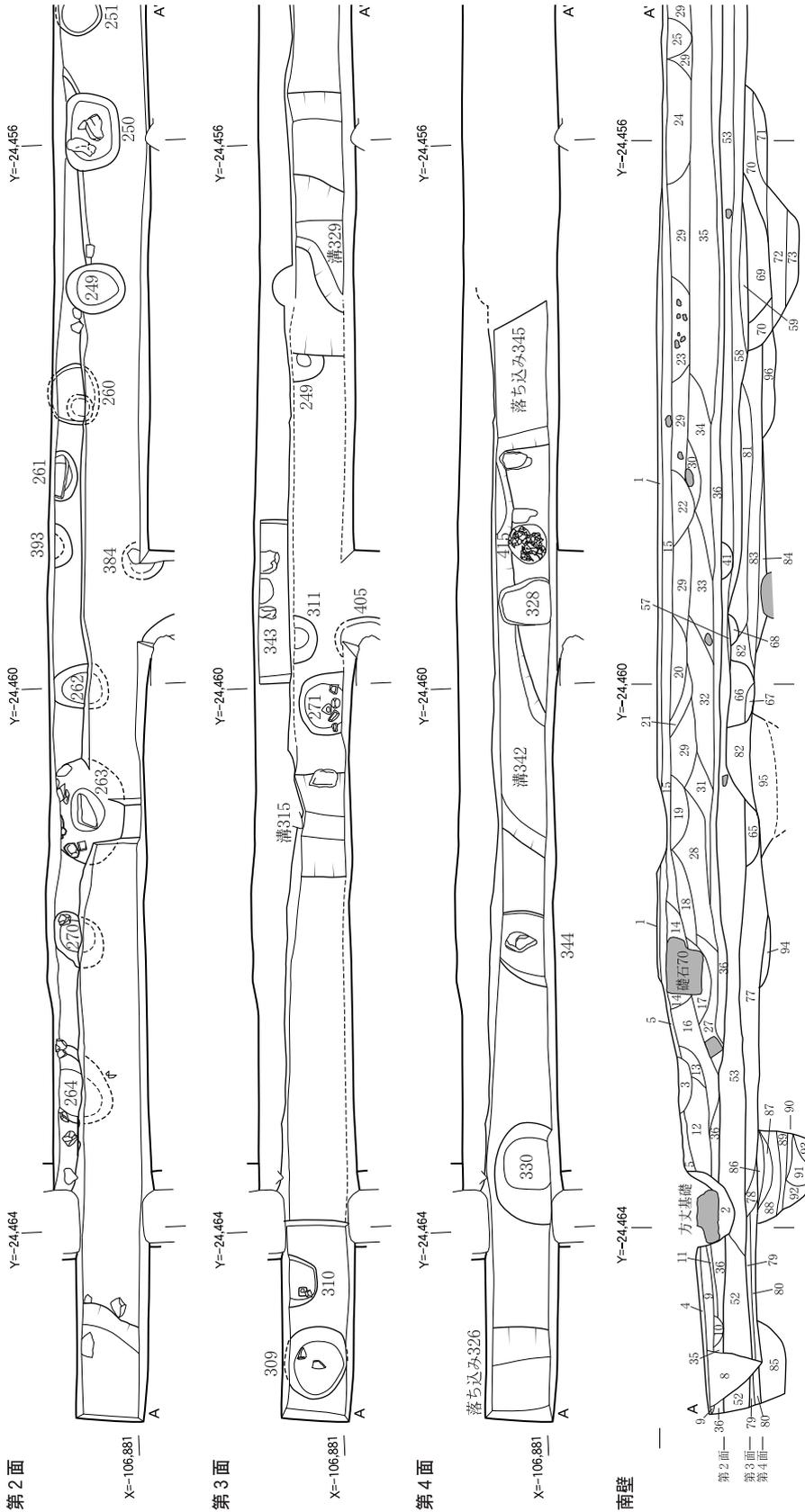


図11 第3面遺構配置図 室町時代後期(1:100)



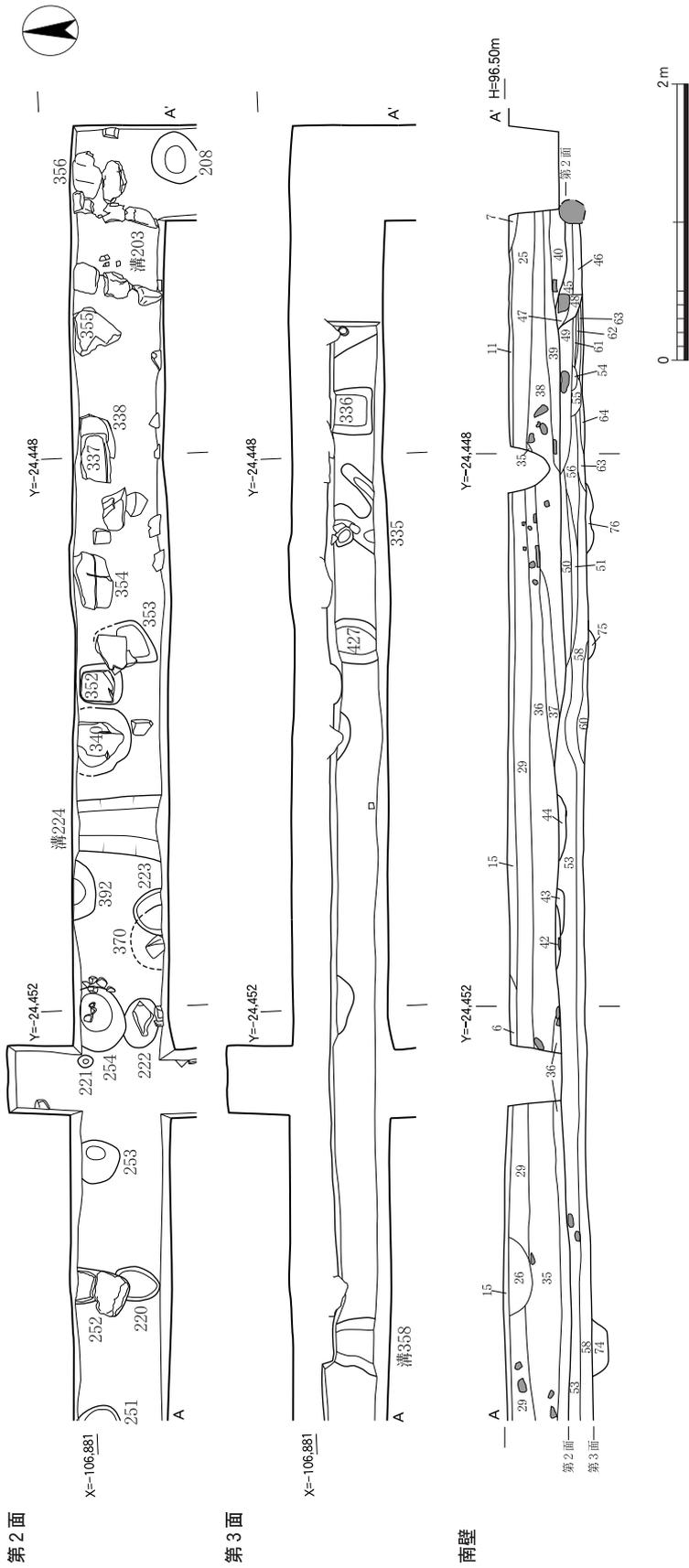
※ トーンは石材を示す

図12 第4面遺構配置図 室町時代中期 (1:100)



- 1 10YR4/2 灰黄褐色漆喰層 (叩き面II)
  - 2 7.5YR5/6 明褐色泥砂、10YR4/4 褐色砂泥、礫混 (基礎形状)
  - 3 10YR4/4 褐色泥砂、礫混 (礎石形状)
  - 4 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥、固くしまる
  - 5 10YR4/2 ~ 4/3 にぶい黄褐色砂泥、礫混、もろい
  - 6 10YR5/4 ~ 5/6 にぶい黄褐色砂泥、礫混 (礎石形状)
  - 7 10YR6/4 にぶい黄褐色砂泥、礫混 (礎石形状)
  - 8 10YR4/4 ~ 5/4 褐色 ~ にぶい黄褐色砂泥、礫少量混
  - 9 7.5YR5/6 明褐色砂泥、固くしまる 礫少量混
  - 10 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、礫少量混
  - 11 10YR3/4 明褐色砂泥、固くしまる
  - 12 7.5YR4/4 ~ 5/6 褐色 ~ 明褐色砂泥、礫・炭混
  - 13 7.5YR4/2 灰褐色砂泥、礫・炭混
  - 14 7.5YR4/6 ~ 5/6 褐色 ~ 明褐色砂泥、10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、炭混
  - 15 10YR5/4 ~ 5/6 にぶい黄褐色 ~ 黄褐色砂泥、礫混
  - 16 7.5YR3/1 黒褐色炭層、礫混
  - 17 10YR3/2 ~ 4/2 黒褐色 ~ 灰黄褐色砂泥、炭・礫混
  - 18 10YR5/6 黄褐色砂泥、礫少量混
  - 19 7.5YR4/3 ~ 4/4 褐色砂泥、礫少量混 (礎石形状)
  - 20 7.5YR4/4 ~ 4/6 褐色 ~ 明褐色砂泥、礫混
  - 21 7.5YR5/6 明褐色砂泥、成泥
  - 22 7.5YR5/8 褐色砂泥、礫混 (礎石形状)
  - 23 7.5YR5/6 明褐色砂泥、礫・炭混 (礎石形状)
  - 24 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥、7.5YR5/9 明褐色砂泥、礫混 (礎石形状)
  - 25 7.5YR5/6 明褐色砂泥、礫少量混 (礎石形状)
  - 26 10YR4/6 褐色砂泥、礫混 (礎石形状)
  - 27 10YR5/6 ~ 5/8 褐色砂泥、7.5YR6/8 褐色砂泥、礫混
  - 28 7.5YR5/6 明褐色砂泥、7.5YR5/4 にぶい黄褐色砂泥、礫混
  - 29 7.5YR4/4 ~ 5/6 褐色 ~ 明褐色砂泥、礫混
  - 30 7.5YR3/4 ~ 5/6 褐色 ~ 明褐色砂泥、礫混
  - 31 7.5YR5/4 ~ 5/6 にぶい褐色 ~ 明褐色砂泥、礫少量混
  - 32 7.5YR4/6 褐色砂泥、礫少量混
  - 33 7.5YR4/4 ~ 5/6 褐色 ~ 明褐色砂泥、礫混
  - 34 7.5YR5/4 ~ 5/6 にぶい褐色 ~ 明褐色砂泥、礫混
  - 35 7.5YR6/6 褐色砂泥、固くしまる 礫少量混
  - 36 10YR4/6 褐色砂泥、固くしまる
  - 37 7.5YR4/4 褐色砂泥
  - 38 10YR4/6 褐色砂泥、礫少量混
- (これより後の番号は図14を参照)

図13 1区西半溝構築断面図(1:50)



- (これより前の番号は図13を参照)
- 39 7.5YR4/6褐色砂泥、礫・炭少量混
  - 40 7.5YR4/4~4/6褐色砂泥、炭少量・礫混
  - 41 10YR4/4褐色砂泥 (柱穴384)
  - 42 7.5YR4/4~5/4褐色砂泥、礫混 (柱穴370)
  - 43 7.5YR5/4にぶい褐色砂泥、炭・礫混 (柱穴223)
  - 44 7.5YR4/4褐色粘質土、炭少量混 (溝224)
  - 45 7.5YR4/3~4/4褐色砂泥、7.5YR4/2灰褐色砂泥ブロック混、炭混 (溝203埋土)
  - 46 10YR3/3暗褐色砂泥、炭少量混 (溝203埋土)
  - 47 7.5YR4/4褐色砂泥、礫・土器片・炭少量混 (溝203掘形)
  - 48 10YR4/6褐色砂泥、炭少量混 (溝203掘形)
  - 49 7.5YR4/6褐色砂泥、炭少量混
  - 50 7.5YR5/6明褐色砂泥、炭少量混
  - 51 7.5YR5/6明褐色砂泥
  - 52 7.5YR4/3~4/4褐色砂泥、礫少量混
  - 53 7.5YR6/8暗褐色砂泥、礫少量混
  - 54 7.5YR5/6明褐色砂泥 (柱穴336)
  - 55 7.5YR3/4暗褐色砂泥、炭混 (柱穴336)
  - 56 10YR4/3~4/4にぶい褐色砂泥、粘質
  - 57 7.5YR3/4暗褐色砂泥~泥土
  - 58 7.5YR3/4暗褐色砂泥
  - 59 7.5YR4/6~5/6褐色~明褐色砂泥、5YR4/3にぶい赤褐色砂泥混
  - 60 7.5YR5/6明褐色砂泥
  - 61 7.5YR5/3にぶい褐色砂泥
  - 62 7.5YR5/8明褐色砂泥
  - 63 7.5YR4/4褐色砂泥
  - 64 10YR3/3暗褐色砂泥
  - 65 10YR5/4~4/4にぶい黄褐色砂泥 (溝315)
  - 66 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、礫・炭混 (柱穴271)
  - 67 7.5YR5/4にぶい褐色砂泥、礫混 (柱穴271)
  - 68 7.5YR4/2にぶい褐色砂泥、礫混 (柱穴405)
  - 69 7.5YR4/2~4/3灰褐色~褐色砂泥、炭少量混 (溝329)
  - 70 10YR3/4~4/3暗褐色~にぶい黄褐色砂泥~砂泥、礫混
  - 71 7.5YR4/3褐色砂泥
  - 72 10YR4/6褐色砂泥、礫混
  - 73 7.5YR5/6明褐色砂泥、炭少量混
  - 74 7.5YR7/6暗褐色砂泥、炭少量混、やや粘質 (溝358)
  - 75 7.5YR5/4にぶい褐色砂泥 (柱穴427)
  - 76 7.5YR5/4にぶい褐色砂泥 (柱穴335)
  - 77 10YR4/3~4/4にぶい黄褐色~褐色砂泥
  - 78 10YR3/2~3/3暗褐色~暗褐色砂泥
  - 79 10YR3/4暗褐色砂泥、炭・土器片少量混
  - 80 7.5YR5/6明褐色砂泥
  - 81 10YR3/4~4/4暗褐色~褐色砂泥、礫混
  - 82 10YR4/3~4/4にぶい黄褐色砂泥
  - 83 10YR4/4褐色砂泥、礫混
  - 84 10YR4/6褐色砂泥、小礫混
  - 85 10YR2/1~2/2黒色砂泥、炭・土器片少量・礫混 (落ち込み326)
  - 86 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (柱穴330)
  - 87 7.5YR4/3褐色砂泥、炭少量混 (柱穴330)
  - 88 7.5YR3/2~3/3黒褐色~暗褐色砂泥 (溝330)
  - 89 7.5YR4/3褐色砂泥、炭少量混 (柱穴330)
  - 90 7.5YR4/4~4/6褐色砂泥、礫少量混 (柱穴330)
  - 91 7.5YR4/2~4/3暗褐色~褐色砂泥、礫少量混、粘質 (柱穴330)
  - 92 7.5YR4/4~5/4褐色~にぶい褐色砂泥、礫少量混 (溝342)
  - 93 10YR4/4褐色砂泥、炭少量混 (柱穴330)
  - 94 10YR3/4~4/4暗褐色~褐色砂泥、炭少量混 (溝342)
  - 95 10YR3/4~4/4暗褐色~褐色砂泥、炭少量混 (溝342)
  - 96 10YR4/2~4/3灰褐色~にぶい黄褐色砂泥、炭少量混 (落ち込み345)
  - 97 7.5YR3/4暗褐色砂泥~泥土

図14 1区東半遺構実測図(1:50)

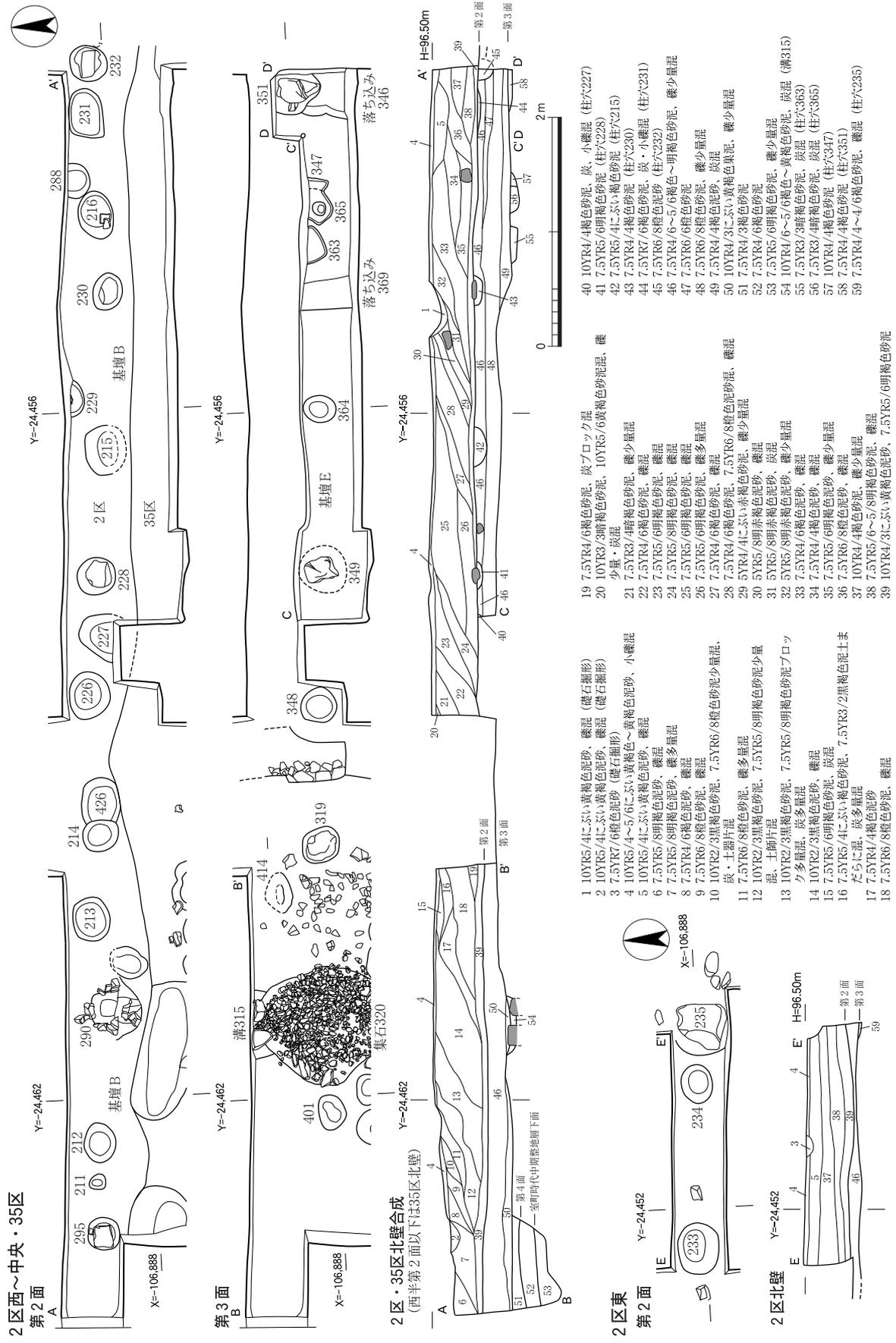
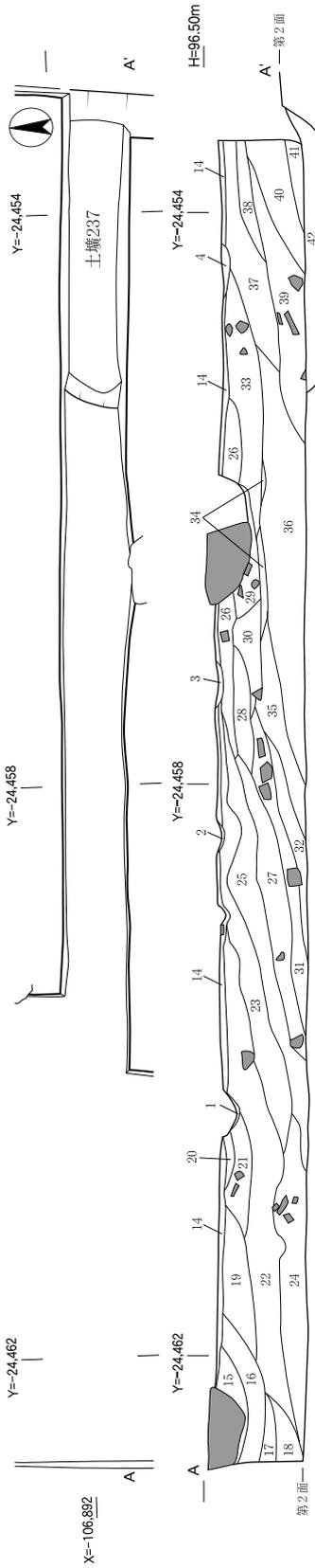
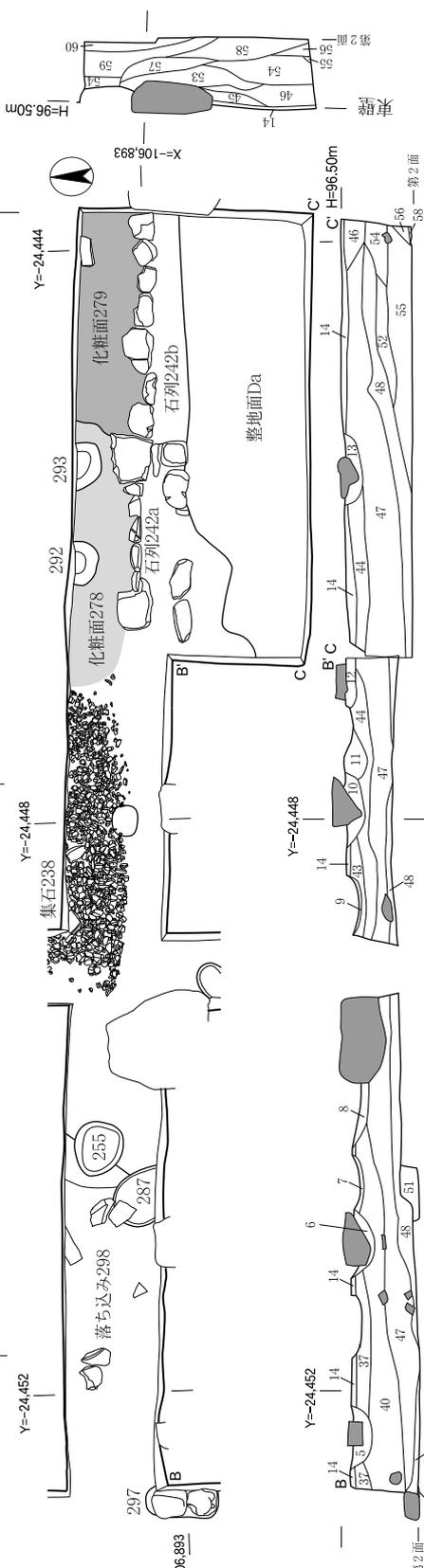


図15 2区遺構測図(1:50)

3区西半  
第2面



3区東半  
第2面



- 1 7.5YR6/6 橙色泥砂、小礫混 (礎石掘形)  
 2 10YR6/4にぶい黄橙色泥砂、礫混 (礎石掘形)  
 3 7.5YR6/4にぶい橙色泥砂、小礫混 (礎石掘形)  
 4 10YR4/6 褐色泥砂、礫混 (礎石掘形)  
 5 10YR5/6 暗褐色泥砂、礫混 (礎石掘形)  
 6 10YR4/6 褐色泥砂、礫混 (礎石掘形)  
 7 7.5YR6/8 褐色泥砂、礫混 (礎石掘形)  
 8 7.5YR4/6 褐色泥砂、礫混 (礎石掘形)  
 9 10YR4/6 褐色泥砂、礫混 (礎石掘形)  
 10 7.5YR5/8 明褐色泥砂、礫混 (礎石掘形)  
 11 7.5YR3/2~3/3 黒褐色~暗褐色泥砂、礫混  
 12 7.5YR5/4にぶい褐色泥砂、小礫混 (礎石掘形)  
 13 10YR5/4~5/6にぶい黄褐色泥砂、礫混 (礎石掘形)  
 14 10YR5/4~5/6にぶい黄褐色~黄褐色泥砂、礫混  
 15 7.5YR4/6~5/6 褐色~明褐色泥砂、礫混  
 16 7.5YR5/8 明褐色泥砂、礫混、固くしまる  
 17 7.5YR5/6~6/6 明褐色~橙色泥砂、礫混  
 18 7.5YR6/8 褐色泥砂、小礫混  
 19 7.5YR4/6~5/6 褐色~明褐色泥砂、小礫混  
 20 7.5YR4/3 褐色泥砂、小礫混、炭混  
 21 7.5YR7.5YR4/6~4/8 褐色泥砂、炭・礫混  
 22 7.5YR4/6~5/8 褐色~明褐色泥砂、礫混  
 23 7.5YR5/8~6/8 明褐色~褐色泥砂、小礫混  
 24 7.5YR4/4~4/6 褐色泥砂、礫混  
 25 7.5YR2/1~3/2 黒色~黒褐色泥砂、礫混  
 26 7.5YR4/4 褐色泥砂、礫混  
 27 7.5YR4/4 褐色泥砂、礫混  
 28 7.5YR3/3 暗褐色泥砂、礫混  
 29 7.5YR4/6 褐色泥砂、礫混  
 30 7.5YR4/4 褐色泥砂、礫混  
 31 7.5YR4/4 褐色泥砂、礫混  
 32 7.5YR2/2 黒褐色泥砂、小礫混、炭混  
 33 7.5YR4/4 褐色泥砂、礫混  
 34 7.5YR2/3~3/3 暗褐色~暗褐色泥砂、炭・小礫混  
 35 7.5YR4/3 褐色泥砂、7.5YR4/6 褐色泥砂、礫混  
 36 7.5YR4/4 褐色泥砂、礫混、炭混  
 37 7.5YR4/4~4/6 褐色泥砂、7.5YR5/6 明褐色・6/6 褐色・10YR4/4 褐色・10YR5/8 明褐色泥砂、礫混、炭混  
 38 7.5YR5/6~5/8 明褐色泥砂、小礫混  
 39 7.5YR4/6 褐色泥砂、瓦片・礫混  
 40 10YR4/4 褐色泥砂、瓦片・礫混  
 41 7.5YR4/3~4/4 褐色泥砂、7.5YR4/4~4/6 褐色泥砂、礫混  
 42 7.5YR3/4~4/4 暗褐色~褐色泥砂、礫混 (土塙237)  
 43 7.5YR4/6 褐色泥砂、礫混  
 44 7.5YR4/4~4/6 褐色泥砂、粘質、礫少量混  
 45 10YR4/6 褐色泥砂、礫混  
 46 7.5YR4/3 褐色泥砂、礫混  
 47 7.5YR5/6~5/8 明褐色泥砂、礫混  
 48 7.5YR4/3~4/4 褐色泥砂、礫少量混  
 49 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂、礫少量混  
 50 7.5YR4/4 褐色泥砂、小礫混 (柱穴297)  
 51 7.5YR5/6 明褐色泥砂、小礫混 (柱穴287)  
 52 7.5YR4/3~4/4 褐色泥砂、礫少量混  
 53 7.5YR4/4~4/6 褐色泥砂、炭・小礫混  
 54 7.5YR4/6 褐色泥砂、やや粘質  
 55 7.5YR4/3~4/4 褐色泥砂、礫少量混  
 56 7.5YR3/2~3/3 黒褐色~暗褐色泥砂、炭混  
 57 7.5YR4/6~5/6 褐色~明褐色粘質土  
 58 7.5YR4/6 褐色泥砂、粘質、礫混  
 59 7.5YR5/8 明褐色泥砂、礫・炭混  
 60 10YR4/4 褐色泥砂

図16 3区遺構実測図(1:50)



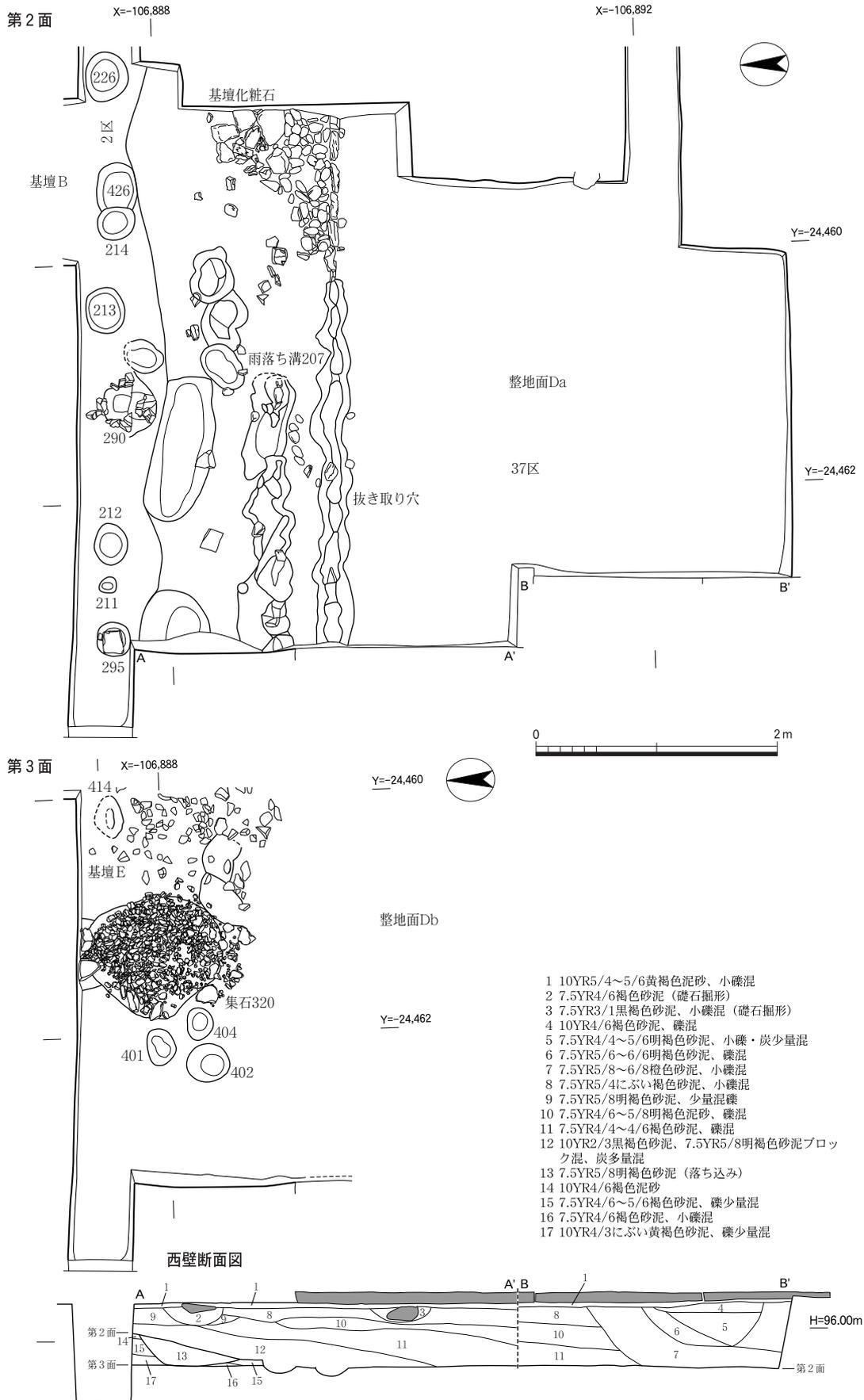
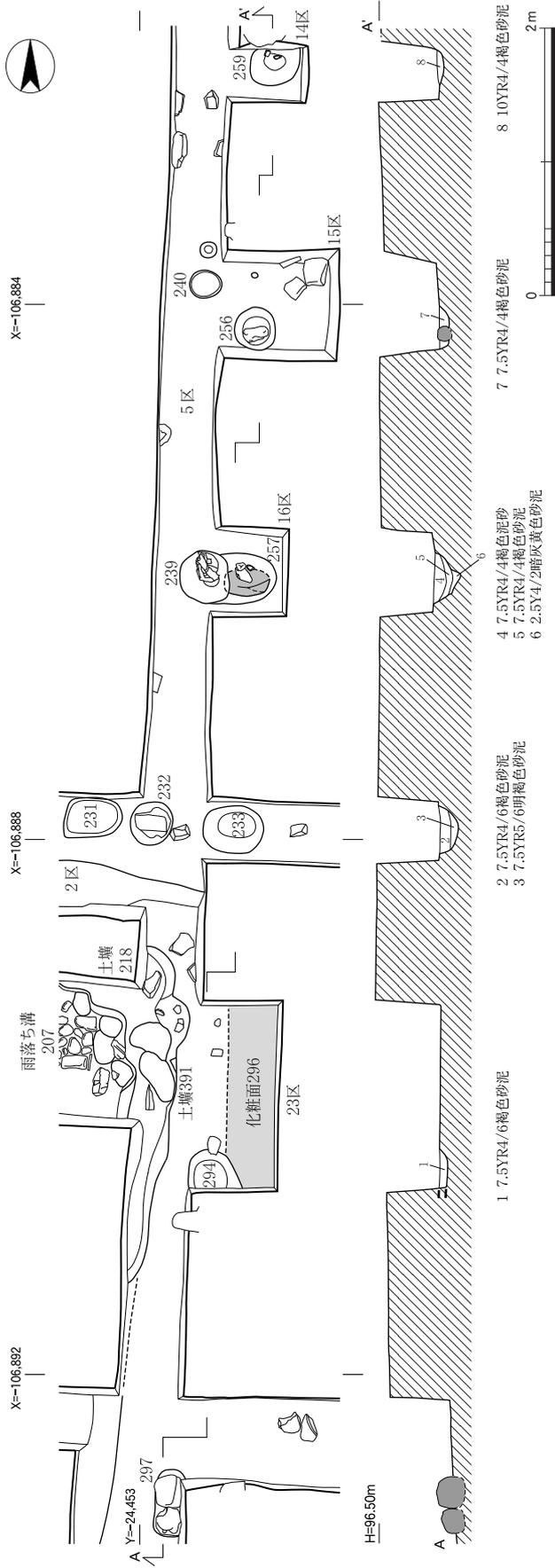


図18 2・37区遺構実測図（1：50）

南北柱列東



南北柱列中央

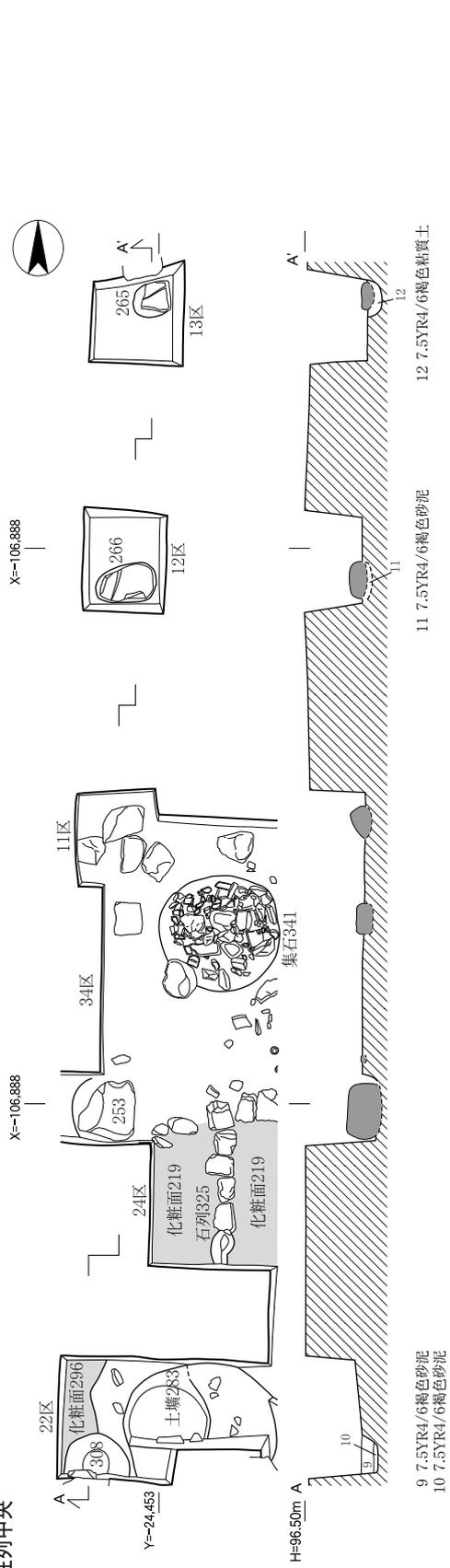


图19 2·5·11~16·22~24·34区遺構東測図(1:50)

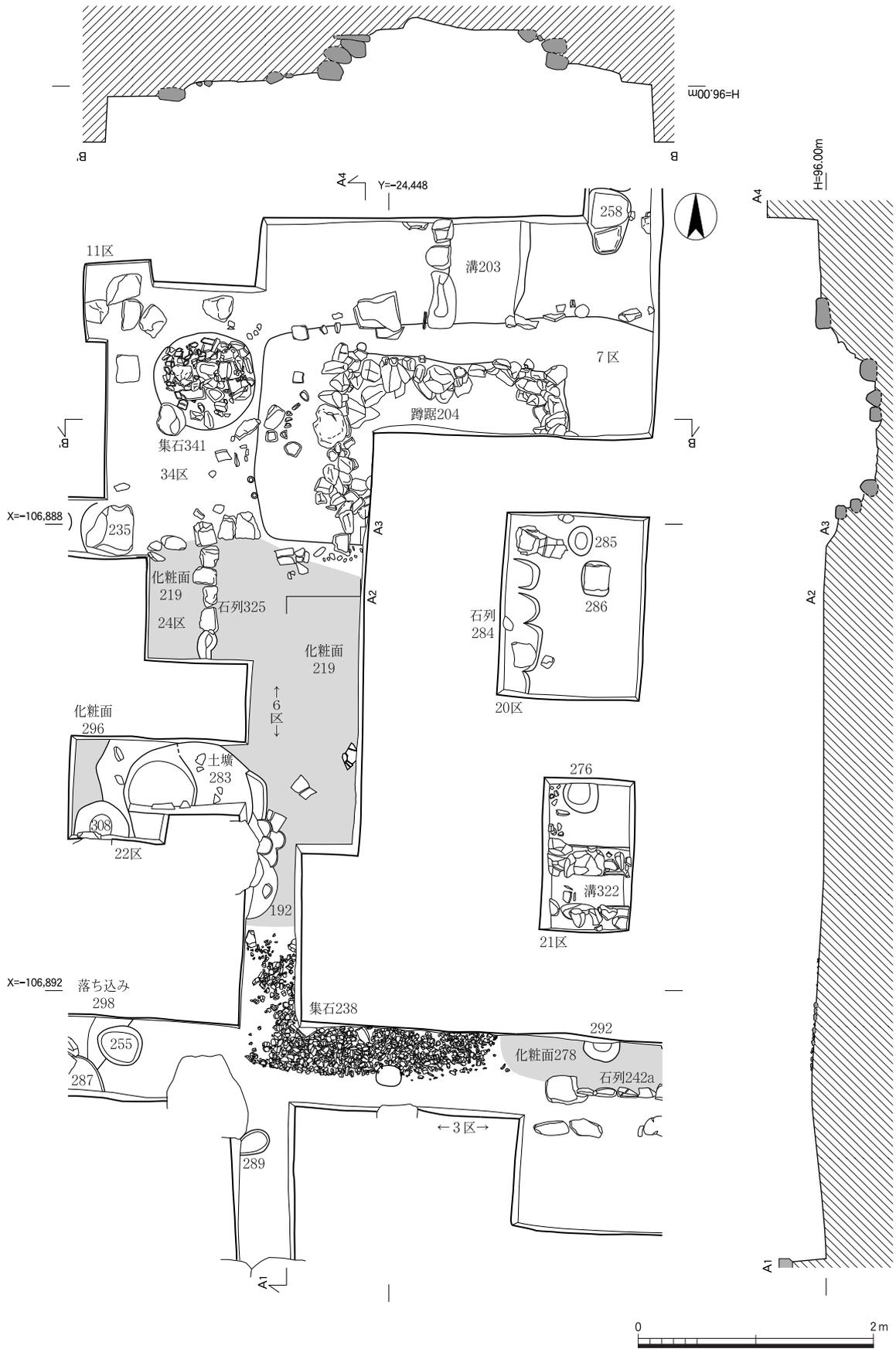
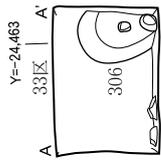


図20 3・6・7・11・20~22・24・34区遺構実測図(1:50)

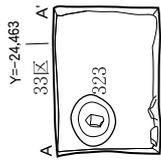


31・33区

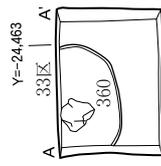
第2面



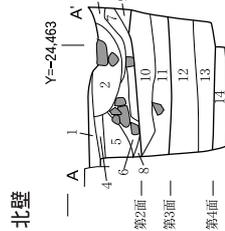
第3面



第4面

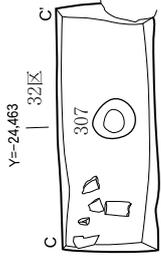


北壁

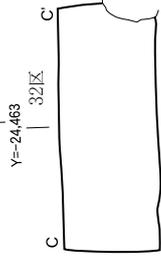


30・32区

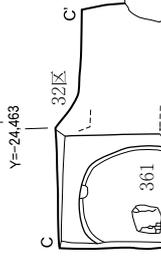
第2面



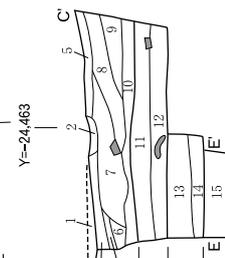
第3面



第4面



北壁



33区

- 1 10YR4/4褐色砂
- 2 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥、10YR6/8明褐色砂泥、礫混 (礎石掘形)
- 3 10YR3/3暗褐色砂泥、礫混 (礎石掘形)
- 4 10YR6/6明黄褐色砂泥、7.5YR3/1黒褐色砂泥混
- 5 7.5YR5/6黄褐色砂泥、礫混
- 6 10YR5/6明褐色砂泥、礫混
- 7 10YR2/2黒褐色砂泥、礫混
- 8 10YR4/6~5/6褐色~黄褐色砂泥、礫混
- 9 7.5YR6/8褐色砂泥、礫混
- 10 10YR6/6明黄褐色砂泥、礫混
- 11 7.5YR5/6明褐色砂泥、礫混
- 12 10YR4/4褐色砂泥、礫少量混
- 13 7.5YR3/4暗褐色砂泥、礫少量混
- 14 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥、2.5Y3/1黒褐色砂泥混、やや粘 (柱六360)

31区

- 1 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥、礫混 (礎石掘形)
- 2 7.5YR5/3にぶい褐色砂泥、小礫混 (礎石掘形)
- 3 7.5YR6/8~7/8橙色~黄褐色砂泥、礫混 (礎石掘形)
- 4 10YR5/4~5/6黄褐色砂泥、小礫混
- 5 10YR4/4褐色砂泥、礫少量混
- 6 10YR4/6黄褐色砂泥、礫混
- 7 10YR5/6明褐色砂泥、礫混
- 8 7.5YR5/6明褐色砂泥、礫少量混
- 9 7.5YR4/6~5/6褐色~明褐色砂泥、礫少量混
- 10 7.5YR5/6明褐色砂泥、礫混
- 11 7.5YR5/4にぶい黄褐色砂泥、礫少量混
- 12 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥、礫少量混 (柱六382)
- 13 7.5YR3/4~4/4暗褐色~褐色砂泥、礫少量混
- 14 7.5YR4/4~5/4褐色~にぶい褐色砂泥、礫少量混
- 15 7.5YR5/6明褐色砂泥、礫少量混
- 16 7.5YR5/4にぶい褐色砂泥 (溝316)

32区

- 1 10YR4/4褐色砂
- 2 7.5YR4/3褐色砂泥、小礫混
- 3 7.5YR5/6明褐色砂泥、7.5YR3/4暗褐色砂泥混、小礫混 (礎石基礎)
- 4 7.5YR4/4~4/6褐色砂泥、礫混 (緑石基礎)
- 5 7.5YR5/6明褐色砂泥、砂礫混
- 6 7.5YR4/4褐色砂泥、小礫混
- 7 7.5YR4/3褐色砂泥、小礫・灰混
- 8 7.5YR4/6~5/6褐色~明褐色砂泥、小礫混
- 9 7.5YR4/6~5/6褐色~明褐色砂泥、粘質
- 10 7.5YR3/4~4/3暗褐色~褐色砂泥、灰混
- 11 7.5YR5/3~5/6にぶい褐色~明褐色砂泥、礫・灰混
- 12 7.5YR5/6~5/8明褐色砂泥、礫・灰混
- 13 7.5YR4/6褐色砂泥、礫少量混
- 14 10YR4/4褐色砂泥、礫少量混
- 15 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 (柱六361)

図22 30・33区遺構測図 (1:50)

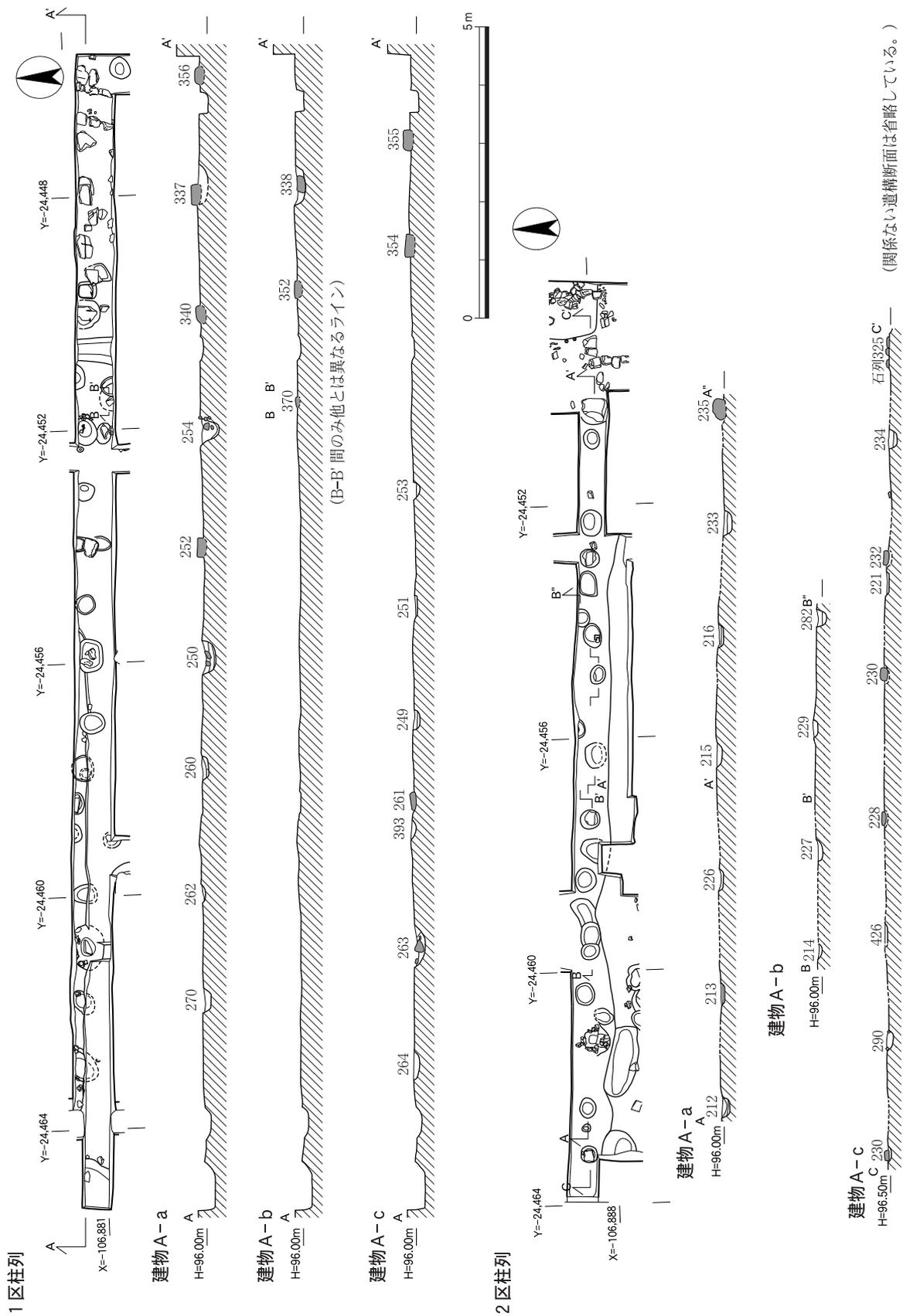


図23 1・2区江戸時代建物A柱列実測図(1:100)

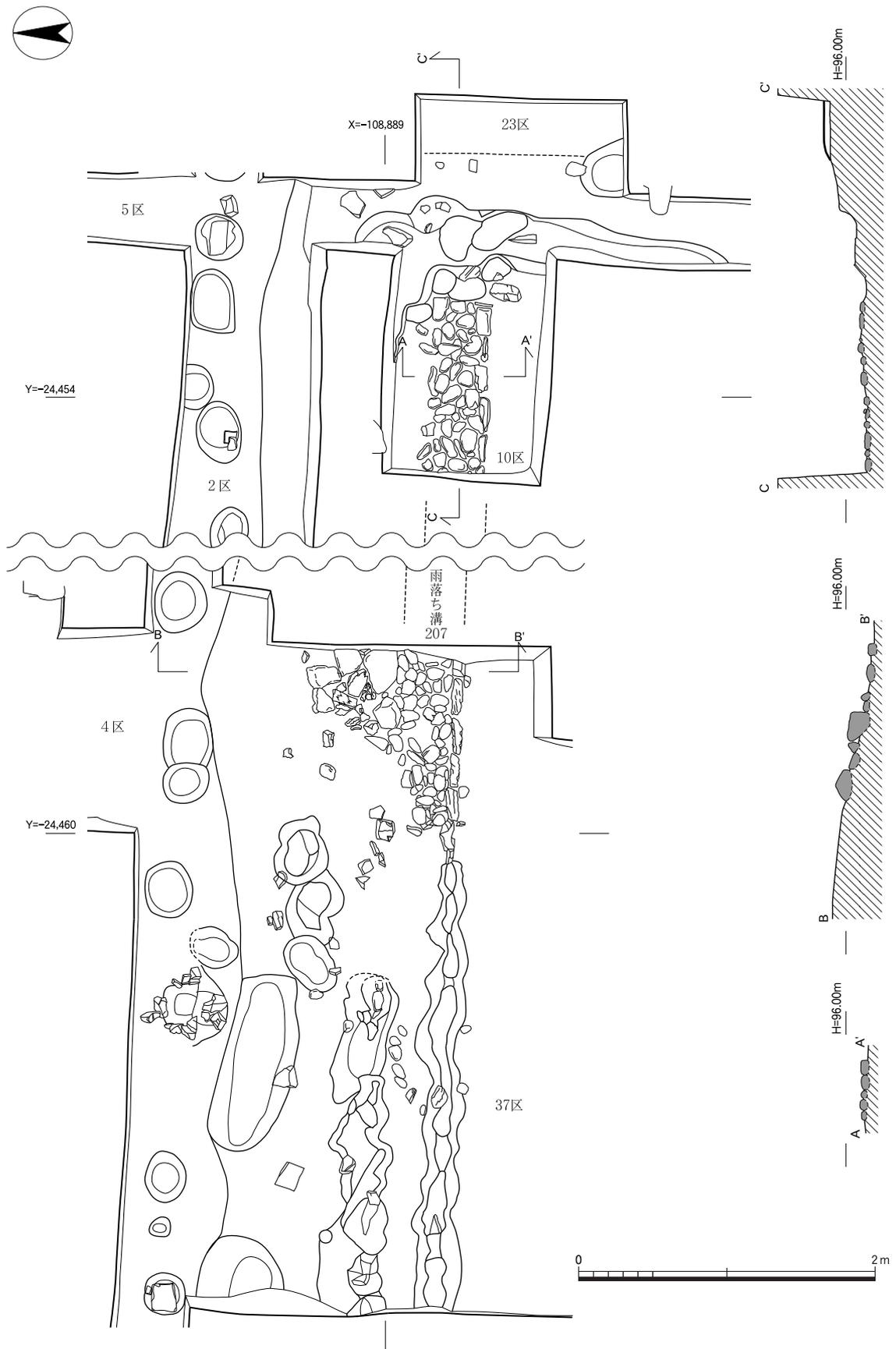


図24 10・37区雨落ち溝207実測図(1:40)



図25 土器埋納17

付けた後に、周囲に土を盛り上げていったことがわかった。また、礎石429下面の据え付け位置には、直径約10cmの円形平坦面が多くみられることから、丸太材の小口面などを使用して地盤を強く突き固め（図版3）、礎石の安定を図っていることが指摘できる。

1区西側で検出している基壇の高さは、0.3~0.4m（1尺強）である。

土器埋納17（図版3、図25） 仏間の北東隅の叩き面 上面で、土師器皿が2枚重ねで伏せた状態で出土した。皿の内側には炭化物が少量認められた。土師器皿は18世紀後半に属する。地鎮遺構の可能性が考えられる。なお、炭化物にはアカガシが確認されたほか特定不明の広葉樹や針葉樹があった。また、皿の内側の土からはコクゾウムシが発見されている。（図42、表5）

基壇整地層 現在の基壇の基盤となっている整地層 は礫混じりの橙色砂泥層が主体で0.4~0.6mの厚さをもち、方丈敷地ほぼ全域におよび上部が特に堅く整地されている。2~4区断面での堆積状況の観察からは、北東方向から南西方向に向かって順次整地していったことがわかる。一方、敷地南西部には黒褐色砂泥で炭混じりの粗い土が整地土とされており、この土層が含まれる範囲が沈下していたことがわかった。第2面までの間には堅く締まる叩き面や整地面はみられず、一度に盛土および整地されたものとみられる。

整地層から出土した遺物の時期は、17世紀後半に属することから、この基壇は延宝期に造営された方丈のものとみられる。方丈北西隅の礎石70の底部付近からは金銅製の懸仏（如意輪観音像）が出土した。出土状況からは、埋納に関する可能性が考えられる。

なお、現在の基壇の西・南辺、北辺西半の端部には、縁石で縁取った四半敷が廻らされ、軒先には雨樋が付けられているために地表に雨落ちの施設はもたない。また、西面の南端には、橋柱状の蹲踞つくばいが設けられている。

## 第2面の遺構（図版4、図10）

延宝期の整地層の下で検出した整地面である。礎石・礎石抜き取り穴・建物基壇・雨落ち溝・蹲踞・石組溝・集石・石列・化粧面・土壇・溝などの遺構がある。

建物A（図23） 1・2・4・11~18・22・23・28・30~33区で礎石と礎石の抜き取り穴を検出した。礎石や抜き取り穴の間隔は1.95~2.00m（7尺弱）で、重複関係から新しい順にa・b・cの3期のものが考えられる。東側から東西2間の下間前室、3間半の室中になるとみられる。a期には東西6間以上、南北3間半（以上）の東西方向の建物が復元できる。南と東の2面には1間幅の広縁が付く。また、22・23区ではともに礎石抜き取り穴を検出している。この部分は、柱間が9尺となり、東西1間、南北1間以上の南北方向の建物が復元できる。東の広縁から南に延びるため、建物南面の東端に取り付く玄関または玄関廊とみられる。この範囲の基壇上面

は、後述する砂敷きの化粧面296となる。礎石として使用されている石には、チャート、花崗岩、泥岩、砂岩などがある。

基壇B（図版5、図18） 4・5・35～37区では建物Aの基壇を検出した。建物南端の柱列から南側に下がりのある、高さがおよそ0.25mの亀腹状基壇である。4区では河原石を積み重ねた基壇化粧の一部が残り、南端には雨落ち溝207が付属する。この基壇は、現在の基壇より0.5m低い位置にある。使用されている石には、砂岩が多くチャートも少量含まれる。

雨落ち溝207（図版5、図24） 4・10・37区では、基壇Bの南に接して東西方向の石組雨落ち溝を検出した。北側は基壇化粧の外側石列と兼用され、南側は長径約40cmのチャートや花崗岩の自然石を並べて南縁石とする。内側底面には長径20～30cm大の黒色で丸く扁平な石のみを敷き詰める。10区東端では南北方向の縁石の抜き取り穴を検出した。南北方向の玄関廊の西側に推定されることから雨落ち溝が南へ屈曲しているものとする。37区では、ほとんどの石材が抜き取られている。抜き取り跡からは、雨落ち溝がさらに西側に延びる状況が認められる。底面として敷かれている石は、ほとんどが泥岩でチャートや頁岩が少量混じる。円礫度の高い石が選択されている。

建物C（図16・21） 3・7・8・20・21区では南北6間以上の建物の西端が復元できる。礎石の間隔は1.95～2.00m（7尺弱）で、重複があり2時期が考えられる。

石列242（図版6、図16・26） 3区では、建物Cの南端とみられる東西方向の石列242aと242bがある。当初はクランク状に屈曲する242bが造られ、後に直線状に並ぶ242aに造り替えられる。傾きは建物Aと同一である。石列の北側には、小礫を敷いた化粧面278・279がある。化粧面278は西側に位置し、1～3cm大の褐色の小石が敷かれる。東側の化粧面279は1cm大の黄褐色の小石を敷き詰めている。ボーリング調査によると、これら化粧面の下層には、礫を充填してい

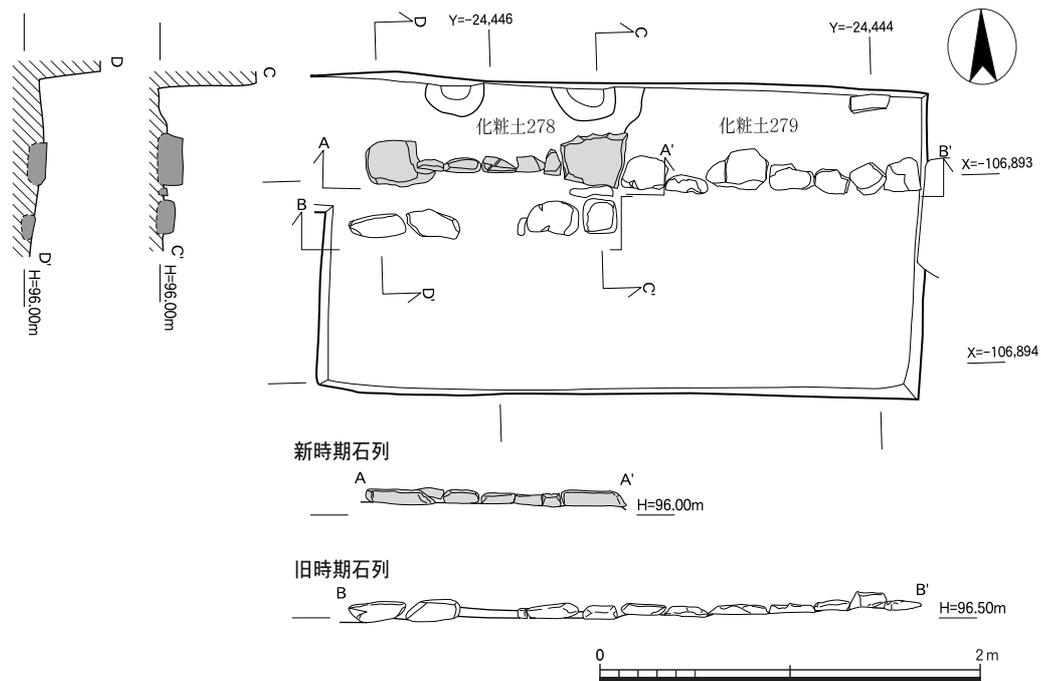


図26 3区石列242実測図（1：40）

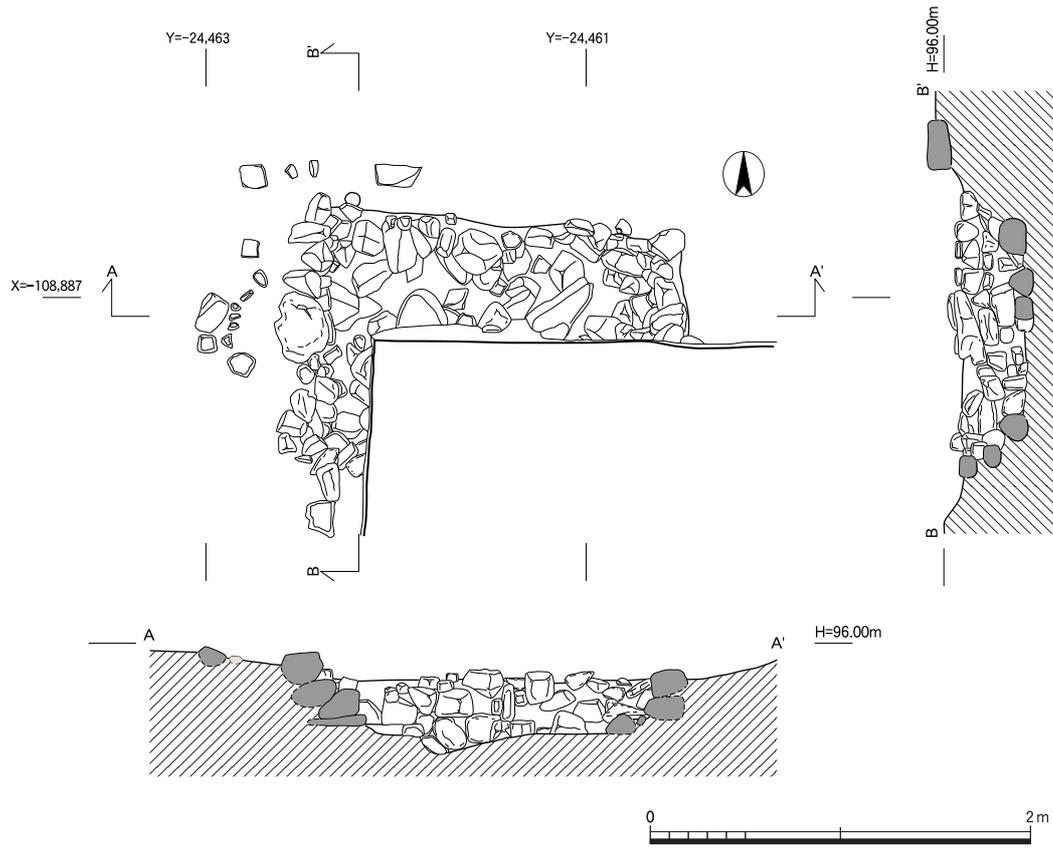


图27 6·7区蹲踞204实测图(1:40)

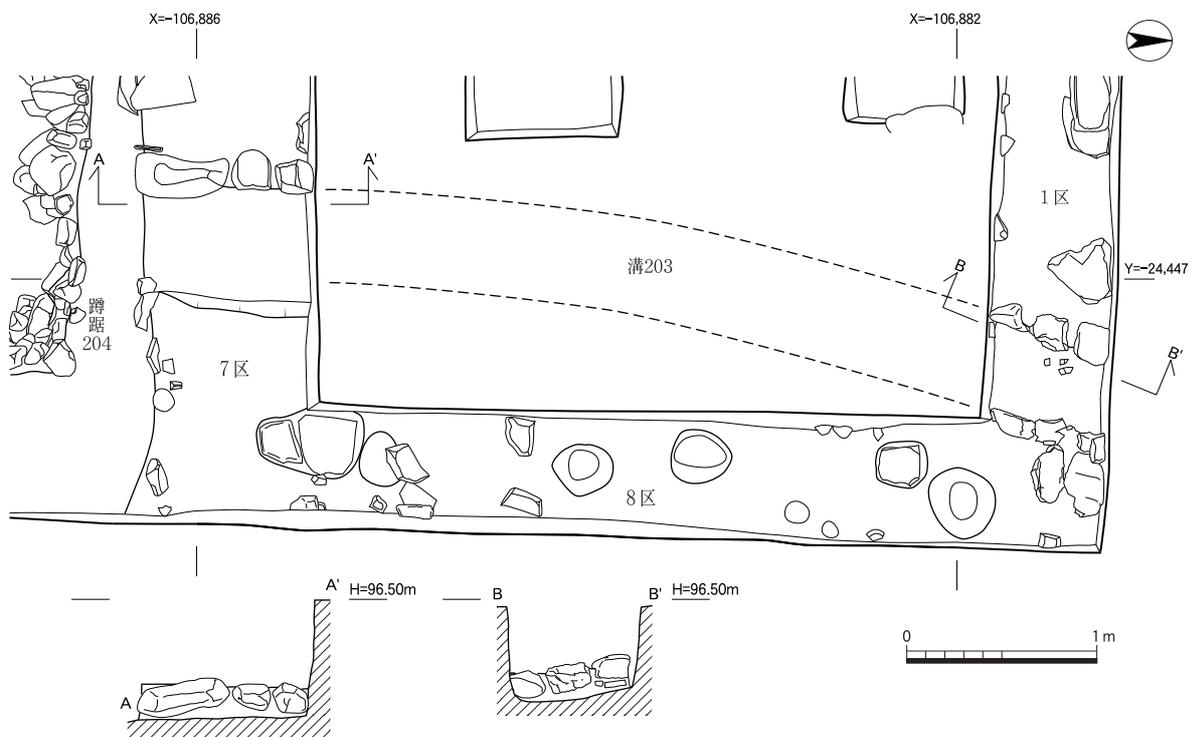


图28 1·7区沟203实测图(1:40)

る遺構が存在するとみられる。

中庭（図20） 6・7・24・34区の建物Aと建物Cの間の部分は中庭と考える。建物Cに接して蹲踞204がつくられ、北からは後述する石組溝203が蹲踞に接続する。南側には排水機能をもつとみられる集石238がある。炭粉を撒いた黒い化粧面219がある。

蹲踞204（図版4、図27） 6・7区で検出した平面形が隅丸長方形の石組み遺構である。東西約2.3m、南北約1.7m、深さ約1.1m。石組内側は乱積みのように凹凸をみせ、平坦な面を意識しない。底部には石を敷かず、粘土貼りもみられない。北側からは石組溝203が接続する。石組の形状と建物に接していること、さらに底部の状況から自然排水するとみられることから蹲踞と考えた。使用する石材はチャートと砂岩である。埋没後には上面が石敷き状になる。延宝期に盛土する際に、沈下防止のために石を敷いた可能性もある。

石組溝203（図版6、図28） 1・7区で検出した南北方向の石組溝である。内幅約0.4m、深さ約0.2m、石を2段に積む。南では東側の石組が抜き取られている。溝底部の傾斜からも南側の蹲踞204に水が流れ込む構造となっている。護岸の石組の中には、鬼瓦片も使われている。北で東側に曲がる。

化粧面296（図版7、図19・20） 22・23区で検出した。南北方向の玄関廊の床下部分に施された砂敷きの面である。砂粒は約0.2cmほどの均一な大きさと、約2cmの厚さに敷き詰められている。にぶい黄褐色の砂を使っている。

化粧面219（図版7、図20） 6区南部で検出した。中庭の南側一帯に広がる表面が黒色を呈す

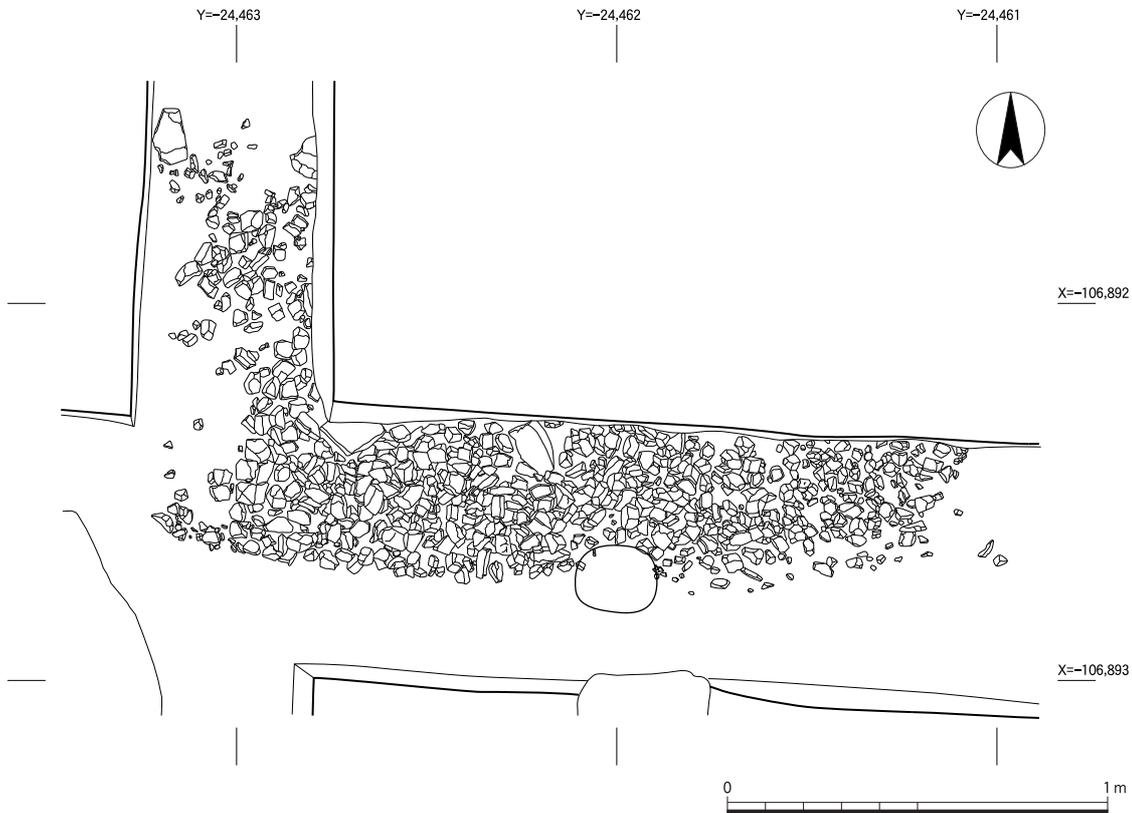


図29 3区集石238平面図（1：20）

る面である。粉状に砕かれた木炭が薄く均一に堆積していることと、この範囲内には焼け残りの木材片などはみられないことから、意図的に施された化粧面とみられる。

集石341（図20） 34区で検出した。蹲踞の西に位置する。平面形は直径0.9mの円形で、20～30cm大の石を充填する。排水機能をもつと思われる。

集石238（図版6、図29） 中庭の南側に位置する。平面形は東西約2.3m、南北約1.1mの不定形である。小礫を充填した自然吸い込み式の排水施設と考えられる。同様の遺構は、桂離宮新御殿や中書院の床下部分、<sup>1)</sup>京都御所東方公家屋敷での検出例がある。<sup>2)</sup>

石列325（図20） 24区で検出した。中庭の西側に位置する鍵型に曲がる石列である。南北方向に長く、北で東に曲がる。建物Aや玄関廊と傾きが同じため、これらの東縁の可能性がある。

土壌283（図20） 中庭の南西部、22区で検出した土壌である。平面形は東西1.2m、南北0.7m、底部径約55cmの東に広がる楕円形に復元できる。深さは0.75mである。東側以外は掘形壁が垂直に落ちるため、東方向から埋設物を抜き取ったとみられる。形状や大きさから、埋め甕が設置されていた可能性がある。

整地面Da（図16・18） 3・37区で検出した。表面に細かい礫を敷き詰め、堅く叩き締めた平坦面である。雨落ち溝207の南側に位置し、東は土壌237に切られているが、玄関廊の西側で止まるとみられる。建物Aの南庭にあたり、さらに南と西側に広がるとみられる。

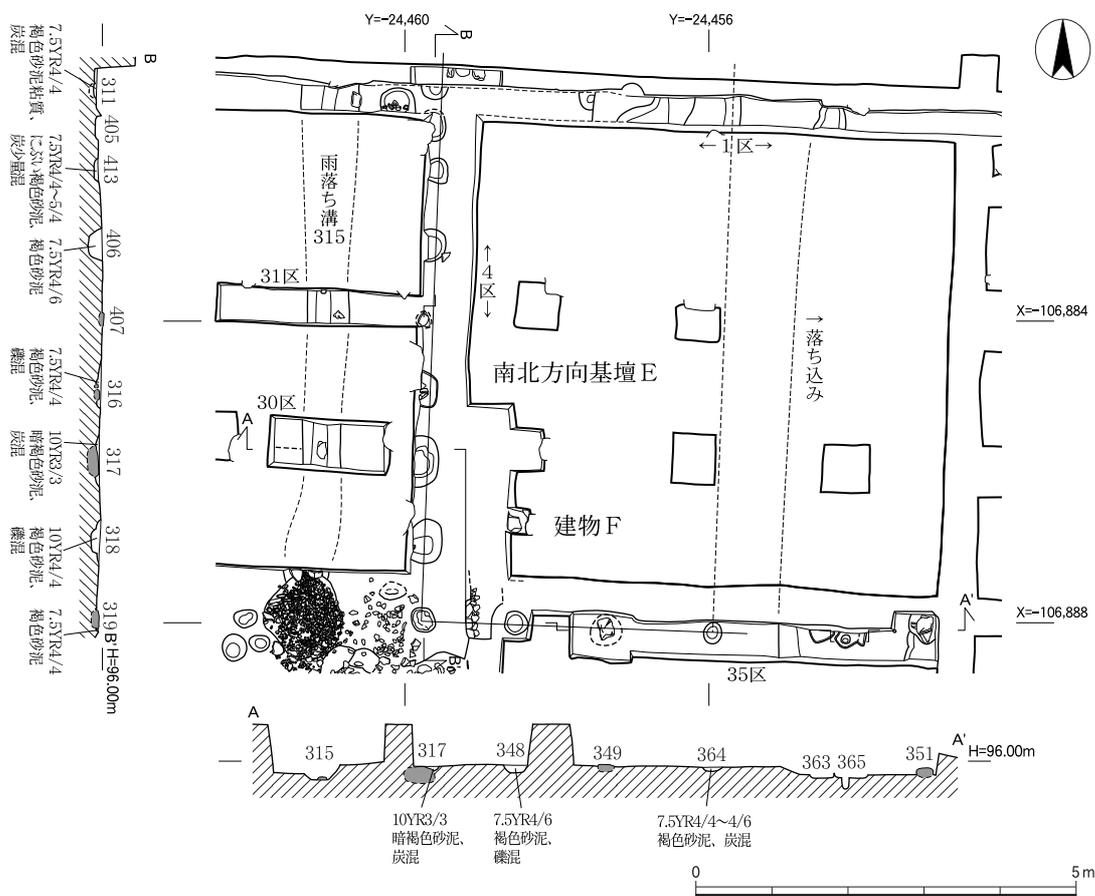


図30 1・2・4・30・31・35・37区室町時代建物F柱列実測図（1：100）

遺構上面および厚さ0.1～0.2mの整地層 から出土した遺物の時期は、17世紀初頭に属することから、この基壇は慶長期に造営された方丈のものと思われる。

### 第3面の遺構（図版9、図11）

慶長期の建物遺構の損壊を最小限にとどめるため、1・4・30～33・35～37区の礎石や抜き取り穴の少ない箇所を選んで掘り下げた。この時期の遺構には、礎石・礎石抜き取り穴・建物基壇・雨落ち溝・集石・整地面などがある。

基壇E（図版9、図30） 1・30・31区で西肩、さらに35区で東肩を検出した。南北方向の建物基壇である。東西幅は約5.8m、南北7.8m以上、高さは0.3～0.4mである。4区では深さ12cmのみの断割りであるが、4層の版築を確認した。南側ではなだらかに下がり、後述する整地面Dbにつながる。さらに北側に延びるとみられる。

建物F（図版10、図17・30） 4・35区で検出した礎石建物である。基壇E上に東西方向に並ぶ礎石319・349と抜き取り穴348・364を検出した。さらに、南北方向に並ぶ礎石407・317・319と抜き取り穴311・413・406・316・318を検出した。礎石の大きさは317が45cm、349は30cmである。礎石列には、重複がみられ、南北方向のものは、埋土状態から礎石が残るものの方が古いことがわかった。柱間間隔は南北が2.0～2.1m、東西が2.5mである。東西は1.3m・1.2m・1.3mの3間の可能性もある。柱筋の方位は、江戸時代の建物と同様で、北で東に振る傾きである。

雨落ち溝315（図版10、図30） 1・2・30・31区で検出した。基壇E西肩の西に並行する南北方向の溝である。幅約0.6m、南北6.8m以上、深さは約0.2mである。南で後述する集石320に



図31 2・37区集石320平面図（1：20）

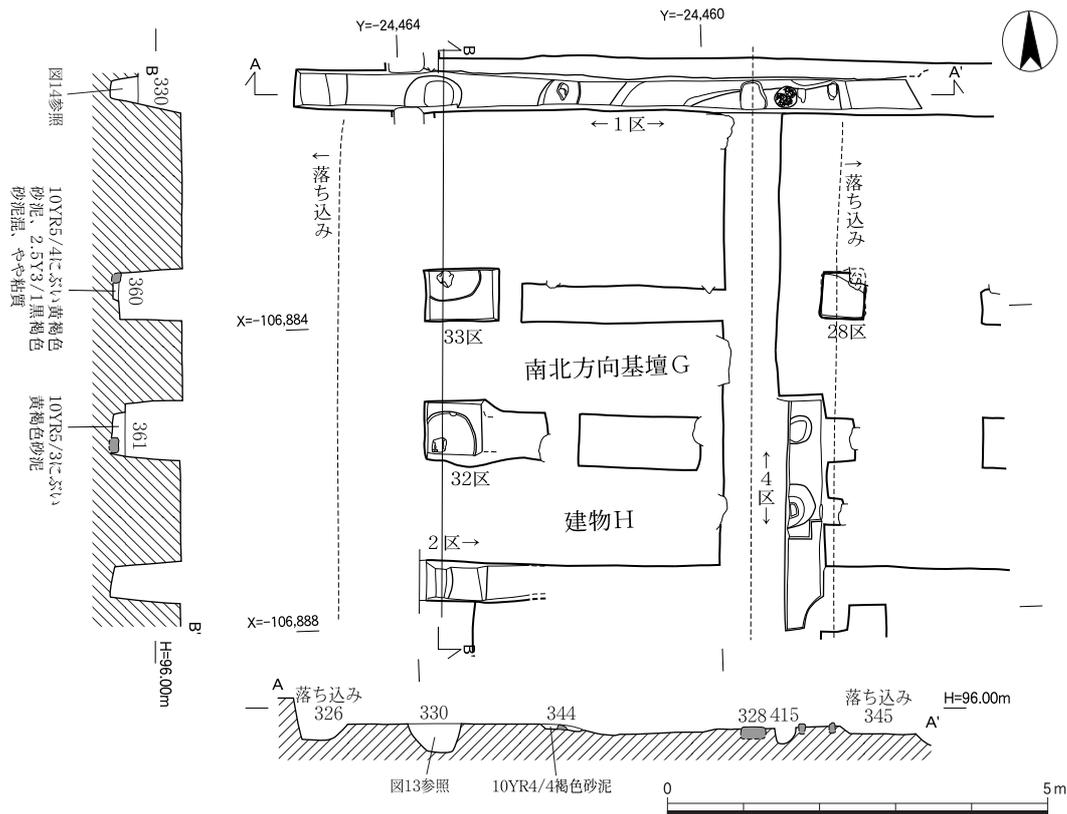


図32 1・2・32・33区室町時代建物H柱列実測図(1:100)

つながる。さらに北に延びるとみられる。

集石320(図版10、図18・31) 2・37区で検出した。雨落ち溝315の南端に接する平面形が楕円形の集石遺構である。南北約1.2m、東西約0.8mの規模で、直径約3~8cmの小礫を充填する。排水処理の施設と考える。

溝329(図13) 1区中央西よりに位置する南北方向の溝である。幅約1.3m、深さ約0.4m。基壇Eを切り込んで成立する。埋土からは、敷塼と慶長期の雨落ちに使用されていた石と同様の泥岩が多く出土した。

整地面Db(図版10) 3・37区で検出した表面に細かい礫を敷いた平坦面である。北で建物基壇Fの南端につながる。北端部は慶長期の雨落ち溝の下に位置しているが、他の部分は慶長期の整地面Daとほぼ同一とみられる。

なお、基壇外の東には礎石351、西には抜き取り穴309・323などがあるが、建物としては規模や柱筋が不明である。

遺構上面や厚さ0.2~0.3mの整地層 から出土した遺物の時期は、出土した土器類から16世紀前半に属することから、この基壇は室町時代後期に造営されたものとみられる。

#### 第4面の遺構(図12)

1・2・4・28・32・33区で室町時代後期の遺構に影響が少ない部分を選んで掘り下げた。この面で検出した遺構には、礎石・礎石抜き取り穴・建物基壇・埋納土壌・溝などがある。

基壇G（図版11、図13・32） 1区で検出した南北方向の建物基壇である。東西幅は約6.4m、南北5m以上、高さは約0.3mである。抜き取り穴330の断面では、厚さ5cmほどの層が数層みられることから版築と考えられる。さらに南北に延びるとみられる。

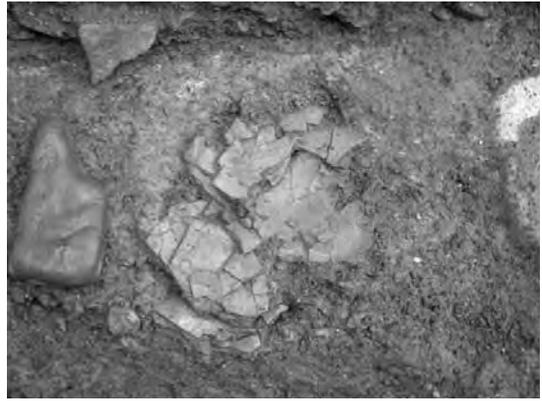


図33 1区埋納土壇415

建物H（図版11、図13・17・21・22・32） 基壇G上で検出した礎石建物である。1区では、東西方向に並ぶ礎石328と抜き取り穴330を検出した。

330の南では、32・33区にて2.2m間隔で南北方向に並ぶ抜き取り穴360・361を検出した。礎石328は長径50cm以上あり、今回検出した礎石中最も大型である。柱筋の方位は北で東に振る傾きである。礎石328と抜き取り穴330の間隔は約4.2mあり、中間部が溝状遺構で壊されているが、中央部に1基の柱穴を想定すれば、東西は2.1mの2間の幅となる。

なお、基壇の東には、礎石368や抜き取り穴366・367などがあるが建物としては、規模や柱筋が不明である。

埋納土壇415（図13・33） 1区で検出した。礎石328の東に位置する。直径0.3m、深さ0.2mの小土壇から土師器皿10枚程が出土した。上層に小型、下層には大型のものが内面を上に向け重ねた状態で納められていた。土師器皿は15世紀後半に属する。地鎮に関連する遺構とみられる。礎石328を覆う層で成立することから、3面と4面の間の遺構となる。

この時期の整地層の厚さは0.1～0.2mであり、室町時代後期の整地層に比べるとやや薄くなっている。

#### 第5面の遺構

4区南部の断割りで検出した灰褐色砂泥の整地面である。鎌倉時代の整地層と思われる。小礫を含み堅く叩き締められている。制限された狭い範囲での検出のため、広がりについては不明である。ほかの遺構は確認していない。

#### 第6面の遺構

4区南部の断割りで検出した褐色砂泥の整地面である。非常に狭い範囲での検出のため、広がりについては不明である。ほかに遺構は確認していないが、整地上面から平安時代の遺物が出土している。掘下げは、1.2mの深さで湧水が激しくなったために中断した。

#### 註

- 1) 『桂離宮御殿整備工事概要』 宮内庁 1982年
- 2) 『平安京左京北辺四坊 - 第2分冊(公家町) - 』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2004年

## 4 . 遺 物

### ( 1 ) 遺物の概要

遺物は整理箱に37箱出土した。土器・瓦類が大部分を占め、他の遺物は少ない。調査では第1面から第4面のそれぞれの段階で遺物を採集したが、3面および4面は部分的な小面積の掘下げにとどめたことから出土遺物は少量となった。

江戸時代の遺物が約7割を占め、室町時代の遺物が3割弱、平安時代から鎌倉時代の遺物は少量であった。

### ( 2 ) 土器類

土器類には、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・磁器など国産のもの、輸入陶磁器がある。

平安時代から鎌倉時代の土器類は、南西部の断割り部から出土した土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器がある。室町時代の土器類は基壇を造成した整地層 や柱穴・埋納土壇・溝などから出土した。江戸時代の土器類は基壇を造成した整地層 などから出土した。内容は、大半が土師器である。

埋納土壇415出土土器（図版12、図34） 白色系の土師器皿のみが出土した。

口径8.2~9.1cmの小型皿S（1~3）と口径15.3~16.0cmの大型皿S（4~7）に分類できる。両者とも口縁部が外反して開く。4・5など深い形態のものがある。7は底部が平らで、体部は

表3 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器		緑釉陶器1点		
鎌倉時代	軒平瓦		軒平瓦3点		
平安時代	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦、塼、丸瓦、平瓦、金銅仏、銭貨、鉄釘		土師器27点、国産陶器1点、輸入磁器1点、軒丸瓦3点、軒平瓦9点、鬼瓦2点、塼4点・金銅仏1点		
中世以降	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、銭貨、煙管、飾り金具、鉄釘、砥石、碁石、貝製碁石		土師器23点、国産陶器7点、輸入陶磁器4点、軒丸瓦1点、瓦類4点、銭貨14点、煙管2点		
江戸時代以降	銭貨				
合 計		48箱	107点（4箱）	44箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より11箱多くなっている。

上方へ外反気味に立ち上がり、口縁端部は丸く収める。底部・口縁部外面下位はオサエ、底部内面はナデ、口縁部内面・外面上位は横ナデで仕上げる。京都中心部で出土する土師器の編年で期新段階（15世紀末）に該当するとみられる。<sup>1)</sup>

整地層 出土土器（図版12、図34） 土師器皿、瓦器椀、施釉陶器皿・椀、焼締陶器播鉢・甕、中国製青磁椀・白磁椀・青花椀などがある。

土師器皿は白色系の皿S（8・10～19）と皿Sh（9）がある。皿Sは口径7.8～9.2cmの小型皿（8・10～13）、口径10.2cmの中型皿（14）、口径12.8～18.4cmの大型皿（15～19）に分類できる。8の口縁部が外反して開くものと、10の口縁部が内湾気味のものがある。小型皿Sh（9）は底部中央を上方に押し上げたいわゆるヘソ皿である。大型皿は口縁部が外反して開くものが多く、器高が浅くなる。中型と大型の底部の内面にはごく浅い凹線状の圏線がみられる。底部・口縁部外面下位はオサエ、底部内面はナデ、口縁部内面・外面上位は横ナデで仕上げる。また、胎土は白色から淡橙色に変化する。9・10・16・17の内面には煤が付着することから、燈明皿として使用されたと見られる。京都 期新～ 期古段階（15世紀末～16世紀前半）に属する。

天目椀（20）は体部が外上方に開く。体部下半はケズリ。内面全体と外面上半に暗赤灰色の天目釉が掛かる。ロクロケズリの方向は右回りである。胎土は灰白色で、やや粗い。胎土と釉調から美濃産とみられる。15世紀後半。

柱穴271出土土器（図版12、図34） 白色系の土師器皿のみ出土した。

口径8.7～9.6cmの小型皿S（21～23）である。体部は浅く、口縁部は外上方に延び、端部は丸く収める。23は底部中央が上方にやや突出する。底部・口縁部外面下位はオサエ、底部内面はナデ、口縁部内面・外面上位は横ナデで仕上げる。京都 期新～ 期古段階（15世紀末～16世紀前半）に属する。

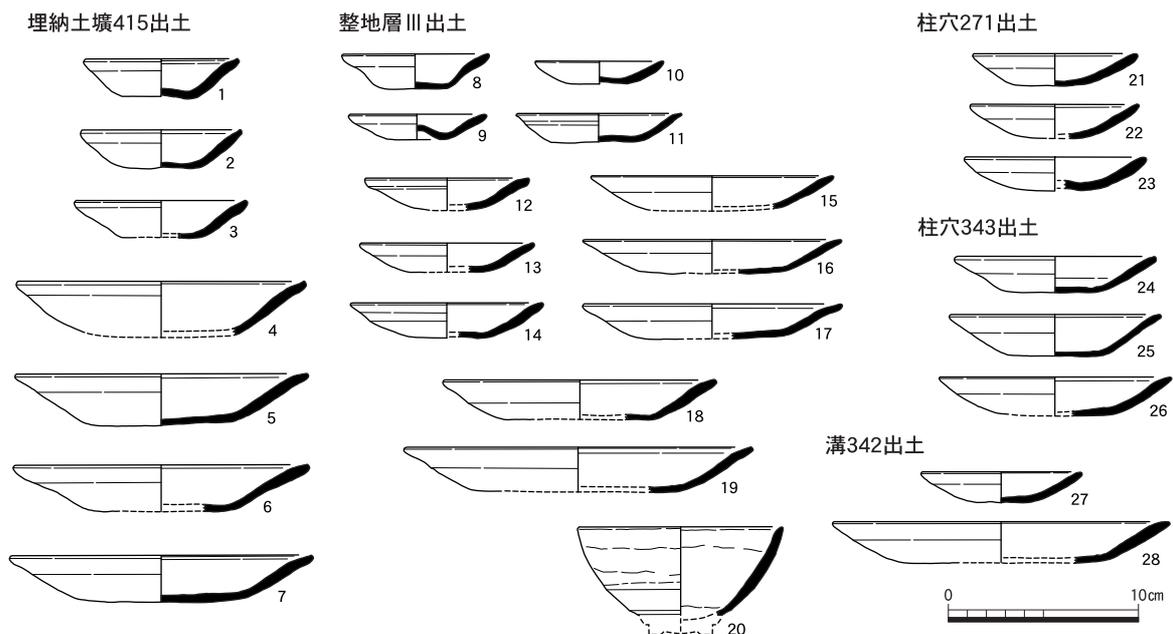


図34 出土土器実測図（1：4）

柱穴343出土土器（図34） 土師器皿、中国製青花椀などがある。

ともに白色系で口径10.6・11.2cmの中型皿S（24・25）と口径12.2cmの大型皿S（26）がある。25・26の口縁部は外反して開く。底部の内面にはごく浅い凹線状の圏線がみられる。底部・口縁部外面下位はオサエ、底部内面はナデ、口縁部内面・外面上位は横ナデで仕上げる。24は内外面に炭化物が多量に付着する。25は体部が深くやや古いとみられる。京都 期古段階（16世紀前半）に属する。

溝342出土土器（図版12、図34） 土師器皿のみが出土した。

白色系の小型皿S（27）・大型皿S（28）がある。27は口径8.5cm。体部は浅く、口縁部は外上方に延び、端部は丸く収める。28は口径17.8cm、底部が平らで、体部は上方へ外反気味に立ち上がる。口縁端部の内側は内傾する面を持つ。底部の内面にはごく浅い凹線状の圏線がみられる。底部・口縁部外面下位はオサエ、底部内面はナデ、口縁部内面・外面上位は横ナデで仕上げる。内面に煤が付着する。京都 期古段階（16世紀前半）に属する。

つくばい  
蹲踞204出土土器（図版12・13、図35） 土師器皿、瓦器椀、施釉陶器椀・皿・鉢、焼締陶器鉢・播鉢・茶入、肥前系磁器椀、中国製青花椀などがある。

白色系の土師器皿Sは、口径9.2～10.4cmの中型皿（29～33）と口径13.2～14.0cmの大型皿（34～36）に分類できる。29～33は口縁部は緩やかに屈曲して開き、端部は丸く収める。丸底である。底部・口縁部外面下位はオサエ後ナデ。底部内面はナデ、口縁部内面・外面上位はナデを施す。34～36は口縁部は緩やかに屈曲して開き、端部は丸く収める。底部から口縁部の屈曲部は凹み、圏線が付く。手法は中型皿と同様である。29・35の口縁端部内面に煤が付着する。京都 期中～新段階（17世紀前半）に属する。

施釉陶器には、銹絵椀（38）がある。径の大きめの高台で、体部が浅い平椀である。高台部以外に白化粧を施す。内面口縁付近に銹絵染付で、小振りな笹文を描く。高台部以外に灰釉を施す。口縁部の2方を内側に押し、歪みを作り出す。高台内には扇形印「定」の押印がある<sup>2)</sup>。京都産である。灰釉陶器皿（37）は高台を小さくケズリ出す。高台部以外に灰釉を厚く施す。唐津産。

焼締陶器には鉢（39）がある。平坦な底部から体部が直立する。口縁部は上面に平坦面をもつ。体部外面にはヘラによる凹線が施される。口縁部を外側から押さえて歪める。建水または水指として使用されたとみられる。丹波産であろう。他には図化できなかったが、備前産の茶入がある。

慶長期基壇上面出土土器（図版12、図35） 土師器皿、瓦器椀、施釉陶器椀・皿、焼締陶器鉢、肥前系磁器椀、中国製青花椀などがある。

土師器は白色系の皿Sである。大型皿（40～43）は口径12.0～12.2cm。口縁部は緩やかに屈曲して開き、端部は丸く収める。底部から口縁部の屈曲部は凹み、圏線が付く。43の端部はやや尖る。41の内面には煤が付着する。43はやや古い形態を示す。京都 期中～新段階（17世紀中頃）に属する。

整地層 出土土器（図版13、図35） 土師器皿・焼塩壺蓋・焙烙鍋・罌釜、瓦器椀、施釉陶器椀・皿、焼締陶器鉢・播鉢、肥前系磁器椀、中国製青花椀・皿・青磁椀、ベトナム製青花皿など

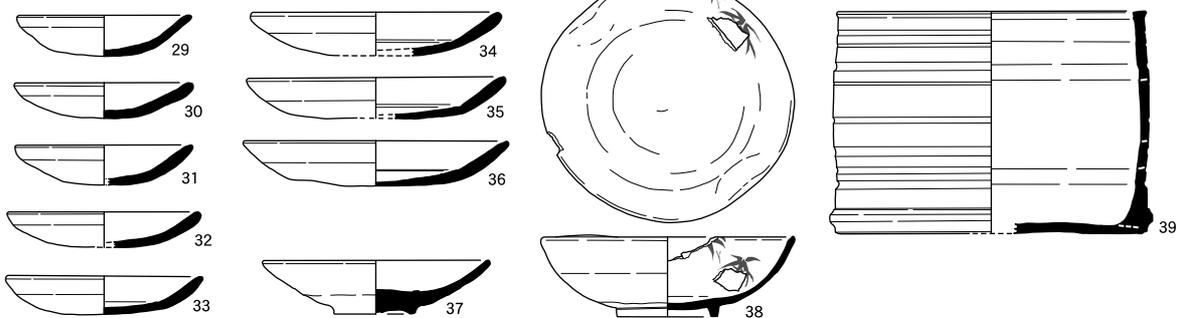
がある。

白色系の土師器皿Sは口径9.6cmの中型皿(44)と口径10.8~12.8cmの大型皿(45~48)に分類できる。44は口縁部は緩やかに屈曲して開き、端部は丸く収める。丸底である。底部・口縁部外面下位はオサエ後ナデ。底部内面はナデ、口縁部内面・外面上位はナデで仕上げる。45~48は口縁部は緩やかに屈曲して開き、端部は丸く収める。底部から口縁部の屈曲部には圈線が付く。手法は中型皿と同様である。京都 期新段階(17世紀後半)に属する。

焼塩壺蓋(49)は、広口タイプの焼塩壺の蓋である。2区から出土。焙烙鍋(50)は、口縁端部の内上方への返りは消失する。体部を外型によって形成する。17世紀中葉とみられる。37区から出土。罽釜(51)は、口縁端部は内上方へ突出して返りがある。内外面はナデ調整。内面には炭化物が多く付着する。胴部中位に付けられる罽部は欠損している。37区から出土。

磁器には染付杯(52)がある。内外面に呉須絵を施す。高台内に圈線とやや崩れた「福」銘が

蹲踞204出土



慶長期基壇上面出土



整地層Ⅰ出土

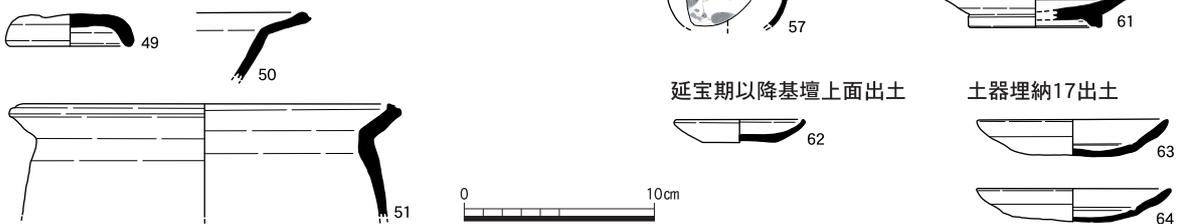
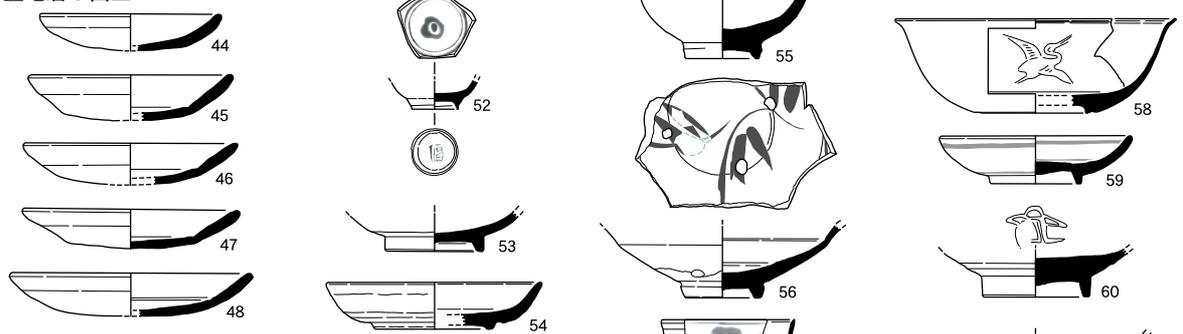


図35 出土土器実測図(1:4)

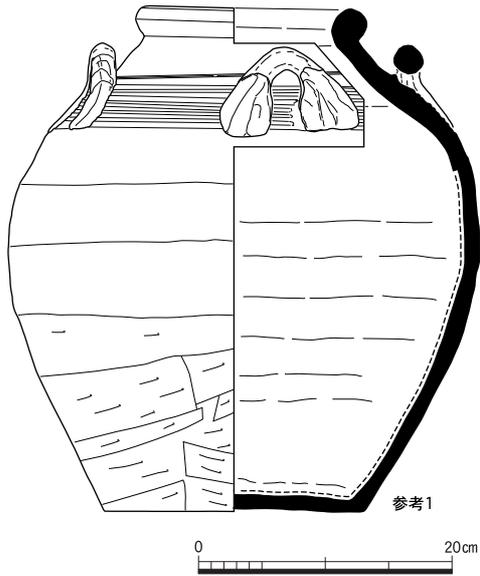


図36 境内出土四耳壺実測図(1:6)

ある。高台端部以外に透明釉を掛ける。呉須の発色状態から肥前系と考える。35区から出土。

灰釉陶器椀(53)は、径の大きめの高台をもつ。高台端部外面には丁寧な面取りが施される。体部内外面に灰釉を施す。胎土は精良で、半磁器の焼成である。京都産である。6区から出土。長石釉陶器皿(54)は高台内以外に、灰白色の長石釉を厚く掛ける。胎土は粗く、浅黄橙色を呈する。美濃産。35区から出土。灰釉陶器椀(55)は体部外面上半と内面に、灰白色の灰釉を施す。胎土は粗く、淡橙色を呈する。唐津産。35区から出土。鉄絵陶器皿(56)は内面底部に鉄絵で笹文を描く。胎土目積の跡が残る。胎土は粗く赤褐色を呈する。

唐津産。3区から出土。

輸入陶磁器には、青花小椀(57)は薄い器壁で口縁端部はやや外反する。口縁部内外面と内面底部に呉須で圈線を施す。外面には花文を施す。25区から出土。青花椀(58)は体部上半の器壁は薄く、口縁端部は大きく外反する。内面体部には型押しのかげ文が浮き上がる。内面底部には呉須絵が施される。底部は碁笥底風で、接地部は釉剥ぎをする。2区から出土。青花皿(59)は内面底部に蛇の目釉剥ぎが施される。釉剥ぎ部分に目跡が残る。高台端部にも5カ所の目跡。体部の内外面とも呉須による2本の線が施される。全面に白化粧が施される。胎土はやや粗く、浅黄色を呈する。釉は灰白色。呉須は青灰色。ベトナム産とみられる。1区から出土。青磁椀(60)は内面底部に陰刻文あり。削り出しの高台で、高台内部は未施釉。胎土は灰白色で緻密。釉は灰オリーブ色を呈する。龍泉窯産、15世紀に属する。17区から出土。

緑釉陶器椀(61)は椀の底部付近である。内面底部に沈線が施される。底径7.0cm。貼り付け高台である。全面を施釉する。胎土はにぶい黄橙色で、焼成はやや軟質である。10世紀後半とみられ、混入品である。東海系。24区から出土。

延宝期以降基壇上面出土土器(図35) 土師器皿、施釉陶器皿、焼締陶器搦り鉢、肥前系磁器椀などがある。土師皿以外はいずれも小片で図化できない。

土師器皿(62)は口径6.9cm、高さ1.2cmある。底部外面に糸切り痕が明瞭に残る。胎土は密で、淡黄色を呈する。ロク口形成による。

土器埋納17出土土器(図版13、図35) 白色系の大型皿S(63・64)がある。

ともに口径10.2cm。口縁部は緩やかに屈曲して開き、端部はやや尖る。底部から口縁部の屈曲部は凹み、圈線が付く。胎土はやや粗く、浅黄橙色を呈する。64の外面には煤が多く付着、内面には少量付着する。63の外面には煤が少量付着し、内面には煤の他にも付着物が多い。64が上位で、二枚重ねで伏せている。京都劔期新段階(18世紀後半)に属するとみられる。

境内出土遺物（図版13、図36） 完形の褐釉陶器四耳壺（参考1）である。

器高40.2cm、口径18.1cm、胴部最大径37.0cm、底径20.5cmである。底部は平らで、体部下半は横方向のケズリ、上半はナデを施す。口縁部と頸部の境に凸帯を有し、胴部上位から中位にロク口回転を利用した螺旋状の凹線が施される。把手（耳）は馬蹄形状で、この螺旋状凹線の位置に4つを貼り付ける。胴部中位に接合痕がめぐる状況が観察でき、壺の上部と下部を別々に製作し、両部位を接合したと考えられる。外面には極暗赤褐色の釉が塗られている。胎土は完形品であるため断面での詳細な観察ができないが、キメが細かく、赤褐色を呈しているようである。焼成は良好で、堅く焼き締まっている。壺の形状や製作技法は、17世紀初頭のタイのメナムノイ窯産の四耳壺に酷似している。胎土や焼成の状態からは、備前もしくは丹波の製品の可能性も考えられる。1999年に客殿建設用地からの出土とされ、鹿苑寺で保管されている。ご厚意により実測図作成と写真撮影を許可していただいた。

### （3）瓦類（図版14～16、図37～39）

瓦類には軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦・雁振瓦・丸瓦・平瓦・切隅瓦・塙がある。檜皮葺きや柿葺きの大棟に用いられる小型瓦が多くみられる。軒瓦の瓦当面文様の分類は、『特別史跡特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園<sup>3)</sup>』を参考にした。

軒丸瓦は、4型式5種8点を数える。瓦当の主文様には巴文がある。江戸時代、室町時代の瓦がある。

巴文軒丸瓦（65） 左巻きの三巴文は頭部が尖り、尾は半周めぐる。外区には小粒な珠文が配される。瓦当面には離れ砂を使用。瓦当外周はヘラミガキ、瓦当裏面は丁寧なナデで調整。胎土は砂粒が少なく、焼成は軟質、灰色を呈する。1区整地層 から出土した。

巴文軒丸瓦（66） 左巻きの三巴文は頭部が強く巻き、尾は短い。外区には小粒な珠文が配される。瓦当面には離れ砂を使用。丸瓦部凸面を縦方向にミガキ、瓦当外周・裏面は丁寧なナデで調整。丸瓦部凹面には布目が残る。砂粒が少量混入、焼成良好で、黒灰色を呈する。6区整地層 から出土した。111A型式。

巴文軒丸瓦（67） 内区には左巻きの巴文を配し、尾は半周して界線と結合する。外区には小粒な珠文が配される。瓦当外周・裏面は丁寧なナデで調整。砂粒が少量混入、焼成良好で、灰色を呈する。大型である。37区整地層 から出土した。109A型式。

巴文軒丸瓦（68） 右巻きの巴文は頭部が強く巻き、尾は隣りに接する。外区には大粒の珠文が配される。周縁は広い。瓦当外周はヘラミガキ、瓦当裏面は丁寧なナデで調整。胎土には砂粒が少量混入、焼成は良好で、黒灰色を呈する。17区整地層 から出土した。江戸時代とみられる。

軒平瓦は、7型式11種22点を数える。瓦当の主文様には唐草文・菊花唐草文・剣頭文などがある。鎌倉時代、室町時代の瓦がみられる。

剣頭文軒平瓦（69） 剣頭が太く、鎬はやや細い。瓦当は折り曲式による。砂粒が多く混入、焼成はやや軟質で、上面は明オリーブ灰色、下面は黒色を呈する。29区整地層 から出土した。

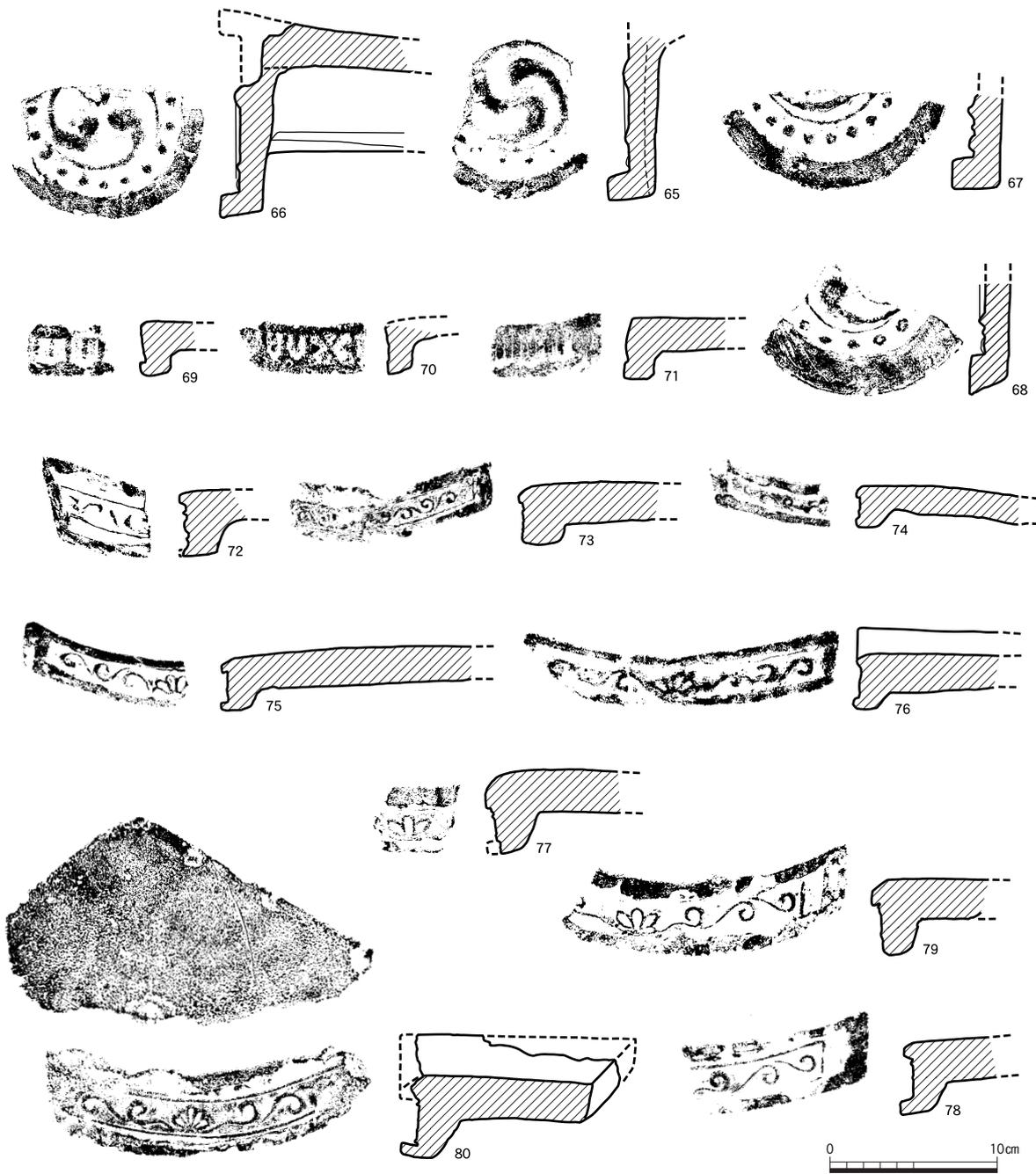


図37 出土軒瓦拓影・実測図（1：4）

211型式系統。

剣頭文軒平瓦（70） 中心飾りに×を置く剣頭文である。剣頭は細く、鎬はやや太い。瓦当は折り曲式による。胎土は小石が混入し、やや粗い。焼成は不良、灰白色を呈する。1区整地層 から出土した。211型式系統。

剣頭文軒平瓦（71） 瓦当を折り曲式で成形する。平瓦凹面と瓦当面まで布目が付く。范の当て圧が弱いため文様が不鮮明である。胎土は小石が混入し、やや粗い。焼成は良好で、灰白色を呈する。1区整地層 から出土した。211型式系統。

均整唐草文軒平瓦（72） 非常に簡略化された唐草文である。主葉と枝葉の区別がなく唐草が分

離している。上外区と下外区に界線がめぐり、脇区には界線がない。瓦当外周まで布目が付く。瓦当裏面は丁寧に横ナデの調整。胎土は長石・黒色砂粒を多く含み、やや粗い。焼成はやや軟質、灰色を呈する。4区整地層 から出土した。204型式。

均整唐草文軒平瓦(73) 小型の軒平瓦である。中心飾りは凸線による半裁菊花文で、唐草は右に5反転する。唐草の巻きは強く、それぞれ独立する。外区全周に界線がめぐる。顎部が幅広い。胎土は精良、焼成はやや軟質、灰オリーブ色を呈する。30区整地層 から出土した。同文瓦は相国寺境内、臨川寺境内、天龍寺境内での出土がある(註4)。

菊花唐草文軒平瓦(74) 小型の軒平瓦である。輪郭線で半裁菊花文を表した中心飾りを持ち、唐草は中心飾りの下部から始まり、左に3反転する。瓦当面には離れ砂を使用。平瓦部凹面には細かい布目。胎土はやや粗く、焼成硬質で、青灰色を呈する。1区整地層 から出土した。209C型式。

菊花唐草文軒平瓦(75) 小型の軒平瓦である。輪郭線で6弁とみられる半裁菊花文を表した中心飾りをもつ。唐草は中心飾りの下部から始まり、左に3反転する。瓦当面には離れ砂を使用。胎土はやや粗く、焼成硬質で、青灰色を呈する。32区整地層 から出土した。208B型式。

菊花唐草文軒平瓦(76) 小型の軒平瓦である。中心飾りは6弁の半裁菊花文を凸線の輪郭線で表す。唐草は中心飾りの下部からのび、左右に3反転する。唐草の巻きは強く、それぞれ独立する。胎土は砂粒をまばらに含み、焼成は軟質。灰白色を呈する。1区整地層 から出土した。208C型式。最も多く出土した。

菊花唐草文軒平瓦(77~79) 中心飾りは5弁の半裁菊花文を凸線の輪郭線で表す。唐草は中心飾りの下部からのび、独立して左右に3反転する。下外区を除き界線がめぐる。瓦当外周と側面はナデ調整。上面の周縁が内側に入り込む傾向がある。胎土は白粒子を多く含み、焼成は硬質。灰白色を呈する。77は25区整地層、78は3区整地層、79は1区整地層 から出土した。208A型式である。208C型式に次いで多く出土した。

菊花唐草文軒平瓦(80) 中心飾りは幅の狭い5弁の半裁菊花文を凸線の輪郭線で表す。唐草はそれぞれ独立し78より大きく展開する。79は下外区の界線がないが、80には外区全周に界線がめぐるとみられる。平瓦部右側を斜めに切り落として右隅切の軒平瓦とする。胎土は砂粒が少なく、焼成は良好。灰黄褐色を呈する。全体にマンガンが付着する。3区慶長期基壇面から出土した。207B型式より中心飾りの花卉幅が狭いことから、207C型式としておく。

鬼瓦(81・82) 81は宝珠形を呈する。上部の2箇所凹線を施す。全体にナデ調整。鬼面の額上部に貼り付けるとみられる。胎土は白色粒子を多く含み、焼成はやや軟質。灰色を呈する。1区土壇327から出土した。82は立体的で線刻が施される。部位は不明である。胎土は白色粒子を含み、焼成は硬質。灰色を呈する。37区整地層 から出土した。

雁振瓦(83) 上面はミガキ調整を施し、下面には布目痕が残る。胎土は緻密で、焼成は良好。暗灰色を呈する。6区整地層 から出土した。

隅瓦(84・85) 平瓦を三角形に切り落とす。上下面と側面はナデ調整。胎土は緻密で、焼成

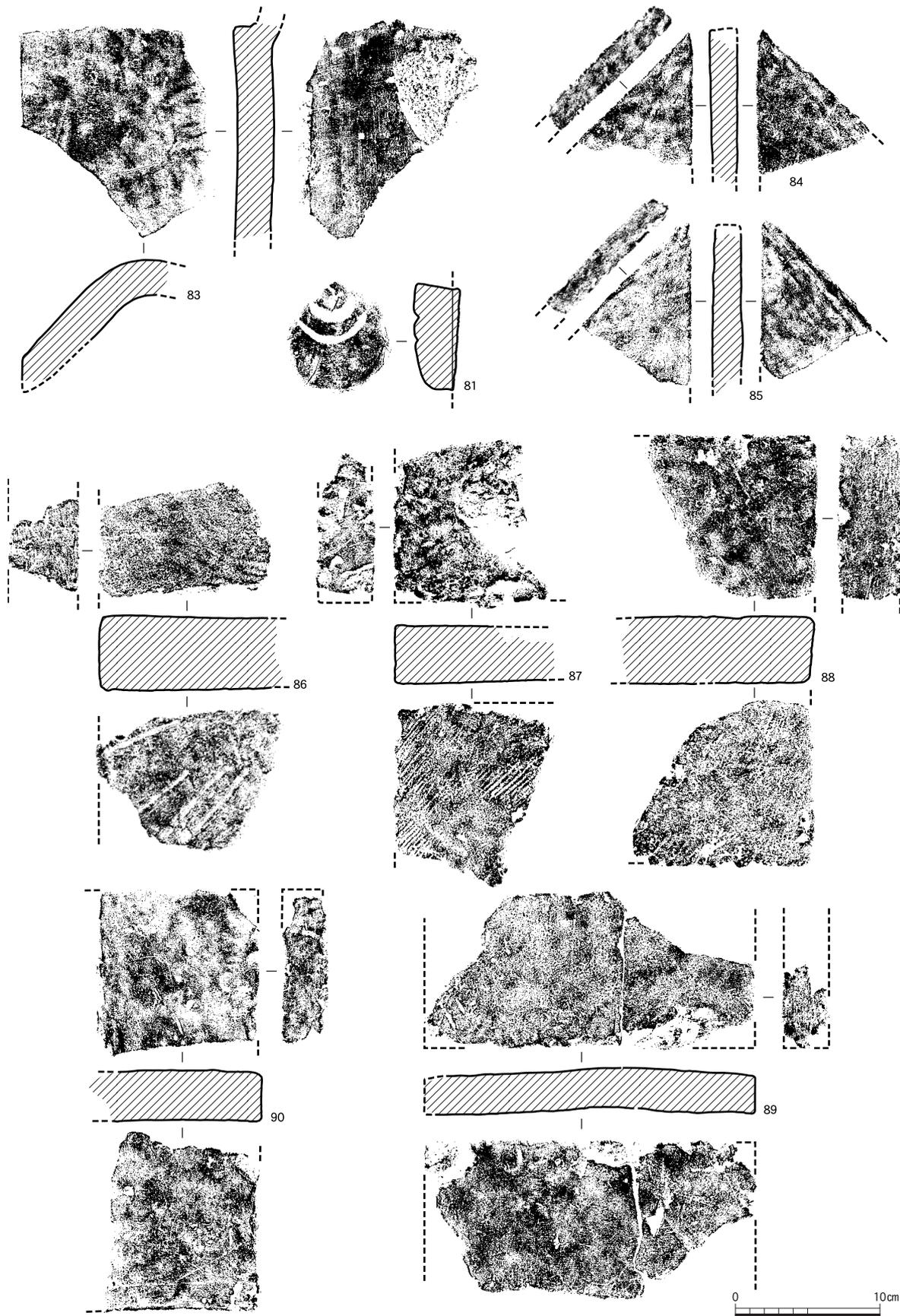


图38 出土瓦拓影·实测图(1:4)



図39 天保銘獅子口

は良好。灰白色から暗灰色を呈する。厚さは1.8～2.1cmある。ともに3区からの出土で84は慶長期基壇面、85は整地層。

埴（86～90）敷埴である。89は側面が3辺が残る。一辺23cm、厚さ2.8cmを測る。88・90は側面が2辺が残る。厚さは88が4.6cm、90は3.4cmある。86・87は側面が1辺のみ残る。厚さは86が5.0cm、87は4.2cmある。全面ナデ調整を施す。87の平坦面には糸切り痕が残る。86は胎土に砂粒を含み、焼成は良好。にぶい黄橙色を呈する。1区土壇327出土。87は胎土に砂粒を含み、焼成はやや軟質、暗灰色を呈する。4区柱穴367出土。88は胎土に砂粒を含み、焼成は良好、にぶい黄橙色を呈する。1区整地層、89は胎土に砂粒を含み、焼成は良好、にぶい黄橙色を呈する。第1面上面、90は胎土に砂粒を含み、焼成はやや軟質、褐灰色から明黄褐色を呈する。蹲踞204から出土した。

以上、109A、111A、207C、208A～C、209C型式の軒瓦は北山殿所用瓦とみられる。今回も小型瓦が多く出土する傾向がみられる。これら小型の軒丸瓦と軒平瓦はセットになるとみられる。また、軒平瓦73は、相国寺・臨川寺・天龍寺の各境内などから出土している瓦と同文である。

獅子口（参考2～5）解体前の方丈に葺かれていた獅子口である。参考2は「天保六年未ノ 作之」と線刻される。参考3は「天保六・未初」。参考4は「天保七歳二月 申ノ 初春作之」。参考5は「洛北衣笠山麓 小松原村 瓦師平右工門」と瓦師の所在と名が刻まれる。これらは鹿苑寺で保管されている。

(4) その他の出土遺物 (図版13・16、図40・41)

金属製品には、金銅製懸仏・煙管・銭貨・金具類・鉄釘などがある。ほかには、ここでは図示していないが、石製品には碁石(黒)・砥石がある。また、貝製の碁石(白)もみられる。

金銅製懸仏(91) 高さ3.3cm、幅2.9cm。右手は頬に当て、左手は上げる。右膝を立て、蓮華座上に座す。背面には板に取り付ける突起がある。表面には部分的に鍍金が残る。如意輪観音像とみられる。礎石70底部付近から出土した。室町時代の製作とみられる。

煙管(92・93) 雁首部分である。ともに火皿・首の2部品からなる。各部品は溶接により接合される。92は油返しがやや低く湾曲する。長さ7.8cmある。93は油返しが比較的高く湾曲する。

肉眼観察であるが真鍮製とみられる。ともに37区整地層から出土した。同整地層からは、吸口部分も出土しているが、遺存状態が悪いため図化できなかった。

銭貨(94~107) 寛永通寶17点、文久永寶2点、常平通寶1点など計38点が出土した。寛永通寶(94~104)は、字体と材質によりそれぞれ分類できる。94は古寛永

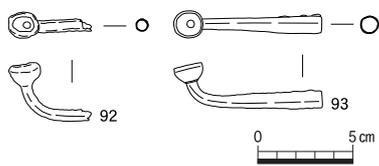


図40 煙管実測図(1:4)

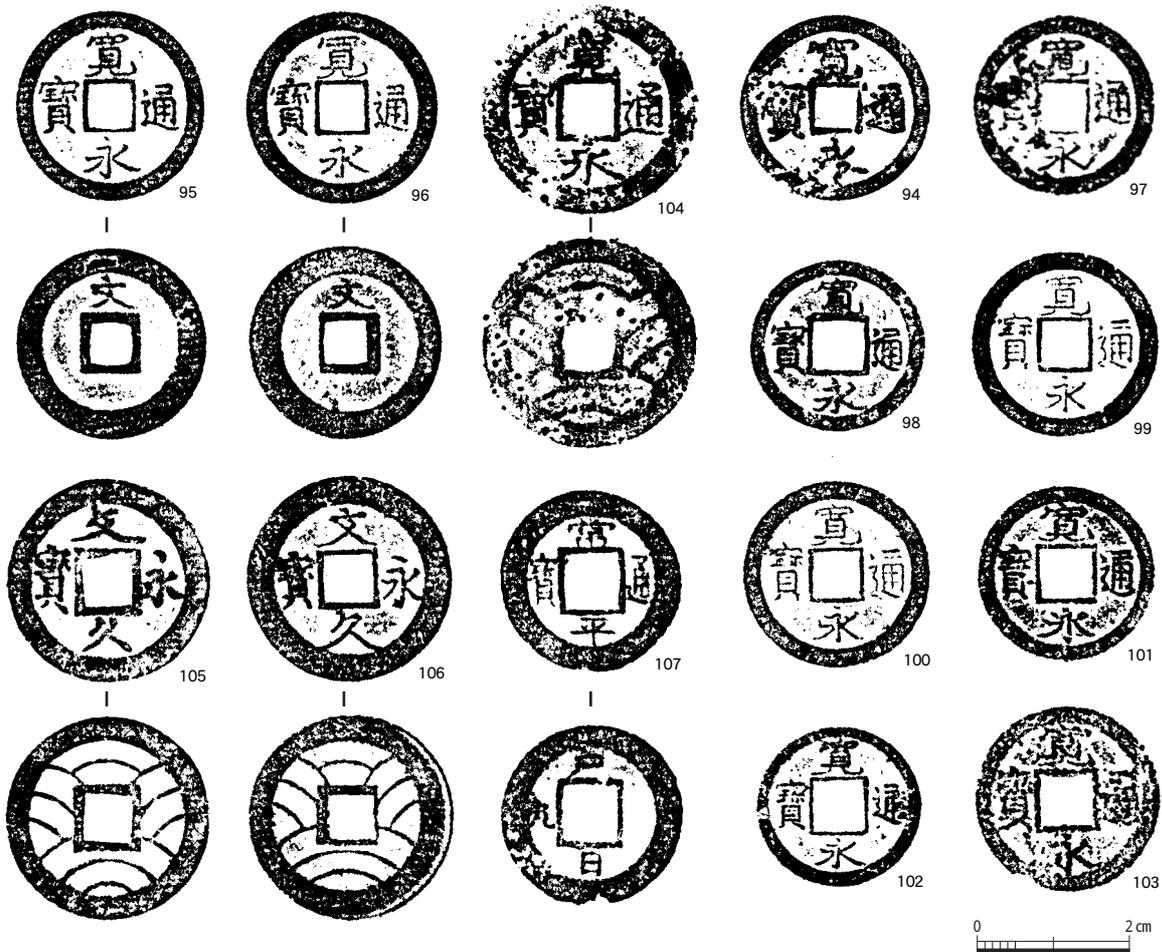


図41 銭貨拓影(1:1)

表4 錢貨一覧表

番号	種類	直径(cm)	厚さ(cm)	備考	出土地点
94	古寛永通寶	2.49	0.12	1期	37区整地層掘下げ
95	新寛永通寶	2.51	0.12	背:「文」、2期	現基壇面
96	新寛永通寶	2.53	0.12	背:「文」、2期	現基壇面
97	新寛永通寶	2.39	0.13	3期	現基壇面
98	新寛永通寶	2.29	0.11	3期	現基壇面
99	新寛永通寶	2.44	0.12	3期	現基壇面
100	新寛永通寶	2.43	0.12	3期	現基壇面
101	新寛永通寶	2.32	0.10	3期	106
102	新寛永通寶	2.14	0.10	小型、3期	6区南拡張掘下げ
103	新寛永通寶	2.63	0.14	鉄銭	現基壇面
104	新寛永通寶	2.80	0.11	真鍮銭・背:波文	82
105	文久永寶	2.67	0.11	草文、背:波文	現基壇面
106	文久永寶	2.70	0.13	真文、背:波文	現基壇面
107	常平通寶	2.38	0.12	背:「戸九日」、朝鮮銭	現基壇面

通寶、95・96は背面に「文」字のある新寛永通寶の文銭、97～104は新寛永通寶である。104は背面に波文がある。103が鉄銭で、ほかは銅銭である。105・106は文久永寶である。背面には波文がある。107は朝鮮銭の常平通寶である。背面に上から反時計回りに「戸」「九」「日」の文字がある。製造は、1778年以降のものである。94は37区慶長期基壇上面、102は6区整地層、95～100・103・105～107は現在の基壇上面から出土した。このなかで状態が比較的良好なものについて拓影を示した。図示した以外には、熙寧元寶（北宋、初鑄1068年）・元豊通寶（北宋、1078年）・紹聖元寶（北宋、1094年）・永樂通寶（明、1408年）各1点、銭文不詳2点があった。また、現在の基壇上面から出土したものには明治・大正・昭和の各時代の貨幣（半銭3点、五銭・十銭・五厘各1点、一銭10点、10円2点）が含まれており、この方丈が現在まで使用されていたことを物語っている。

自然遺物には、炭化物や昆虫がある。土器埋納17から採取した土器内と土器直下の土サンプルを、実体顕微鏡で観察した結果判明した。

見つかった昆虫はコクゾウムシであり、土器内から検出されており、成虫が混入・侵入したとは考えられず、穀物に産み付けられていた卵が埋納後に孵化・成長したものと思われる。また、炭化物は小片の針葉樹・広葉樹いずれも見られた。さらに土器直下の小石の表面には黒く光沢のある炭化物が付着していた。

これらの状況から、土器を納める前には火を使用する何らかの行為がなされていたと思われ、また、土器内には穀物を納めていたことが想定できる。

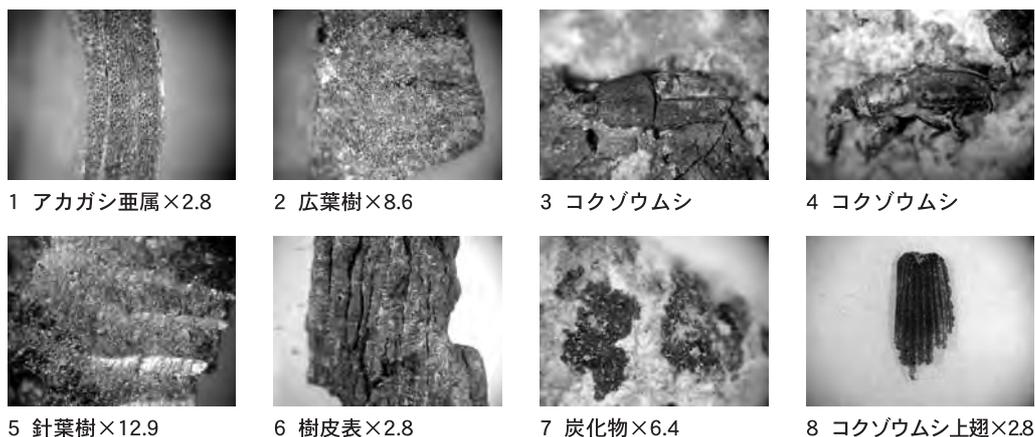


図42 土器埋納17検出自然遺物

表5 土器埋納17検出自然遺物一覧表

番号	名称	種類	備考
1	アカガシ亜属	炭化材	土器内
2	広葉樹	炭化材	土器内
3	コクゾウムシ	昆虫	土器内
4	コクゾウムシ	昆虫	土器内
5	針葉樹	炭化材	土器下
6	樹皮	炭化材	土器下
7	不明	炭化物	土器下 石に付着
8	コクゾウムシ上翅	昆虫	土器下

註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 2) EDWARD S. MORSE 『Catalogue of The Morse Collection of Japanese Pottery』 ポストン美術館 1900年
- 3) 前田義明ほか『特別史跡特別名勝 鹿苑寺(金閣寺)庭園 防災防犯施設工事に伴う発掘調査』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第15冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
- 4) 『相国寺境内の発掘調査』同志社大学校地学術調査委員会 1988年  
吉川義彦他『臨川寺旧境内遺跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1979年  
小檜山一良ほか『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
- 5) 寛永通寶の分類は、永井久美男『日本出土銭総覧』1996年版 兵庫埋蔵銭調査会刊に準拠した。

## 5.まとめ

今回の調査結果から、現在の方丈基壇下の土層堆積状況は、江戸時代の延宝期・慶長期、室町時代後期、室町時代中期の整地層がほぼ水平に広がりを見せており、各時代の遺構が良好な状態で遺存していることがわかった。調査の成果としては、現在の方丈基壇面の成立時期が判明したことや、江戸時代初期の前身方丈跡の検出、さらに、その下層から室町時代の2時期の礎石建物跡を検出したことなどがある。今回の調査により当地の変遷の概略を知ることができた。以下では、時代順に検出した遺構について述べ、その成果をまとめたい。

### 鎌倉時代以前

4区南部で検出した第5面は、後述する室町時代の北山殿整地層の下に位置すること、堅く平坦な整地面を成すなどの状況から、鎌倉時代の西園寺北山第の遺構面である可能性が高いと考えられる。『増鏡<sup>1)</sup>』によれば、西園寺内には、高さ四十五尺の滝と池・愛染堂・本堂・善積院・功德蔵院・妙音堂・不動尊・五大堂・成就心院・法水院・化水院・無量光院・青障子・聴聞堂などの伽藍が立ち並んだと記されている。また、伽藍の北部に位置する北山第には、寝殿・泉屋・釣殿・二階方(天鏡閣)・廊屋・南庭・弓場・蹴鞠場などがあったことが知られる。川上貢氏(当研究所所長)は、『日本中世住宅の研究<sup>2)</sup>』の中で、現在の方丈の所在するあたりに、御所方の中心部である北山第南屋寝殿を想定されており、今回の調査で検出した整地面を、この中心部分の地業と考えたい。今回は、室町時代の遺構を保護するために面的な調査ができなかったことから、整地面以外の遺構は検出していないため、この時期の状況は不明な部分が多い。

なお、今回は断割り部以外にも後世の整地層などから平安時代から鎌倉時代の遺物が出土しており、周辺での既往調査でもこの時期の遺構や遺物の出土例が少なからずあることから、ここを含めた近辺に平安時代から鎌倉時代の遺構が存在する可能性が高い。本調査区南側に位置する1989年調査S区では、鎌倉時代に遡る池状堆積を確認しており、今回4区南部の断割りで第6面として検出した整地層は、湿地状の地形を埋め戻していることから、鎌倉時代およびそれ以前には調査区南西部に池の東岸が入り込んでいた可能性が考えられる。

### 室町時代中期

北山殿に関連する建物の一部を第4面とした遺構面で検出した。東西幅約6.4m(21尺)の南北に長い基壇上に、自然石を用いた大型礎石や、礎石抜き取り穴が2.2m(7尺強)の間隔で南北方向に並んでおり、東西2間、南北2間以上の建物Hが復元できる。柱筋は北で東側に振る方位をもっている。調査面積に制約があったため、建物の東西幅以外の規模は不明である。この建物の礎石328は、今回検出した室町時代後期の礎石317や、周辺での既往調査<sup>3)</sup>の室町時代中期のものよりも大型であり、規模の大きな建物の可能性が考えられる。川上貢氏は、前掲の『日本中世住宅の研究』の中において、池の東に北御所の7間という破格の規模をもつ寝殿および中門などが所在した可能性を指摘されている。位置的には今回の調査地付近にあたり、検出した基壇Gの南側が平坦な整地面となっていることから、この平坦面を南庭に想定するならばこの南北建物は寝殿に

付随する廊の可能性が考えられる。

北山殿の建物は『臥雲日件録抜尤』<sup>4)</sup>によれば、護摩堂・懺法堂・寢殿・公卿間・舍利殿・天鏡閣・拱北廊・会所・泉殿・看雪亭・法水院などがあつたとされ、他には持仏堂・宝蔵・七重大塔など多くの建物の存在が知られる。義満没後には北山殿の取り壊しがなされ、ほとんどの建物は解体され、南禅寺や建仁寺など他所に移築されたと『看聞御記』に記されている。今回の大型礎石の抜き取り穴330などの検出は、建物解体の痕跡と考えられることから、文献にある建物解体および移築の記載と符合するものとみられる。

#### 室町時代後期

鹿苑寺関連の遺構を第3面とした遺構面で検出した。東西幅約5.8m(19尺)の南北に長い基壇上に小型の礎石が据え付けられている。検出した建物Fの柱間間隔は約2.1mであり、金閣(7尺)と同様である。基壇の版築には焼土が含まれ、遺物は16世紀初頭に属することなどから、応仁・文明の乱後に再建した建物とみられる。検出した礎石や礎石抜き取り穴の配置からは、造り替えも認められ、東西3間、南北3間以上の南北方向建物Fが復元できる。『蔭涼軒日録』<sup>5)</sup>によれば、境内の建物には金閣・方丈・客殿・鏡間・仏殿・法水院・泉殿・不動堂・護摩堂・会所・納所寮などがある。また、他には小方丈・庫裏などもみられる。調査区の北側では敷博が多く出土していることから、北に方丈や仏殿など寺院の中心的建物の存在が推定でき、検出した南北方向の建物Fはこれに取り付く玄関廊の可能性を考えたい。ここからは、後身となる慶長期方丈南面の雨落ちに使用されていた石と同様の黒い玉石が多く出土したことから、雨落ち溝が江戸時代のもと同様の構造をしていたと推測できる。また、建物の南側には、平坦な整地面が広がっていることを確認している。

同時期と考えられる建物には、以前の第5次調査Y区で不動堂に関連するとみられている掘立柱建物を検出しているが、金閣の近辺に位置する中心部では今回が初めての建物の検出であり注目される。

#### 慶長期から延宝期まで

この時期の基壇上の建物は方丈とみられ、礎石の配置から、東側から2間の下間前室、3間半の室中になるとみられる。南と東の2面に1間幅の広縁が付き、さらに、南の広縁の外には黒い玉石を入れた雨落ち溝が付属する。基壇の化粧は、側面を自然石の乱積みとしているようである。礎石には自然石を用いている。この建物跡は、建物A・基壇B・雨落ち溝207などの遺構の配置から、後身である延宝期方丈よりも南縁が約5.5m北側に位置し、さらに調査区外の西側に延びていたことがわかった。

この建物および基壇は、『鹿苑日録』<sup>6)</sup>にみられる慶長7年(1602)に西笑承兌和尚により庫裏とともに建立された方丈跡にあたるを考える。この基壇上面では多くの礎石や礎石抜き取り穴を検出している。これらの礎石や抜き取り穴の間隔を1.95~2.00m(7尺弱)で割り振ると、A-a・A-b・A-cの3期におよぶ重複する柱列が想定できる(図23)。『隔蔭記』によれば、方丈は寛永13年に「柱を根継ぎ」、寛文2年には「客殿とともに修理」とあり、<sup>7)</sup>建立後に2回の修理記録が

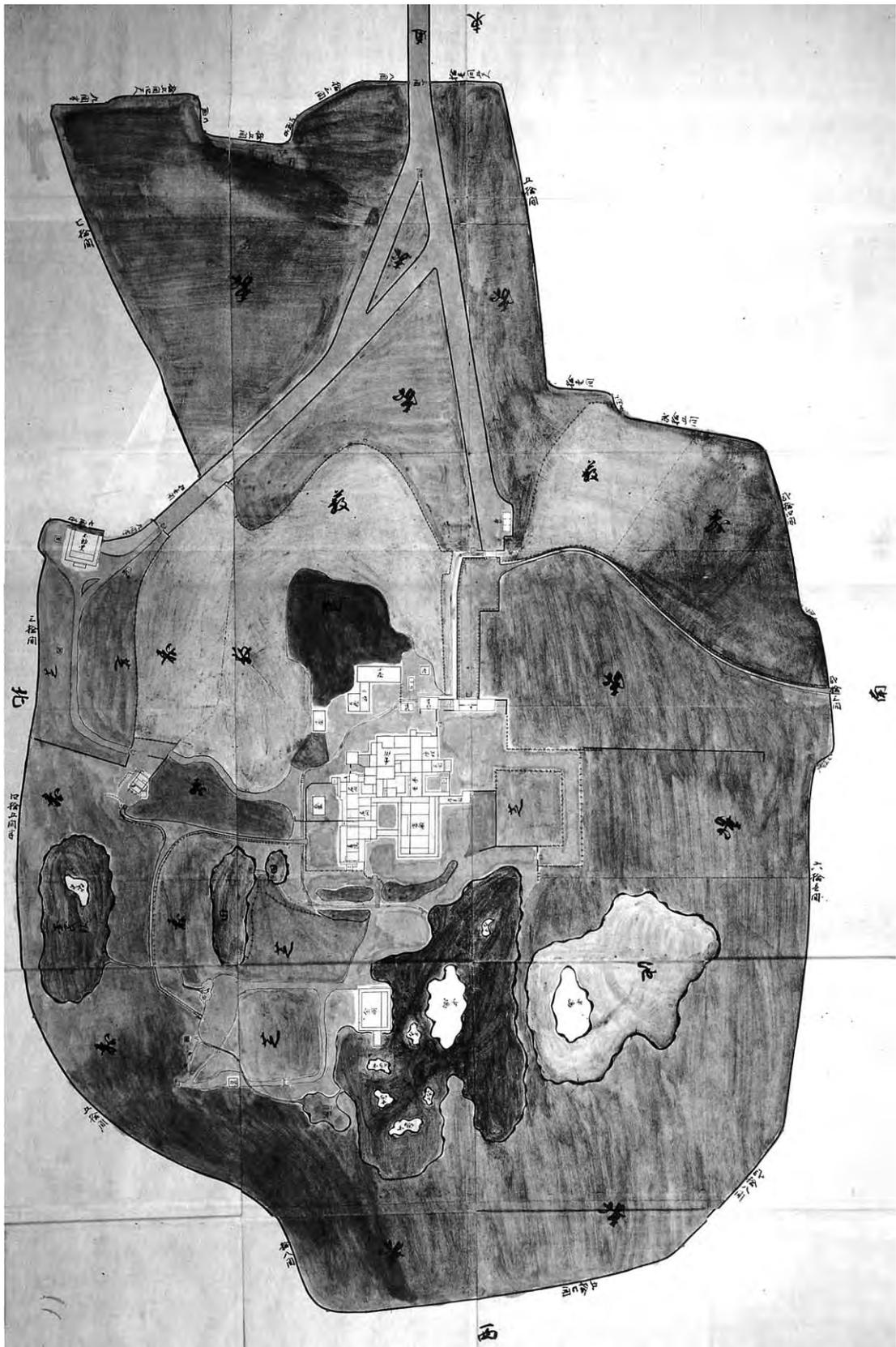
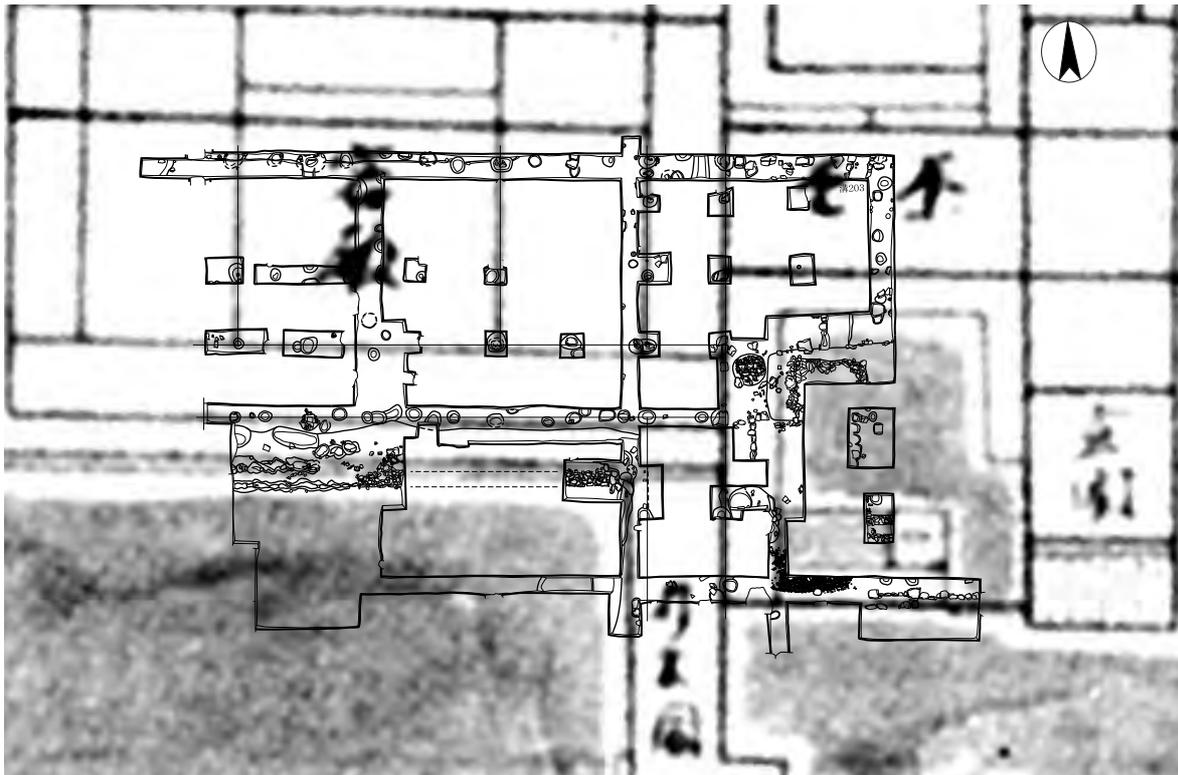


图43 『北山鹿苑寺絵図』



『北山鹿苑寺絵図』（寛政2年作、『鹿苑寺と西園寺』所収）に記載された鹿苑寺客殿（方丈）の縮尺を調整し、調査で検出した江戸時代前期の遺構と重ね合わせて作成した。

0 10m

図44 慶長期方丈間取り図（1：200）

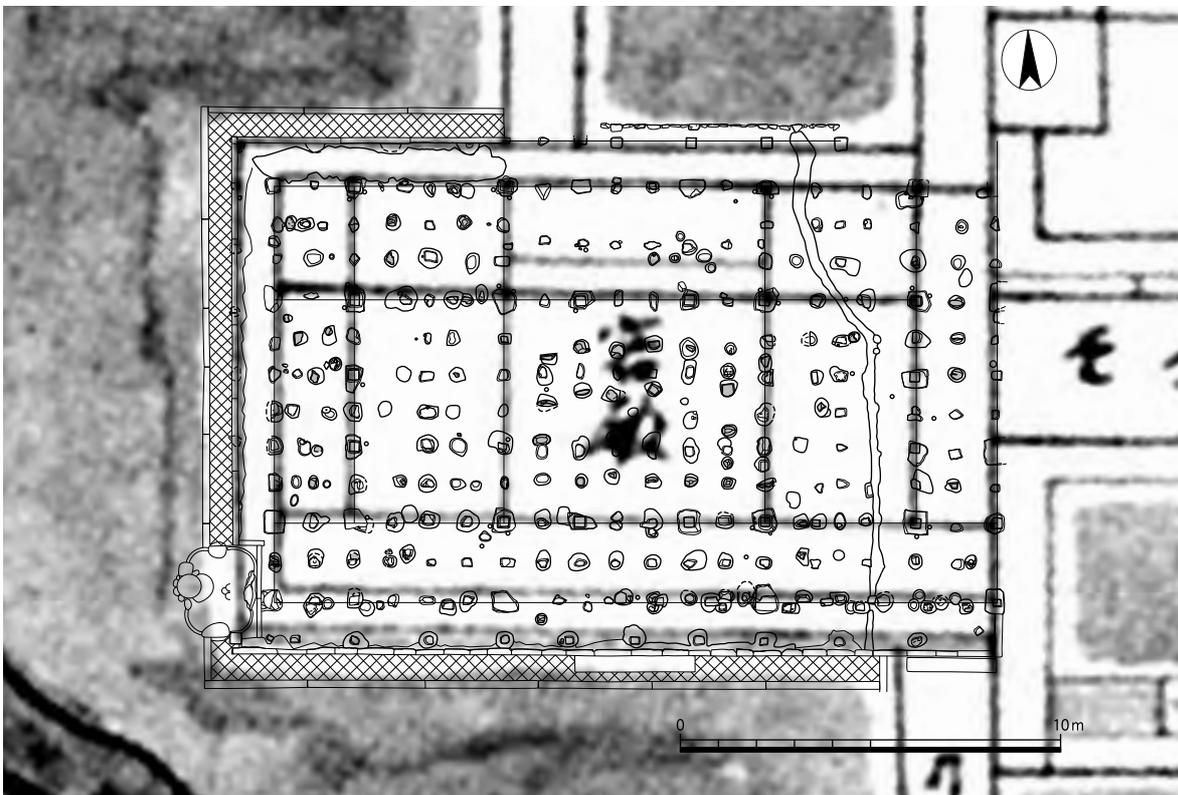


図45 延宝期方丈間取り図（1：200）

残されていることから、ここで想定した3時期の柱列は、文献の記載と一致するとみられる。

方丈南面で検出した雨落ち溝は、鹿苑寺の本山である相国寺方丈を始めとして妙心寺大方丈など江戸時代前期に建立された多くの禅宗寺院の建物に付属する雨落ち溝と同様の構造であり、共通した意匠で施工したとみられる。前述した室町時代の黒い玉石の出土状況からは、この意匠が室町時代後期にまで遡る可能性を指摘できる。

禅宗寺院の方丈は6室で構成されることが多く、現方丈の北に植えられている「陸舟の松」との位置関係からは、この時期の方丈は調査区内での検出では梁間3間半となり、仏間の奥行きが狭い復元とならざるを得ない。仏間の奥行きが狭い場合には、開山尊像が画像であれば間に合い、その例として大徳寺塔頭竜源院本堂がある。また、仏間のみが奥の外側に張り出す大徳寺塔頭竜光院本堂などの例もあることから、詳細な検討が必要である。勿論、方丈の梁間がさらに調査区の北側に延びていくことも十分に想定できることから、今後、部分的であっても北側での調査が望まれる。

しかし、前述したように、この慶長期建立の礎石の配置は、東側に2間の下間前室、3間半の室中があたり、南と東の2面に1間幅の広縁が付き、東広縁の南延長に玄関廊が付属することが明らかとなっている。図44にみるようにこの礎石配置を寛政2年の「北山鹿苑寺絵図」<sup>8)</sup>記載の客殿(方丈とも称される)の絵図と重ね合わせてみると、その南半部の間取りはほぼ一致していることが指摘できる。慶長期創建の方丈は、およそ200年後の寛政年間においても当初の規格を継承していた可能性が高い。

#### 延宝期以降

今回検出した第1面は、『鹿苑寺由緒書』<sup>9)</sup>にみられる延宝6年(1678)に後水尾院の寄進をうけ、文雅慶彦和尚により建て替えられた方丈の基壇とみられる。方丈建物の調査では、小屋裏から「延宝六年十一月吉祥日」の日付をもつ棟札が発見されており、この時期に方丈が再建されていることは確実である。この延宝期の建て替えは大規模で、慶長期造成の基壇上に約0.5~0.7mの盛土(整地層)を行い、方丈基壇を造営していることがわかった。礎石の配置からは、西に1室(狭屋之間)と、中央に6室(上間前室、上間奥室、室中、仏間、下間前室、下間奥室)、東と南の2面に広縁が付属する東西9間半・南北5間半の禅宗寺院方丈と、西・南・北の3面に落縁が付く平面形が復元できる。礎石は大型のものは切石または割石を用い、東石には自然石を使用している。方丈基壇の西・南辺、北辺の西半は、四半敷によって囲まれている。この方丈の礎石配置からは、図45にみるように「北山鹿苑寺絵図」<sup>11)</sup>記載の客殿と規模や間取りがほぼ一致しており、寛政2年から位置および規模・間取りが替わっていないことを指摘できる。

この面では、東石の抜き取り穴の検討から、数回の修築が行われたと考える。室中では当初は南北方向の大引を4基の東石おおびきで支えていたものを、のちに2基の東石で支える構造へと替わっている。上間では東西方向の大引を支える東石は2基から1基へと減っており、大引が大型化したことにより東石の数が減少したものと考えられる。この抜き取り穴の状況からは、全体におよび大規模な修理が1回あり、他に部分的な補修がなされたものと考えられる。<sup>12)</sup>

全体的な修理は、東妻飾り裏の天保6年銘墨書板材<sup>13)</sup>、さらに解体前の方丈屋根に葺かれていた「天保六年」の紀年銘獅子口などの資料(図39)があることから、天保6年の修理(建て替え)が考えられる。焼失した庫裏がこの年に再建<sup>14)</sup>されていることから妥当とみられる。

また、天保6年以前であるが18世紀後半の地鎮遺構とみられる土器埋納17があることから、この時期に部分的な補修がなされた可能性が考えられる。その後の部分的な補修には、昭和24年に行われた柱の根継ぎがあり、礎石をモルタルセメントで固定したものが<sup>15)</sup>ある。

延宝期造営の方丈は、慶長期方丈よりも南辺が約5.5m南側に移動していることから、延宝期になって北側に位置する書院が大型化したか、または建物配置が変わるなど境内で大きな造営事業が行われたことが推測される。なお、白砂が敷かれ流水文が描かれている現在の方丈西庭の北部分は、1区での土層断面の検討から、第2面とした慶長期の遺構面と連続していることが判明した。このことから、方丈西庭の地表面は、慶長期に造成された方丈の基壇面であることが明らかとなった。

また、解体修理前の方丈の礎石配置は「北山鹿苑寺絵図」記載の客殿と規模や間取りが一致していたことが判明したことにより、およそ400年前にあたる慶長期創建の方丈の規格を現在まで継承していたことがわかった。

これまで境内では各時期の建物跡を多く検出しているが、いずれの建物も柱筋の方位は舍利殿金閣とほぼ同様であり、いつの時代の造営事業も金閣を中心とする一貫した計画性のもとで行われていたことが窺える。

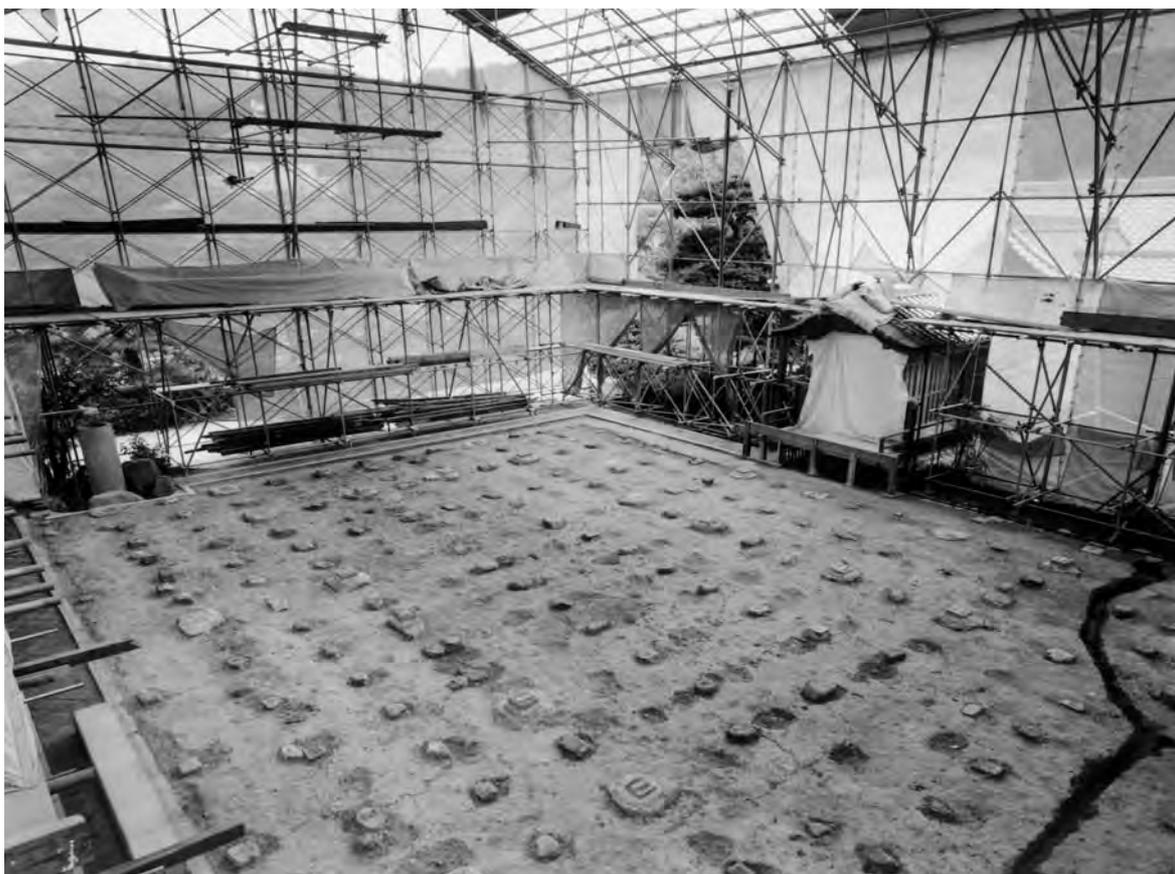
#### 註

- 1) 『増鏡』(日本古典文学大系87)「第五 内野の雪」
- 2) 川上 貢『日本中世住宅の研究』〔新訂〕中央公論美術出版 2002年
- 3) この時期の建物跡を7棟検出している。第1次D区建物20は良好に遺存していた建物跡で、会所に比定されている。礎石は花崗岩の切石や自然石を利用しており、切石の大きさは一辺が30cmであった。
- 4) 『臥雲日件録抜尤』(大日本古記録)文安五年八月十九日条
- 5) 『蔭涼軒日録』長禄三年十月十七日条
- 6) 『鹿苑日録』慶長七年六月二十三日条
- 7) 『隔裳記』寛永十九年三月二十四日条
- 8) 『北山鹿苑寺絵図』寛政二年作『鹿苑寺と西園寺』所収 図の縮尺を調整して重ね合わせた。(図43)
- 9) 『鹿苑寺由緒書』元禄十六年
- 10) 永井規男「鹿苑寺の近世建築 文雅慶彦と後水尾院」『鹿苑寺と西園寺』 思文閣出版 2004年
- 11) 『北山鹿苑寺絵図』寛政二年作『鹿苑寺と西園寺』所収 図の縮尺を調整して重ね合わせた。
- 12) 大引が大型化することにより、束石が減少することについては、財団法人建築研究協会からご教示を受けた。
- 13) 今回の方丈解体修理の際に発見されたことを、財団法人建築研究協会からご教示を受けた。
- 14) 『鹿苑寺文書』「庫裏再建記」一六六号
- 15) 昭和24年に礎石をモルタルセメントで固定したことを、財団法人建築研究協会からご教示を受けた。

参考文献

- 吉永義信「金閣寺（鹿苑寺）庭園」『名勝調査報告』第二輯 文部省 1936年  
『鹿苑』 鹿苑寺 1955年  
赤松俊秀「寺史」  
村田治郎「建築」  
吉永義信「庭園」  
赤松俊秀・川上 貢「北山殿と東山殿」『金閣と銀閣』 淡交新社 1964年  
伊藤延男編「禅宗建築」『日本の美術』第126号 至文堂 1976年  
関野 克編「金閣と銀閣」『日本の美術』第153号 至文堂 1979年  
服部文雄編「僧坊・方丈・庫裏」『日本の美術』第161号 至文堂 1979年  
川上 貢編「室町建築」『日本の美術』第199号 至文堂 1982年  
川上 貢『日本建築史論考』 中央公論美術出版 1998年  
鹿苑寺編『鹿苑寺と西園寺』 思文閣出版 2004年  
下坂 守「鹿苑寺の歴史」  
中村 一「鹿苑寺の庭園」  
永井規男「鹿苑寺の近世建築 文雅慶彦と後水尾院」  
鈴木久男「不動堂石室の文字」  
川上 貢『禅院の研究』〔新訂〕 中央公論美術出版 2005年

圖 版



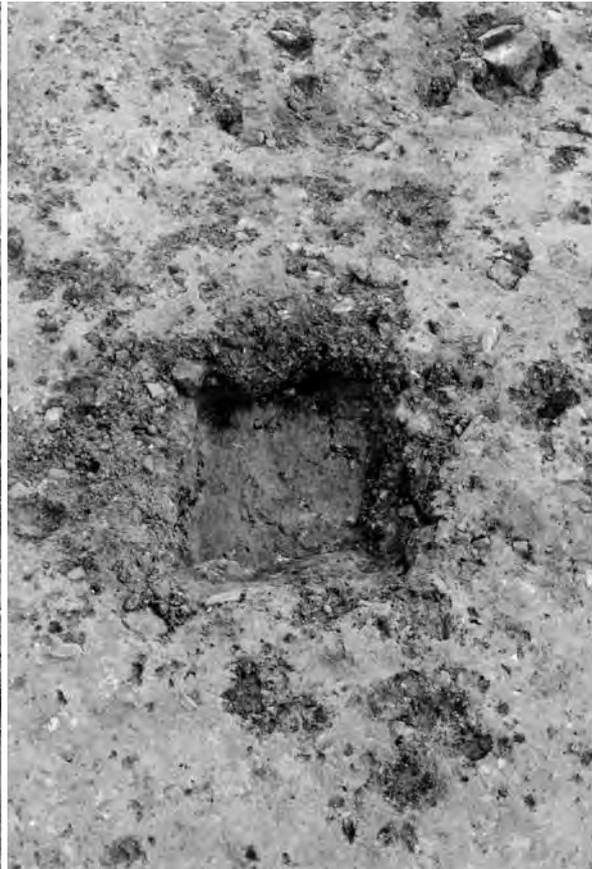
1 第1面全景（延宝期以降 南東から）



2 方丈礎石群（西から）



1 柱穴101



2 束石抜き取り穴71



3 大型礎石396と割付杭（南から）



4 束石と束石抜き取り穴105（南東から）



1 土器埋納17(南から)



2 東石抜き取り穴55(東から)



3 大型礎石428と割付杭(東から)



4 大型礎石429と割付杭・地固め跡(南東から)



1 第2面全景（慶長期から延宝期 南東から）



2 6・7区 蹲踞204（北西から）



1 2・4・37区 基壇B（南西から）



2 4区 雨落ち溝207（南東から）



3 10区 雨落ち溝207（東から）



1 3区 石列242a・242b、化粧面278・279  
(南東から)



2 5・11~16区他 東広縁から玄関部(北から)



3 1区 礎石列・石組溝203 (東から)



4 3・6区 集石238(南西から)



1 4・37区他 基壇Bと南庭(南から)



2 4区 雨落ち溝207と西壁(北東から)



3 23区 化粧面296(西から)



4 6区 化粧面219(北から)



1 12区 礎石266



2 13区 礎石265



3 17区 礎石281



4 8区 抜き取り穴208 (南から)



5 8区 抜き取り穴210 (南から)



6 18区 抜き取り穴280 (東から)



7 礎石395据え付け状況 (北西から)



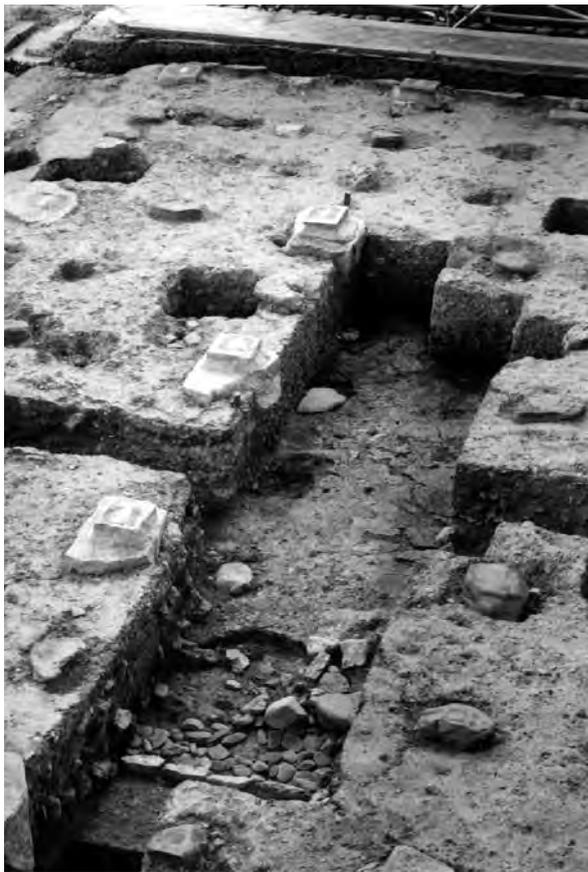
1 第3面全景（室町時代後期 南から）



2 31区 基壇E西端と雨落ち溝315（西から）



3 35区 基壇E東端（東から）



1 4区 礎石317・319 (南東から)



2 1区 雨落ち溝315 (北東から)



3 4区 礎石317・抜き取り穴316 (東から)



4 4区 礎石抜き取り穴318・礎石317 (東から)



5 2・37区 集石320 (南から)



6 37区 整地面Db (北東から)



1 第4面 基壇Gと礎石328  
(室町時代中期 西から)



2 32区 礎石抜き取り穴361  
(室町時代中期 北東から)



3 33区 礎石抜き取り穴360  
(室町時代中期 南西から)

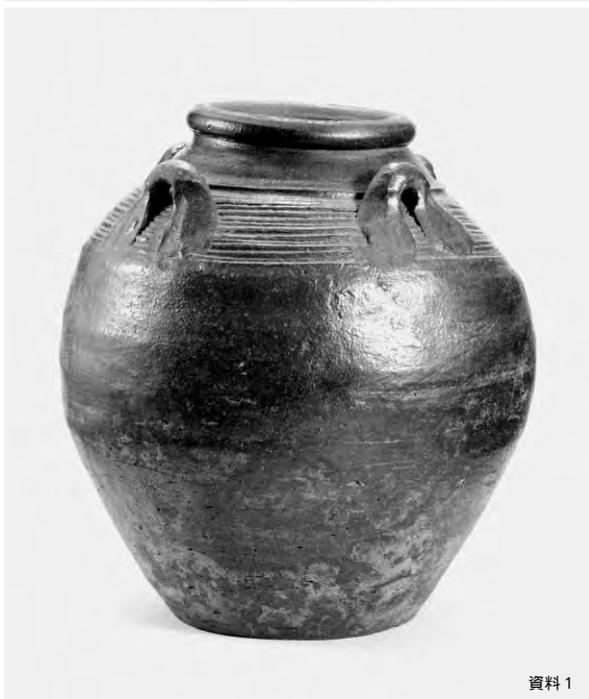


4 1区 礎石328 (北西から)



5 4区 礎石抜き取り穴367 (西から)





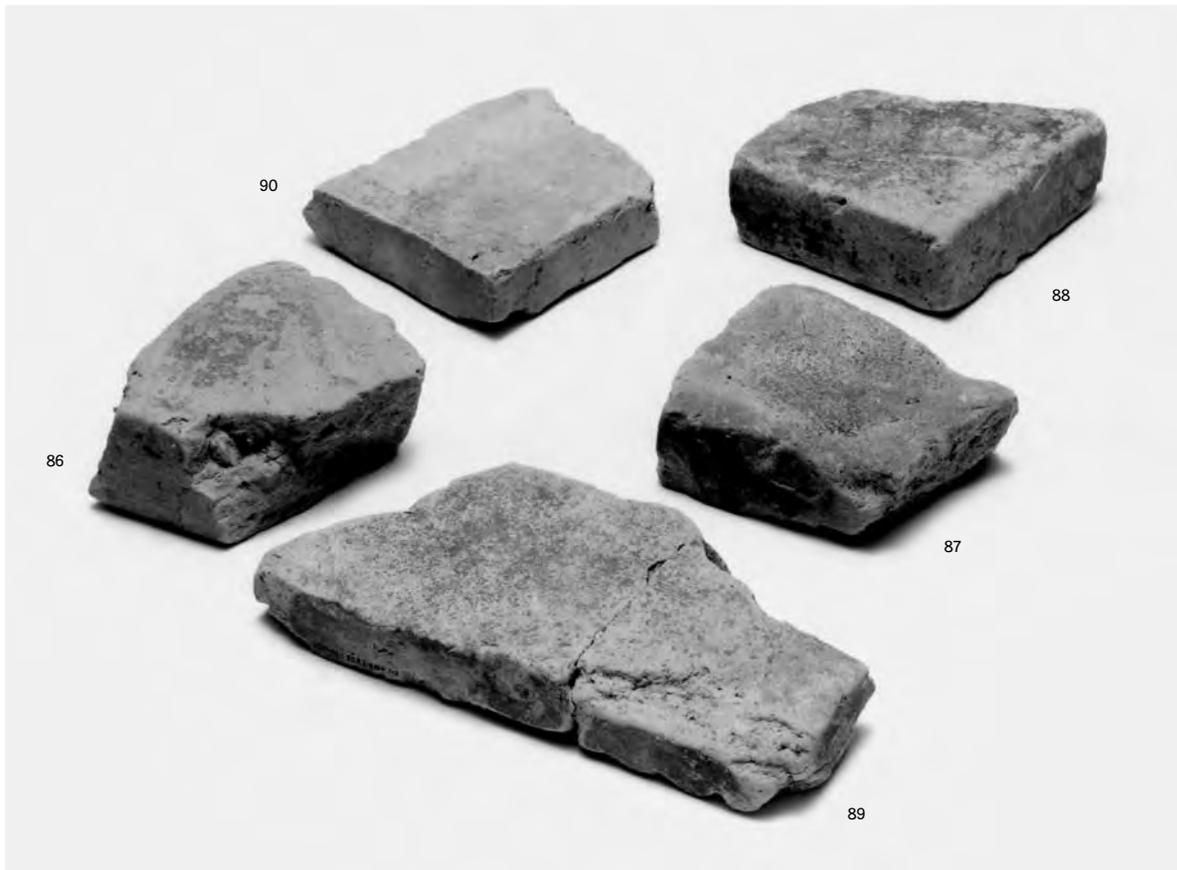




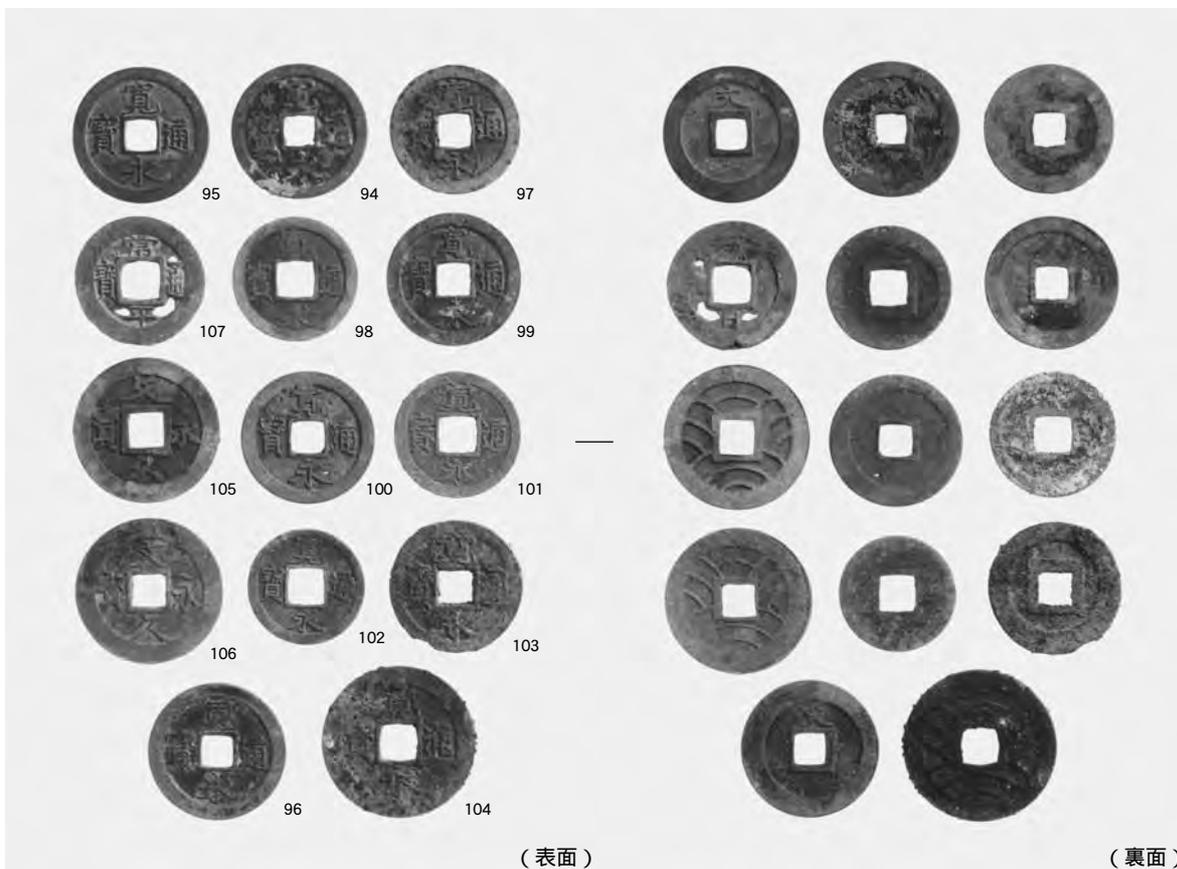
1 軒瓦



2 鬼瓦・雁振瓦・隅瓦



1 埴



(表面)

(裏面)

2 銭貨

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	とくべつしせき・とくべつめいしょう ろくおんじ (きんかくじ) ていえん							
書名	特別史跡・特別名勝 鹿苑寺 (金閣寺) 庭園							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2005-17							
編著者名	小檜山一良							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2006年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とくべつしせき・とくべつ 特別史跡・特別 めいしょう ろくおんじ 名勝 鹿苑寺 (きんかくじ) ていえん (金閣寺) 庭園	きょうとしきたく 京都市北区 きんかくじちやう 金閣寺町	26100	A105	35度 02分 10秒	135度 44分 00秒	2005年8月 3日～2006 年2月27日	300㎡	方丈解体 修理工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
特別史跡・特別 名勝 鹿苑寺 (金閣寺) 庭園	特別史跡・ 特別名勝	鎌倉時代以前	整地面	土師器、須恵器、黒色 土器、緑釉陶器、軒平 瓦	江戸時代初期の前 身方丈、室町時代 の鹿苑寺、北山殿 にあたる2時期の 礎石建物、鎌倉時 代の西園寺とみら れる整地面を検出 した。			
		室町時代	礎石建物、基壇、 雨落ち溝、溝、集 石、埋納土壇、整 地面	土師器、瓦器、焼締陶 器、施釉陶器、輸入陶 磁器、軒丸瓦、軒平瓦、 鬼瓦、塙、丸瓦、平瓦、 金銅仏、銭貨、鉄釘				
		江戸時代以降	礎石建物、基壇、 蹲踞、雨落ち溝、 石組溝、石列、集 石、土壇、土器埋 納、杭穴、叩き面、 化粧面、整地層	土師器、瓦器、焼締陶 器、施釉陶器、輸入陶 磁器、軒丸瓦、軒平瓦、 塙、丸瓦、平瓦、銭貨、 煙管、飾り金具、鉄釘、 砥石、基石、貝製基石				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-17  
特別史跡・特別名勝 鹿苑寺(金閣寺)庭園

発行日 2006年3月31日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1  
〒602-8435 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地  
〒604-0093 075-256-0961